

大分市

市内遺跡確認調査概報

— 2003年度 —

2004

大分市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成15年度に大分市教育委員会が実施した市内遺跡確認調査の概要報告書である。
- 2 本書には横尾遺跡、城原・里遺跡、大友氏館跡、中世大友府内町跡の調査成果を収録した。
- 3 発掘調査の費用は、国と県から補助金を受けて、大分市が負担した。
- 4 調査及び整理に伴う事項については、各遺跡の報告文中に記した。
- 5 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。
- 6 出土遺物、記録資料は大分市文化財資料室（大分市顕徳町3丁目2番43号）に収蔵、保管している。
- 7 中表紙に使用した「府内古園」については、所有者（高山龍五郎氏）の掲載許可を受け、大分市歴史資料館より写真提供を得た。また、長野県下諏訪町の釜遺跡については下諏訪町教育委員会、佐賀県伊万里市午戻遺跡については伊万里市教育委員会より写真提供を得た。
- 8 本書の執筆ならびに編集は各調査担当者が行い、その取りまとめを塩地が担当した。
- 9 調査体制については以下のとおりである。

大分市教育委員会 教育長 秦 政 博

文化財課

課 長	帯 刀 修 一
参 事	玉 永 光 洋
課長補佐兼文化財係長	讚 岐 和 夫
管理係	管理係長 久多羅岐 明
	主 査 平 野 勝 敏
	指導主事 姫 野 公 徳
	主 任 桑 原 治
	主 任 安 部 一 成
	主 事 三 浦 亜 紀

大分市歴史資料館

参事兼館長	木 村 幾多郎
課長補佐兼副館長	首 藤 公 洋
主 査	広 岡 道 代
指導主事	藤 沢 敏 夫
指導主事	甲 斐 猛
主 査	武 富 雅 宣
主 任	宮 崎 治
主 任	安 部 幹 夫
研修教諭	植 木 和 英
嘱 託	仲 摩 一 義
嘱 託	堤 詔 司

文化財係

指導主事	後 藤 典 幸	専門員	塔 鼻 光 司		
主任技師	坪 根 伸 也	主任技師	池 邊 千太郎	主任技師	塩 地 潤 一
技 師	高 島 豊	技 師	河 野 史 郎	技 師	中 西 武 尚
主 事	永 松 正 大	主 事	佐 藤 道 文	事 務 員	五 十 川 雄 也
嘱 託	水 町 裕 子	嘱 託	井 口 あけみ	嘱 託	松 尾 聡
嘱 託	梅 田 昭 宏	嘱 託	萩 幸 二	嘱 託	羽 田 野 達 郎
嘱 託	佐 藤 暁 子	嘱 託	勝 間 田 あ や	嘱 託	奥 村 義 貴
嘱 託	岩 尾 美 保 子	嘱 託	佐 藤 孝 則	嘱 託	梅 木 信 宏
嘱 託	宮 田 剛	嘱 託	吉 本 明 弘	嘱 託	羽 田 野 裕 之
嘱 託	江 上 正 高	嘱 託	上 野 淳 也	嘱 託	秦 さとみ
嘱 託	大 野 瑞 恵	嘱 託	小 橋 寛 之	嘱 託	小 住 武 史
嘱 託	衛 藤 亮 介	嘱 託	松 竹 智 之	嘱 託	荻 谷 史 徳

橫尾遺跡



2004

第1章 はじめに

1、調査に至る経過

横尾道跡の調査は大分市が平成3年度から開始した大分市横尾土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として行われてきた。平成12・13年度に横尾貝塚の西側隣接地において実施された横尾道跡第82次調査によって、縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、アカホヤ火山灰層の下位から建築部材などの加工木を「コ」の字状に配置した「水場の遺構」やその内部からカゴに収納された状態で姫島産黒曜石が発見されたことを受け、平成13年9月より国庫補助事業による範囲確認調査が実施されることになった。平成14年度からは横尾貝塚周辺地の約20haを対象として2期6箇年の確認調査が計画された。また、同年度からは大分市横尾道跡調査指導者会が設置され、今後の調査計画を進めていくことになった。

平成15年度においては第82次調査によって出土した建築部材の保存処理作業が計画されていたため、これに先立って、「水場の遺構」の全様相を目的とした82次調査の追加調査を行い、横尾貝塚の西側丘陵部の範囲確認調査についても実施している。

なお、今回の概要報告では「水場の遺構」の位置づけを検討する上で周辺調査区の状況を把握する必要があるため、平成14年度の調査概要についても改めて報告する。

2、調査組織

大分市横尾道跡調査指導者会

- 会 長 渡辺 誠 (名古屋大学名誉教授)
副会長 岡村 道雄 (独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長)
委 員 浅川 滋男 (鳥取環境大学 環境デザイン科 教授)
金原 正明 (奈良教育大学 総合教育課程文化財コース 古文化財科学 助教授)
中村 俊夫 (名古屋大学年代測定総合研究センター 教授)
那須 孝梯 (大阪市立自然史博物館 館長)
町田 洋 (東京都立大学 名誉教授)
松井 章 (独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター主任研究官)
山田 昌久 (東京都立大学 人文学部史学科 助教授)
玉田 芳英 (文化庁文化財部記念物課 文化財調査官)平成14年度
岡田 康博 (文化庁文化財部記念物課 文化財調査官)平成15年度

調査指導 清水 宗昭 (大分県教育庁文化課参事) 渋谷 忠章 (大分県教育庁文化課参事兼課長補佐)

調査主体 大分市教育委員会 教育長 薬 政 博

調査担当 塩地 潤一 奥村 義貴 小住 武史 羽田裕格之 小橋 寛之 江上 正高 衛藤 亮介
発掘調査従事者

麻生 重信 飯田 美子 伊村千恵子 梅田美代子 江崎 義春 江藤アヤ子 太田 重行 大塚 弘子
片野アケミ 岸田ヤス子 清武 正幸 清武 元子 古賀 蘭子 佐藤美紀子 佐藤 美子 園田 哲子
神野 聖土 竹中 久美 田原ヒト子 姫野トシ子 姫野ムツ子 水井 明美 向井麻規子 村谷 初代
山村シズ子

整理作業従事者

安藤香奈子 伊賀 円香 川筋智栄子 工藤雄実子 佐藤 志信 平田美智子 法華津幸子 本田理恵子
村田 麻美 森永 美紀 吉田 睦子 (五十音順)

なお、作業分担については以下のとおりである。

- 1、遺構実測については調査担当者をはじめ、梅田昭宏、松竹智之（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行い、地形測量については写測エンジニアリング株式会社に委託した。
- 2、遺構略測図の表記については遺構の新旧関係を実線で示し、下層遺構については点線、以下一点波線、二点波線、三点波線の順で記した。また、表記上遺構の新旧関係が不明瞭な場合は矢印で補足した。
- 3、遺物実測については調査担当者をはじめ、佐藤、森永、伊賀、工藤、安藤、吉田、川筋が行い、大形石核については雅企画有限会社に委託し、その図面校正は萩 幸二（大分市教育委員会文化財課嘱託）が担当した。
- 4、遺構の写真撮影については調査担当者が行い、空中写真については写測エンジニアリング株式会社に委託した。
- 5、トレスならびに拓本については佐藤、森永、工藤、安藤、吉田、川筋が担当した。
- 6、本書の執筆については第88次調査の概要を羽田野が行い、出土遺物の内、姫島産黒曜石製の大形石核については萩が担当した。その他の執筆ならびに編集については塩地が行った。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

横尾遺跡は市街地より南東へ約7.5kmの大分市東部に位置し、県内最大河川である大野川の分流、乙津川下流左岸に沿って南北方向に広がる鶴崎丘陵上ならびに東側斜面地に展開する、縄文時代～近世に至る複合遺跡である。この乙津川については先述のとおり、現在は大野川の分流となっているもの、中世においては乙津川が大野川本流であり、近世に行われた治水事業によって改変されたとする注目される見解が提示されている。また、乙津川河口の乙津地区には文献上、「高田庄之船津」が推定され、この船津から拱津方面への廻船が存在し、港湾都市的な景観が形成されていた可能性についても指摘されている。以上のことから、本遺跡は中世段階までは大野川本流沿いに形成されていたことになる。



第1図 関連遺跡分布図

既往の調査成果についてはすでに2001年度の概報においてまとめられているため、詳細についてはそれに譲るとして、とりわけ縄文時代の遺構群については横尾貝塚をはじめとして、乙津川に向かって開口する開折谷の周辺に展開しているようである。

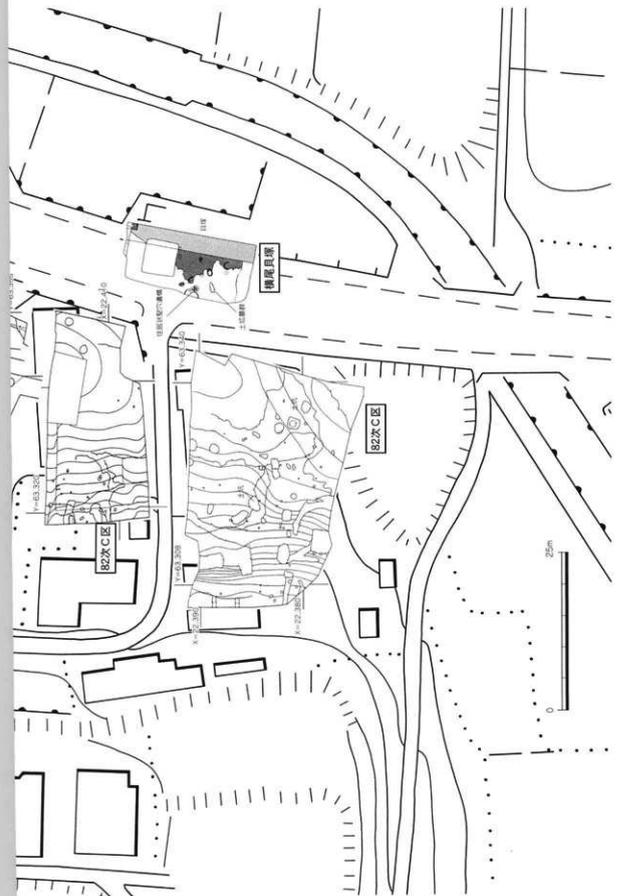
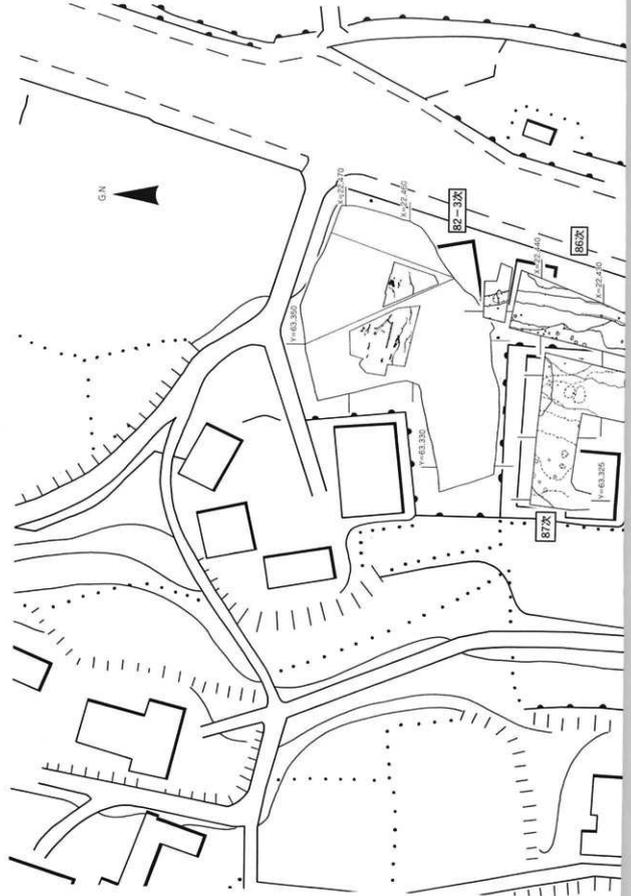
また、横尾遺跡の西側に広がる丘陵部には後期旧石器時代～縄文時代後晩期にかけて形成された一方平Ⅰ遺跡が存在する。その中でも縄文時代早期後半段階の状況は特筆され、出土石器の大半が石礫とその製作に関わる石核や剥片から構成され、その分布状況から石礫を中心とする製作スポットと推測されるエリアが少なくとも11箇所確認されている。姫島産黒曜石についても千点以上出土しており、県内屈指の石礫製作跡と位置づけられている。さらに、当該遺跡から出土する姫島産黒曜石製の石核についてはこれ以上剥離が不能なほど究極的に進んだものが多く、注目される。一方、香川県金山産と推定されるサヌカイトについても79点出土しており、すでに遠隔地から石材を入手していた可能性が示唆される。このような現象については熊本県境に位置する大分県荻町右

京西遺跡においても認められ、縄文時代早期後半頃には遠隔地の石材が、一定量安定的に入手されるようになることが指摘されている。横尾遺跡出土の姫島産黒曜石を検討する上で、極めて重要な所見と判断される。

- 1：横尾遺跡 2：横尾貝塚（縄文時代前・中期） 3：一方平1遺跡（縄文時代早期） 4：井ノ久保遺跡
 5：松岡古窯跡群 6：猪野中原遺跡 7：猪野新土井遺跡 8：小池原貝塚（縄文時代後期）
 9：古城山遺跡（縄文時代早期） 10：丹生遺跡群（縄文時代早期）



第3図 調査区位置図



第4图 横尾貝塚 周辺遺構分布図 (S=1/600)

第3章 平成14年度の調査概要

(1) 横尾遺跡第86次調査

調査地は大分市大字横尾字江又に位置し、横尾貝塚の北西部に近接する。当該地は県内最大河川である大野川の分流、乙津川左岸に沿って南北方向に広がる鶴崎丘陵先端部の標高約8～13m地点にあたり、平成12・13年度に実施された横尾遺跡第82次調査において縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、同早期末頃に比定される「水場の遺構」ならびに姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で発見された谷部の南側隣接地に所在する。この開析谷の南側から横尾貝塚にかけては現状でも比較的平坦な地形が認められ、横尾貝塚の調査において竪穴住居跡の可能性が指摘されている竪穴遺構（縄文時代後期前葉頃）が検出されていることをはじめ、第82次調査においても開析谷を埋める中世の大規模造成に伴って、当該地周辺から縄文土器が大量に廃棄されていることから、当地一帯が縄文時代後期前葉頃における居住空間として機能していた最有力候補地と想定し、平成14年9月11日～平成15年3月31日まで確認調査を実施した。調査面積は約206㎡であり、出土遺物については現在コンテナ1箱に保管している。

今回の調査では、障地盤と一部、縄文時代早期に形成された堆積土層を基盤面として溝状遺構（86SD001・015）ならびに柱穴跡が検出された。（第5図）これらは主に古代～近世にかけて形成されたものであると想定され、縄文時代における顕著な遺構については確認できなかったものの、当該地が周辺調査地よりも障地盤の検出レベルが高く、さらに調査区西側において東側から西側に傾斜する堆積土層が確認された。以下に、その概要についてまとめる。溝状遺構（86SD001）については調査区を南北に縦断し、隣接する第82次調査区において検出された溝状遺構（82SD005）につながる可能性が高いものである。（第4図）幅約2.2m、深さ約1.8mを測り、断面形状は逆台形を呈す。少なくとも2度の掘り返しが行われているものの、大きな時期差は認められない。これらの溝状遺構からは肥前磁器丸陶片・京焼風陶器陶片など一定量の遺物が出土しており、それらの帰属年代から18世紀前半頃には埋没したものと考えられる。両者共に滞水の痕跡は認められない。

また、この溝状遺構（86SD001）は調査区北端部において先述の82SD005と同一のものと判断される溝状遺構（86SD015）と重複しており（新旧関係については古い方から86SD015→86SD001）、その最終掘り返し段階において拳大～人頭大の礫を組んだ石組（86SX023）が設置されている。石組の機能については現状で明確な見解を提示し得ないものの、障地盤を掘削して形成された当該遺構にあって、遺構の重複が認められる都合上、溝の北側壁面のみが削平された溝状遺構（86SD015）の埋土となることから、その土留めとして構築された可能性を指摘しておきたい。

一方、86SD015については幅約1.7m、深さ約0.9mを測り、断面形状は逆台形を呈す。86SD001同様に、障地盤を掘削して形成された遺構であるものの、断面形状は前者よりも直線的ではなく、底幅も広い。また、埋土や溝底面のレベルについても差異が認められる。さらに、出土遺物については調査面積が狭小であったことをその要因として否定できないものの、白磁焼Ⅳ類片1点のみである。隣接する第82次調査において検出された溝状遺構（82SD005）の様相と近似する。

以上のことから、86SD001については現状で82SD005を18世紀前半段階において掘り返した溝状遺構である可能性が想定されるものの、86SD015さらには82SD005の埋没年代については今後に残された課題である。

今回の調査によって最も注目される所見は調査区のほぼ全域で障地盤が検出され、一部、調査区西側において東側から西側に傾斜する堆積土層が確認されたことである。この障地盤については先述した開析谷の南側から横尾貝塚にかけて認められる比較的平坦な現況地形を構成する基盤面と位置づけられるものであり、堆積土層については西側隣接地で実施した第87次調査の成果から、遅くとも縄文時代早期中頃～後葉頃に形成されたものと判断される。

以上のことから、縄文時代においてもこの開析谷の南側から横尾貝塚にかけて南北方向に広がる微高地の存在が指摘され、今回の調査においては顕著な縄文時代の遺構は確認できなかったものの、当地一帯が縄文時代後期前葉頃における居住空間として機能していた可能性は依然として高いと判断される。今後の調査に期待したい。

(2) 横尾遺跡第87次調査

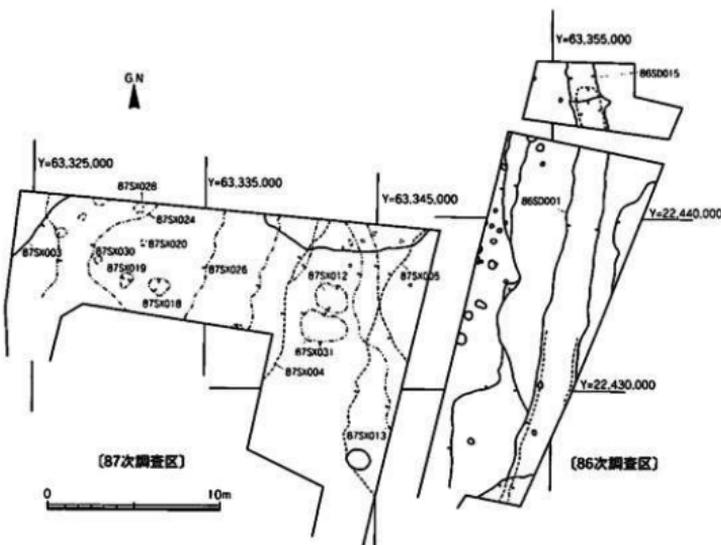
調査地は大分市大字横尾字江又に位置し、横尾貝塚の北西約30m地点、横尾遺跡第86次調査区の西側隣接地にあたる。今回の調査はこれまでの横尾貝塚周辺地における調査成果を踏まえ、縄文時代後期前葉頃における居住空間の確定を第一義的な目的として平成14年9月11日～平成15年3月31日まで確認調査を実施した。調査面積は約228㎡であり、出土物については現在コンテナ約110箱に保管している。

調査の結果、深さ約2mにも及ぶ堆積土層が確認され、各時代の堆積土層を基盤面とする遺構群が検出された。以下に、その様相についてまとめる。(第5図)

1. 中世(第6図)

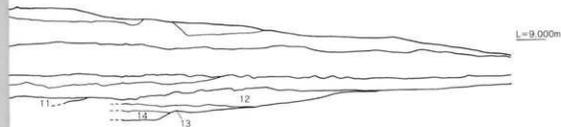
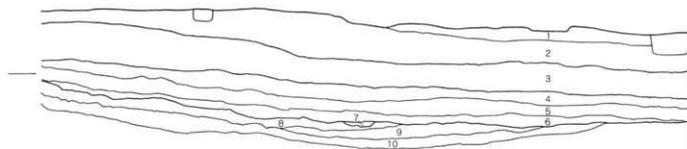
表土直下において確認された堆積土層(87SX001・002・003・004・005)が該当する。上から大きく茶褐色土層と黒褐色土層の2層に区分され、両者ともに大量の礫と遺物が内包されている。深さは合わせて約1.5mを測り、中世の遺物と共に古代や縄文時代に比定される大量の遺物が出土している。中世の遺物としては土師器環・同鍋や研磨土師器碗をはじめとして、白磁碗IV-2-a類・同皿Ⅲ類や和泉型瓦器碗・同皿などが認められ、古代の遺物については土師器環a・同蓋aを中心として、黒色土器A類碗c・同鉢や土師器壺・同甕・同脚付鉢・同移動式甗などが出土している。また、風字硯や「大」と刻書された土師器蓋aをはじめ、防長系緑釉陶器や丸瓦など、官衙遺跡特有の遺物も出土しており、注目される。さらに、縄文時代の遺物としては出水式土器深鉢や中津式土器深鉢

をはじめ、福田KⅡ式土器深鉢・同鉢や小池原下層Ⅱ式土器深鉢、西平式土器深鉢などの縁帯文土器、そして曾畑式土器深鉢や轟B式土器深鉢などが認められる。この他にも炬島産黒曜石製大形石核や底部穿孔土器など特筆される遺物も出土している。これらの残存状況については極めて



第5図 横尾遺跡第86・87次調査区遺構略測図(1/300)

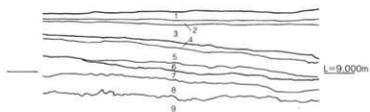
調査区北壁断面図 (WP-EP)



L=9.000m



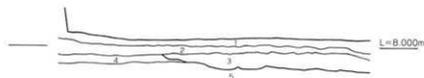
調査区西壁土層断面図 (SP-NP)



L=9.000m



調査区中央土層断面図 (SP-NP)



L=8.000m



調査区西壁土層注記

- 1: 表土
- 2: 茶褐色土 (表土)
- 3: 茶褐色土 (礫を多く含む) (SX001)
- 4: 黒褐色土 (礫を僅かに含む) (SX005)
- 5: 暗黒褐色土 (礫を僅かに含む) (SX005・010)
- 6: 暗灰黒褐色土 (礫を僅かに含む) (SX005・010)
- 7: 暗茶褐色土 (礫を僅かに、黄色粒子を多く含む) (SX024)
- 8: 暗茶褐色土 (白色粒子を多く、黄色粒子を多く含む) (SX025)
- 9: 暗茶褐色土 (SX027)

調査区中央土層注記

- 1: 灰茶色土 (粘石、礫を多く含む) (SX005・010)
- 2: 淡灰茶色土 (淡茶色ブロック土を僅かに含む)
- 3: 淡灰茶色土 (アカホヤならびに淡茶色土ブロックを多く含む) (SX008)
- 4: 灰茶色土
- 5: 暗灰茶色土 (SX013)

調査区北壁土層注記

- 1: 暗茶褐色土 (表土)
- 2: 暗茶褐色土 (礫を僅かに含む) (表土)
- 3: 茶褐色土 (礫を多く含む) (SX001・003)
- 4: 黒褐色土 (礫を僅かに含む) (SX004)
- 5: 暗黒褐色土 (礫を僅かに含む) (SX005・010)
- 6: 暗灰黒褐色土 (礫、白色、黄色粒子を僅かに含む) (SX005・010)
- 7: 粘土 (SX028)
- 8: 暗茶褐色土 (礫を僅かに、黄色粒子を多く含む) (SX024)
- 9: 暗茶褐色土 (白色、黄色粒子を多く含む) (SX025)
- 10: 暗茶褐色土 (白色粒子を多く、黄色粒子を僅かに含む) (SX025)
- 11: 暗茶褐色土 (粘性が多し、黄色、白色粒子を僅かに具、賦骨を多く含む) (SX026)
- 12: 暗茶褐色土 (粘性あり)
- 13: 黄褐色土 (アカホヤならびに暗黒褐色土ブロックを多く含む) (SX008)
- 14: 暗黒褐色土 (粘性あり)

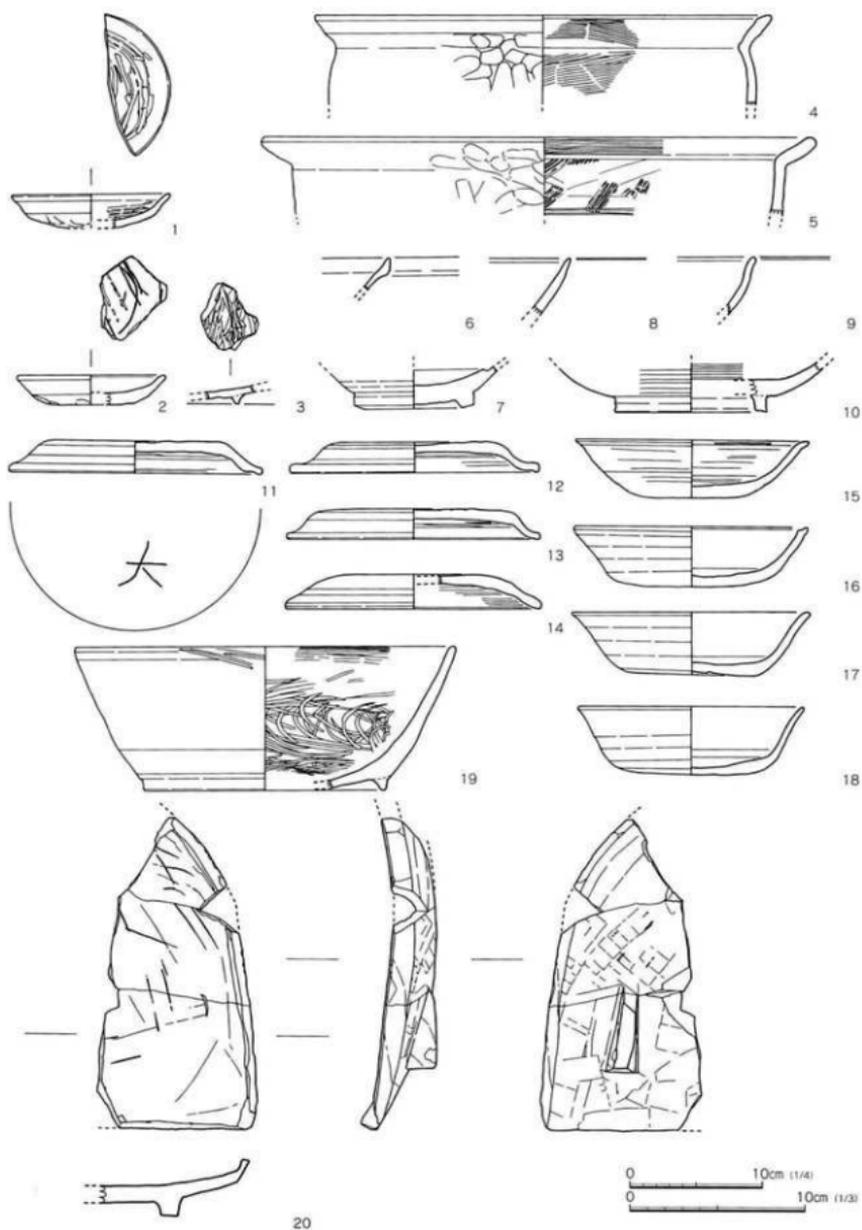
記

石、礫を多く含む) (SX005・010)

淡茶色ブロック土を僅かに含む)

アカホヤならびに淡茶色土ブロックを多く含む) (SX008)

(SX013)



第7圖 中世堆積土層出土土器実測図(1) (1~3・6~20:1/3、4・5:1/4)

良好であり、完形品をはじめ、それに近い資料が一定量認められる。

以上のことから、これらの出土遺物については中世段階に調査区南西方向から廃棄されたものと判断され、今回出土した遺物の属層年代と齧齧が生じる可能性が残るものの、調査区北側に隣接する第82次調査地において確認された開折谷を埋める14世紀前半頃の大規模造成との関連性が注目される。

出土遺物（第7・8図）

中世堆積土層から出土したものである。第7図の1・2については和泉型瓦器小皿、3については同瓦器碗である。1・2は共に口縁部内外面には横ナデ、底部外面には指頭痕を明瞭に残すものの、1は内面見込み部分に幅2～3mm前後の太い暗文が連結輪状に施され、2は内面見込み部分に幅1mm前後の細い暗文が連結輪状に施された後、幅2mm前後の太い暗文が平行線文状に施される。3は断面三角形の高台を貼付する碗で、底部外面には指頭痕を明瞭に残し、内面見込み部分には幅2～3mm前後の太い暗文が施される。

4・5は土師器鍋である。両者ともに頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し、外面にはナデ、内面にはハゲ目が施される。

6・7は白磁碗である。6は大宰府陶磁器分類のIV類、7はIV-2-a類にあたる。⁴¹⁾

8は土師器環である。内傾気味に立ち上がり、口縁端部は細く仕上げる。内外面共に横ナデが施される。色調は淡褐色を呈し、胎土は0.1mm程度の褐色粒子を僅かに含むものの、きめ細かく精良である。

9・10は土師器碗である。9は器面の剥落が認められるため断定できないものの、両者ともに研磨土師器と判断される。9は口縁部が外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。外面には横ナデ、内面にはヘラミガキと思われる痕跡が残る。10は外面下地が小さく外へ張り出す断面長方形の高台が貼付され、内外面共にヘラミガキが施される。

11～14は土師器蓋である。口縁端部の屈曲が僅かに認められるもの（11～13）と端部の屈曲が認められないもの（14）に区分される。

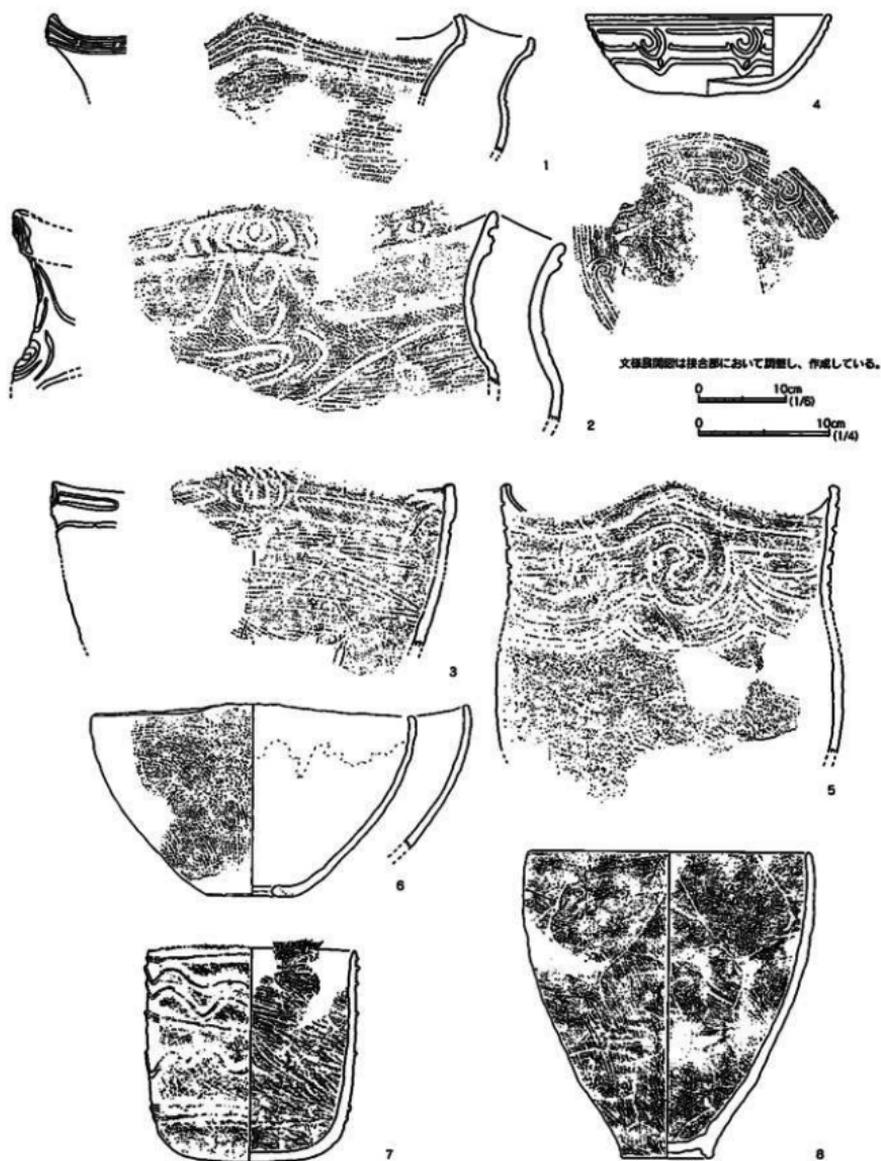
両者共に内外面にはヘラミガキが渦巻状に施される。⁴²⁾ また、12には焼成前に施された「大」と判読できる刻雷が認められる。

15～18は土師器環である。大宰府系の環d（15）と環a（16～18）に区分される。15については口径と底径の差が大きく、体部外面下半部には回転ヘラケズリが施される。また、内外面ともにミガキa2が認められ、口縁端部内面に平坦面を形成することから「壺後型環d」と位置づけられているものである。⁴³⁾ 16～18については内外面共に体部～口縁部にかけては横ナデが施され、調整不明瞭のものを除き、底部はヘラ切り後ナデ調整が認められる。16の口唇部には沈線が施されているものの、全周せず、一部素口縁となる。

19は黒色土器A類碗cである。断面三角形の短い高台を貼付し、体部～口縁部にかけては直線的に立ち上がる。口縁部外面および内面全面が黒色化しており、体部外面下半部には回転ヘラケズリが施される。また、口縁部外面および内面全面はヘラミガキによる器面調整が行われ、基本的には横方向に施されるものの、体部内面下半部にはラセン状に認められる。

20は陶碗である。平面形が「風」の字形を呈す風字碗と判断され、碗面には顕著に使用痕が認められる。碗頭部～縁部にかけて折れ曲がり、外面には長方形の脚が削り出される。碗内面はナデによって仕上げられ、外面は全体的にヘラケズリが施される。また、碗頭部内面には叩き具と思われる痕跡が残されていることから碗頭部の折り曲げに際し、叩き具を使用した可能性が示唆される。

第8図の1は西平Ⅰ式土器の深鉢である。⁴⁴⁾ 波状口縁を呈し、「く」の字状に屈曲し、内傾気味に立ち上がる。波頂部上面には対となる2つの刺突文が施され、口縁部と胴部上半部外面に磨滑縄文帯を構成する。口縁波頂部には2本の横位沈線文の間に鉤弧状の文様が施され、上下の横位沈線文に平行して両端部を短く上下に折り曲げた沈線文が描かれる。胴部の磨滑縄文帯には上位から刺突文、横位沈線文、鉤弧状の文様とそれに繋がる沈線文、



第8圖 中世堆積土層出土土器実測図(2) (1~5・7:1/4、6・8・文様展開図:1/6)

さらに両端部が短く折れ曲がる沈線文、緩やかな弧線文といった文様が認められる。器面は内外面共に丁寧に研磨されている。

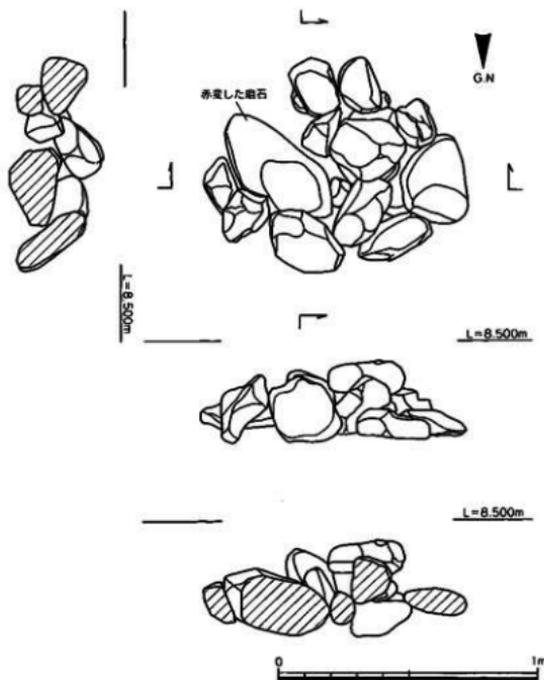
2・3は小池原下層Ⅱ式土器古段階の深鉢である。⁴⁸⁾ 2は波状口縁を呈し、口縁部には一条の沈線文が施され、シンメトリーになる同心円状の文様によって繋がる。頸部には波頂部下において口縁部と胴部の文様を繋ぐように逆三角形モチーフの文様が描かれ、胴部には形態化した入り組み状の沈線文と考えられる文様が施される。また、文様部には縄文が認められるものの、均質には施されていない。胴部外面の屈曲部以下には横方向の条痕、その他の部位にはナデ調整が施される。3は波状口縁を呈し、波頂部上面には刻目が施される。口縁部には隅丸長方形の文様が描かれ、シンメトリーになる同心円状の文様によって繋がる。口縁部と頸部の境には一条の沈線文が施され、同心円状の文様の下位において「V」字状に折れ曲がる。「V」字状の区画内には刺突文が認められる。口縁部外面には縄文、胴部外面ならびに内面全体には条痕が施される。

4は福田KⅡ式土器古段階の鉢である。⁴⁹⁾ 器面は内外面共に縦方向の丁寧な研磨が施され、外面には沈線の一部が途切れて鉤手状になった渦巻文が繰り返して描かれる。磨消縄文帯には僅かに赤色顔料が残る。

5は波状口縁を呈し、外面上半部には沈線による渦巻文とその直下に平行する2条の山形波状文が描かれる。器面調整については外面には条痕後横方向のナデ、内面には横方向のナデが施され、縄文は認められないものの、中津Ⅱ式土器の影響が示唆される。

6は粗製の底部穿孔土器である。波状口縁を呈し、底部には焼成前の穿孔が認められる。内外面共に条痕が施されるものの、底部外面～内面のほぼ全面にかけて白色物の付着が認められる。この白色物については特に底部外面～穿孔部、さらに、内底部にかけて厚く付着しており、破片の断面観察からは土器そのものが白色化している可能性も想定されるものである。また、内面下半分については、白色物が付着する前に煤が付着している可能性が指摘されるため、煮炊具と判断される。さらに、口径に対して底径が極めて小さく、底部の断面形状も球形を呈していることから、自立させて使用するものではなかったと想定される。詳細については第5章にて検討する。

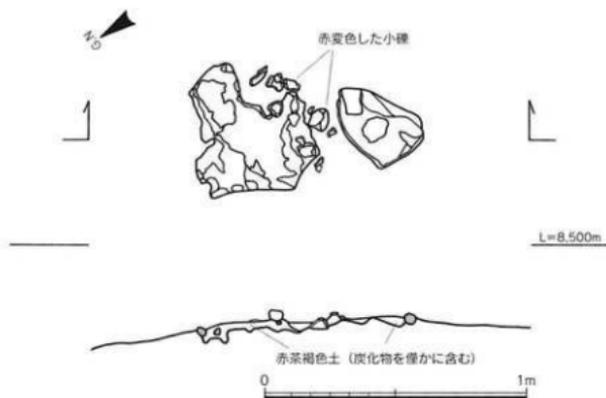
7は轟B式土器の深鉢である。口唇部は細く仕上げられ、その全面に刻目が施される。底部は丸底を呈し、胴部～口縁部にかけてはほぼ直線的に立ち上がる。外面には口縁部～胴部下半にかけて7条の隆起線が貼付され、口縁部～胴部



第9図 87SX018実測図(1/20)

にかけては、5条の低く細身の隆起線が横位直線状と波状にめぐり、その下位には2条のやや太めで、断面に丸みを帯びた隆起線が貼付される。器面調整としては外面には条痕の後ナデ、内面には右下がり方向の条痕、内底部にはナデが施される。以上の特徴から、高橋分類の轟4式土器に相当するものと判断される。⁽⁸¹⁾

8は粗製の深鉢である。底部は高台状を呈し、胴部へ口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げ、外面胴部上半には右下がり方向の条痕、胴部下半には斜め方向の条痕の後ナデ、内面の胴部上半には条痕後斜め方向のナデ、胴部下半には横方向のナデが施される。これらの調整が変化する場所については内外面共にほぼ同じ位置にあたる。高台状の底部畳付部分には網代痕跡が認められる。



第10図 87SX019実測図 (1/20)

次調査において確認された南北方向に伸びる微高地と本調査区の西側に広がる丘陵斜面地にかけてレンズ状に堆積したものであり、当該地帯において北側に向けて開口する谷部の存在が想定される。

配石遺構 (87SX018) (第9図)

90cm×100cm程の範囲に大小18個の円礫を配置した遺構である。設置に伴う掘り方は認められず、円礫を皿状に配し、その周りに7個の円礫が立てかけるように並べられている。その内最も大きな円礫については擦痕が認められ、石皿として使用された可能性が指摘されるものの、この石皿のみに被熱による赤変が認められることから、配石遺構を構成する円礫として転用されたものと判断される。

地床炉跡 (87SX019・020・028・030) (第10図)

平面不整形を呈す4基の焼土塊が検出されており、堆積土層を掘り込んで構築された遺構と判断されるものである。その中でも87SX019については50cm×90cm程の範囲に焼土が広がり、焼土が希薄となる中央部上面には被熱により赤変した小罅が14点確認されている。

3. 縄文時代前期前葉頃

先述した南北方向に伸びる微高地の西側緩斜面において確認された貝・獣骨層 (87SX026) ならびに土坑 (87SX012) が該当する。

貝・獣骨層 (87SX026)

微高地側から廃棄されたものであり、貝殻やシカの角、イノシシの下顎骨をはじめとして、轟B式土器深鉢や無文土器深鉢、大形石鍾や焼石などが

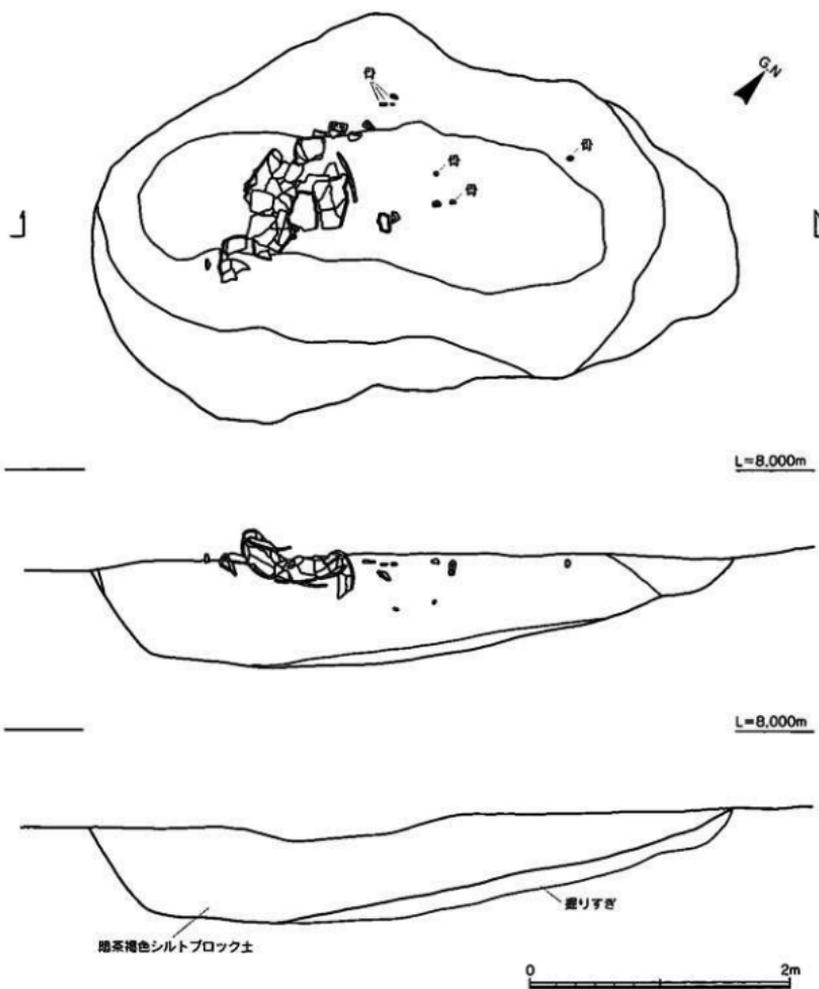


第11図 87SX012出土土物配置図

出土している。貝殻については遺存状態があまり良くないため、貝類の同定はできていないものの、南北約100cm×東西約70cmの範囲に密集し、当該期に比定される堆積土層全域には散布していないようである。出土遺物の様相から後述する土坑(87SX012)より後出して形成された可能性がある。

土坑(87SX012) (第11・12図)

貝・獣骨屑の東側隣接地において検出された遺構で、アカホヤ火山灰層の下部にあたる縄文時代早期中葉～後葉頃に比定される堆積土層を基盤面として形成されている。平面楕円形を呈し、最大で長さ2.47m、幅1.44m、

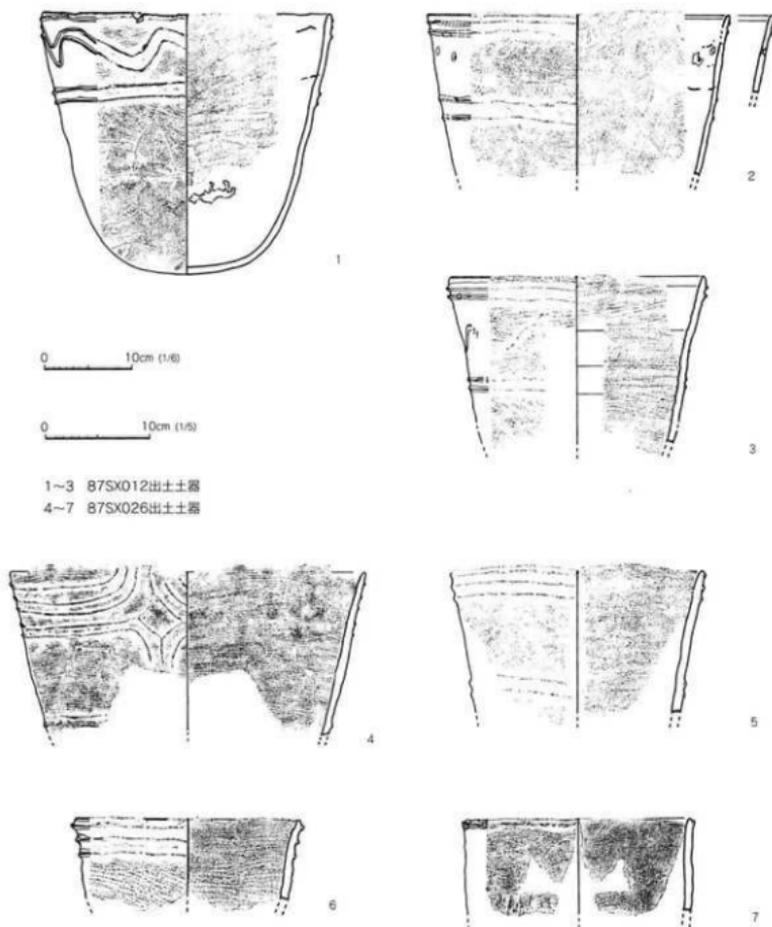


第12図 87SX012実測図 (1/20)

深さ0.4mを測る。埋土は暗茶褐色シルトブロック土の単一層である。遺物については轟B式土器深鉢、骨片、姫島産黒曜石などが出土している。これらの大半は土坑上位にまとまって出土したものであるが、底面付近においても僅かに認められる。その中でも轟B式土器深鉢は3個体確認され、ほぼ完形に復元できるものが含まれるため、検出当初は埋設された可能性を想定していたものの、同一個体の破片が散在している状況が認められることから、土坑埋没段階で廃棄されたものと判断される。

出土遺物 (第13図)

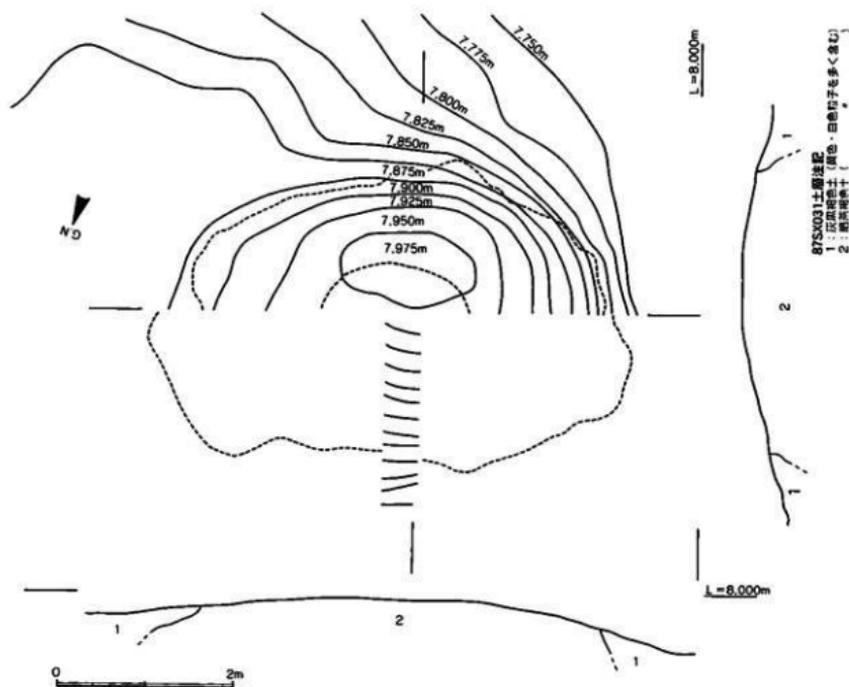
1～3は土坑(87SX012)出土遺物で、轟B式土器の深鉢である。高橋分類の轟4式土器に相当するものと判断される。遺物番号については第11図の出土遺物配置図の番号と一致する。1は口唇部全面に刻目を施し、外面の口縁部～胴部にかけて5条の低く細身の隆起線が横位直線状と波状に貼付される。底部は丸底を呈し、胴部～



第13図 87SX012・026出土土器実測図(1～5:1/6、6・7:1/5)

口縁部にかけては外傾気味に立ち上がる。器面調整としては外面の口縁部～胴部下半にかけては条痕の後ナデ、底部には条痕、内面の口縁部～胴部にかけては横方向の条痕の後、斜め方向の条痕、底部にはナデが施される。また、内面上半部には粘土紐接合痕が認められ、内面胴部下半部には煤が付着する。2は口唇部を断面隅丸形状に仕上げ、刻目は施されていない。口縁部外面と胴部外面に2条づつ断面三角形形状の隆起線が貼付される。器面調整としては外面には横方向のナデ、内面には条痕の後ナデが施される。また、内面には粘土紐接合痕が残され、口縁部の隆起線の下位には焼成後に外側から施された穿孔が2つ認められる。3は口唇部を細く仕上げ、刻目は施されていない。外面の口縁部～胴部にかけて5条の隆起線が貼付され、口縁部には2条の断面三角形形状の隆起線が横位直線状にめぐり、胴部には3条の低く細身の隆起線が上位から1条は波状に、2条は横位直線状に施される。器面調整としては外面には隆起線が貼付される範囲に横方向の条痕、その下位にはナデ、内面には外面に対応する範囲において上位から横方向の条痕、条痕の後ナデ、外面の隆起線が施された範囲以下に相当する部分には横方向の条痕が施される。

4～7は貝・獣骨屑(87SX026)出土遺物で、薙B式土器の深鉢である。高橋分類の薙4・5式土器に相当するものと判断される。4は口唇部を細く仕上げ、刻目は施されていない。外面口縁部～胴部にかけて低く細身の隆起線が菱形に配置された隆起線文を基準として頂点から伸びる隆起線に沿って貼付される。器面調整としては内外面共に横方向を基準とした条痕が施される。5は口唇部外面直下に3条、胴部に2条のやや太めで、断面に



第14図 87SX031実測図(1/60)

丸みを帯びた隆起線が横位直線状に貼付される。器面調整としては外面には条痕の後ナデ、内面には上半部に不定方向の条痕、下半部に横方向の条痕が施される。6は口唇部を細く仕上げ、口縁部外面に3条の隆起線が貼付される。断面形状は三角形を呈し、横位直線状に貼付される。器面調整としては外面には右下がり方向の条痕、内面には横方向を基調とする条痕が施される。7は口唇部を細く仕上げ、その外面直下に1条のやや太めで、断面に丸みを帯びた隆起線が横位直線状に貼付される。器面調整としては外面には口縁部～胴部上半にかけては不定方向の条痕、胴部下半に縦方向の条痕、内面には口縁部に横方向の条痕、その下位は斜め方向の条痕が施される。また、外面には粘土紐接合痕が認められる。

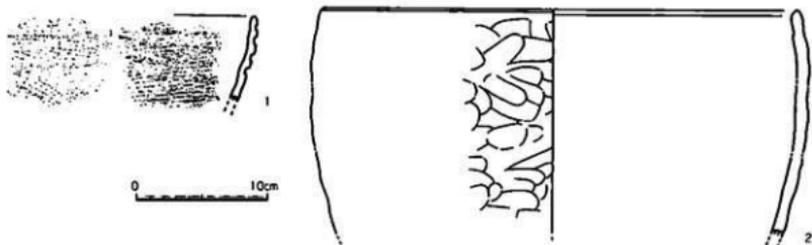
4. 縄文時代早期中葉～後葉頃

縄文時代前期前葉頃に比定される土坑(87SX012)の基盤面となる堆積土層(87SX013)が該当する。微高地の西側緩斜面に堆積したものであり、確実に崩壊できる遺物としては無文土器深鉢が出土している。また、土坑(87SX012)の南側隣接地には、この堆積土層(87SX013)の下位にマウンド状の高まり(87SX031)が存在する可能性が指摘される。今回の確認調査においては平面プランの検出までに留めたため、その詳細については不明であるものの、現状で長さ約2.31m、幅1.62mを測る。(第14図)

出土遺物(第15図)

1は縄文時代後期前葉頃に比定される堆積土層(87SX024)から出土した遺物である。口縁部外面にへう状工具凸面による4条の押し刺突文が横位沈線状に施された深鉢で、口縁部は直口気味に立ち上がる。器面調整としては外面には右斜め方向の条痕、内面には横方向の条痕が施される。縄文時代前期前葉頃に比定されている羽島下層Ⅱ式土器に相当するものと判断される。⁽⁴¹⁾

2は堆積土層(87SX013)出土遺物で、無文土器の深鉢である。胴部～口縁部にかけて内穹気味に立ち上がり、器面調整としては外面には右下がり方向のナデ、内面にはナデが施される。縄文時代早期前半の新相段階に比定されている隔弓式土器に相当するものと判断される。⁽⁴²⁾ また、内面には直径5～8mm程度のパッチ状の円形剥離が数十箇所認められる。2次的被熱で生じた器面の剥離である可能性が想定されるものである。⁽⁴³⁾



第15図 87SX024・013出土土器実測図(1/4)

小 結

今回の確認調査では横尾貝塚形成期にあたる縄文時代前期前葉頃に比定される貝・獣骨層が確認され、横尾貝塚と同時期の貝塚について隣接地に存在することが明らかとなった。両者の廃棄方向から考察すると、横尾貝塚と本調査区の間想定される微高地の存在を裏付けるだけでなく、微高地上に当該期における生業関連施設の存在を予測させる貴重な成果と言える。

また、中世の大規模造成に伴って廃棄された遺物の遺存状況については、既往の周辺調査地を凌駕し、極めて

良好である。このため、調査区西側に広がる丘陵斜面地についても今後これらの遺物が示唆する遺構の存在に注目する必要がある。

今回の調査においても縄文時代後期前葉段階における居住空間の確定を行うことはできなかった。しかしながら、今回の調査成果によって当地一帯が縄文時代後期前葉頃の居住空間として機能していた最有力候補地である可能性はこれまで以上に高くなったと判断される。

(3) 横尾遺跡第82次調査

調査地は大分市大字横尾字有田に位置し、大野川下流左岸に沿って南北方向に広がる鶴崎丘陵東端の尾根状先端部にあたる標高約30mの台地上に所在する。調査区北側には有田古墳群が隣接し、古墳時代中期に比定される円墳2基と石蓋土墳墓が1基確認されている。当該地区一帯には「七塚」の存在が伝承されており、その関連性が注目される。さらに、有田古墳群の北側には丘陵の東側に向けて谷が開析しており、この一角に横尾貝塚、ならびに縄文時代後期前葉に比定されるドングリ貯蔵穴群や、同早期末に比定される「水場の遺構」などが発見された第82次調査地が所在する。今回の調査は横尾貝塚周辺の遺構分布状況の把握を目的として行われたものであり、調査対象地に9本のトレンチを設定し、平成15年2月12日～同年3月31日まで確認調査を実施した。調査面積は約2856㎡であり、出土遺物については現在コンテナ2箱に保管している。

調査の結果、全トレンチにおいて多数の遺構群が検出された。以下に、各トレンチの主要遺構についてまとめる。(第16図)

第1トレンチ

同トレンチは、調査地の最北西部に位置し、先述した有田古墳の南東側隣接地にあたる。主要遺構としては、北側の開析谷につながる緩斜面において、5基の地層横転遺構(SX002・SX003・SX004・SX005・SX006)、多数のピットが確認された。これらには、新旧関係が認められ、複数時期に形成された遺構群であることが示唆される。

第2トレンチ

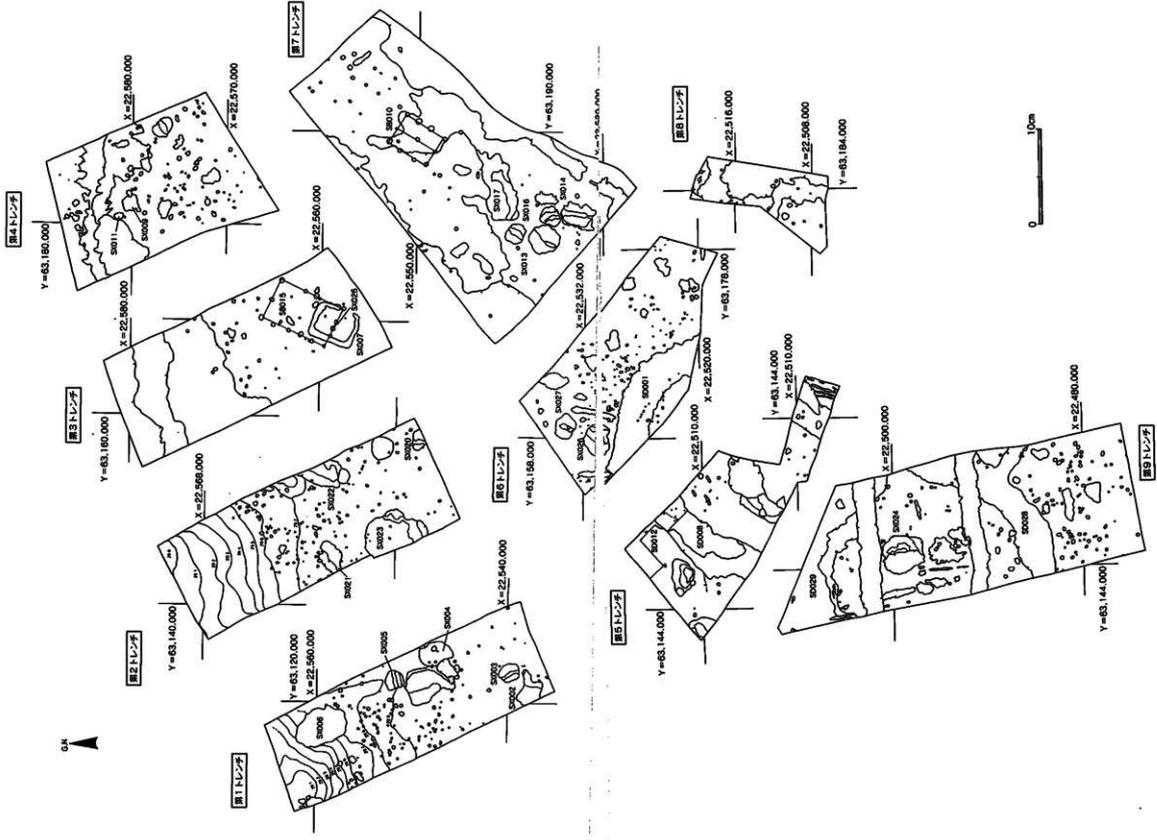
同トレンチは、調査地の中央部、第1トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、北側の開析谷につながる緩斜面において、4基の地層横転遺構(SX020・SX021・SX022・SX023)、多数のピットが確認された。これらには、第1トレンチと同様、新旧関係が認められ、複数時期に形成された遺構群であることが示唆される。本トレンチの遺構検出面からは、流紋岩の石核が出土している。

第3トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第2トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、北側の開析谷につながる緩斜面において、掘立柱建物跡(SB015)、方形周溝遺構(SX007)とその主体部と考えられる土坑(SX025)が確認された。

SB015は、2間×5間の東西棟である。SX007は、一辺約5mの平面正方形プランを呈し、その5m四方の内側に、幅約90cm、深さ約10cmを測る溝状遺構を巡らす。溝状遺構は現状で南側の一部を開口するものの、遺存状況を踏まえれば、当初からの形状としては断定できない。出土遺物としては、土師器cの底部片が認められ、9世紀代に比定されるものである。

また、SX007の中心部に位置するSX025は、平面円形プランを呈し、直径約40cm、深さ約8cmを測る。埋土は暗茶黒褐色土の単一土層である。現状では、出土遺物については皆無である。方形周溝遺構については、県内で



第16図 第68次測量区海標測図 (1/400)

は大分市城南遺跡⁽²¹⁾ や中津市相原・山首遺跡⁽²²⁾ において類例が認められ、すでに火葬墓の可能性が指摘されているものである。さらに、本トレンチの遺構検出面からは、姫島産黒曜石の剥片が出土している。

第4トレンチ

同トレンチは、調査地の最北東部、第3トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、北側の開析谷につながる緩斜面において、2基の土器埋設遺構(SX009・011)が確認された。

SX009については、平面不整形プランを呈し、ほぼ完形の弥生土器壺が、横位に埋置された状態で出土している。この弥生土器壺については、胴部中に2条の三角突帯を貼付し、底部がレンズ状を呈することから、弥生時代後期前葉に比定されるものと想定される。

また、SX011については、平面楕円形プランを呈し、SX009と同様、ほぼ完形の複合口縁壺が、横位に埋置された状態で出土している。複合口縁部の立ち上がりは短く、胴部下位に最大径を有することから、弥生時代後期前葉に比定されるものと想定される。

さらに、同トレンチからは縄文時代早期に比定される押型土器の底部が出土している。

第5トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第1トレンチの南側に位置する。主要遺構は、トレンチ中央部分に展開する淡茶褐色ローム層を基盤面として周溝遺構(SD012)と数基のピットが検出された。また、トレンチ北側部分に展開し、淡茶褐色ローム層の上層にあたる暗黒褐色ブロック土層を基盤面として溝状遺構(SD008)ならびに多数のピットが確認された。

SD008については、幅約2.2m、深さ約20cmを測り、断面形状については、底面の幅広い逆台形状を呈する。埋土については、黒褐色ブロック土の単一層である。また、SD012については、幅約5.5m、深さは80cmを測り、断面形状については、逆台形状を呈するものと想定される。埋土については、黒褐色ブロック土を基調とする。底面から南側壁面にかけて礫の量が確認されていることから、墳丘に葺石が施されていた可能性が想定される。さらに、第6トレンチで確認されたSD001との埋土の状況や位置関係から、両遺構は同一のものと考えられる。出土遺物としては、周溝区画内の中央付近に位置する堆積プランから板状石材が確認されている。また、SD008の埋土及びその基盤面である暗黒褐色ブロック土からは流紋岩片が確認されている。

第6トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第5トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、周溝遺構(SD001)、2基の地層横転遺構(SX026・027)が確認された。SD001は、幅約4mを測る。埋土は灰黒褐色土を呈し、第5トレンチで検出された周溝遺構(SD012)の埋土に近似している。両者の位置関係から、同一遺構と考えられるものである。

第7トレンチ

同トレンチは、調査地の最南東部、第6トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、掘立柱建物跡(SB010)、5基の地層横転遺構(SX013・014・016・018)が確認された。

SB010は、2間×3間の東西棟になる掘立柱建物跡であり、中央には床束と考えられる柱穴が認められる。これらの柱穴については、現状で柱痕は検出できていない。出土遺物としては、土師器小片のみであり、時期比定についても断定できない。

第8トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第5・6トレンチの東側に位置する。ビットが多数検出された。

第9トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第8トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、周溝遺構（SD028・029）、地階転遺構（SX024）が確認された。SD028の規模は、幅約4mを測る。SD029の規模は、現状では不明である。両遺構（SD028・029）の埋土や位置関係より、これらの遺構は、同一のものと考えられ、現状で直径約30m規模の平面円形プランを呈す。

小 結

今回の調査では横尾貝塚の西側丘陵部に位置する有田古墳周辺地において、多くの遺構群が確認された。その中でも周溝遺構ならびに方形周溝遺構の存在は注目されるものである。

第5・6トレンチにおいて確認された周溝遺構については、埋土や規模ならびに位置関係より同一のものと考えられるものである。これらの周溝遺構は、同トレンチ南側に現存するマウンド状の高まりを取り囲むように検出されていることから、古墳の周溝である可能性が高い。また、第9トレンチで確認された2つの周溝遺構についても、同一のものと判断される。このため、今回確認された周溝遺構は、有田古墳をはじめとした「七塚」の伝承に関連するものと想定される。

方形周溝遺構については、9世紀代に造営された火葬墓の可能性が示唆される遺構である。横尾遺跡第79次調査においても、9世紀後半代の木棺墓が確認されており、当該地周辺に古代の墳墓群が点在している可能性が想定される。⁽⁴¹⁾

横尾遺跡における既往の調査では、古代の粘土採掘坑群をはじめ、道路状遺構や掘立柱建物跡などが確認され、官衙遺跡通有の鳳字硯や越州窯系青磁碗、緑釉陶器、さらに、「大」と判読できる刻書土師器蓋等も出土している。また、横尾遺跡周辺においても、大形の掘立柱建物群が検出された地藏原遺跡⁽⁴²⁾、猪野新土井遺跡⁽⁴³⁾をはじめ、豊後国内において唯一発見された須恵器窯跡である松岡古窯跡群⁽⁴⁴⁾、さらには、水上交通の利便性を最大限に活用した集敷地遺跡の可能性が示唆される井ノ久保遺跡⁽⁴⁵⁾などが存在している。

古代における墳墓の造営については、「喪葬令」により、その被葬者ならびに立地が規制されているものであり、これらの遺構群との関連性を含め、今後注目する必要がある。

さらに、横尾貝塚や第82次調査地の西側後背面にあたる台地上において、押型文土器底部片などの縄文土器が確認された事も看過できない事象である。今回の調査結果は、当該地周辺における縄文人の活動を示唆するものであり、今後の周辺調査が期待される。

第4章 平成15年度の調査概要

(1) 横尾遺跡第82-3次調査

今回の調査地は大分市大字横尾字江又に位置し、乙津川に向けて開口する開折谷の一角にあたる。また、東側隣接地には古くから「目姦天神」として知られる横尾貝塚が所在し、これまでの調査によって横尾貝塚周辺に縄文時代の集落の存在を予測させる発見が相次いでいる。

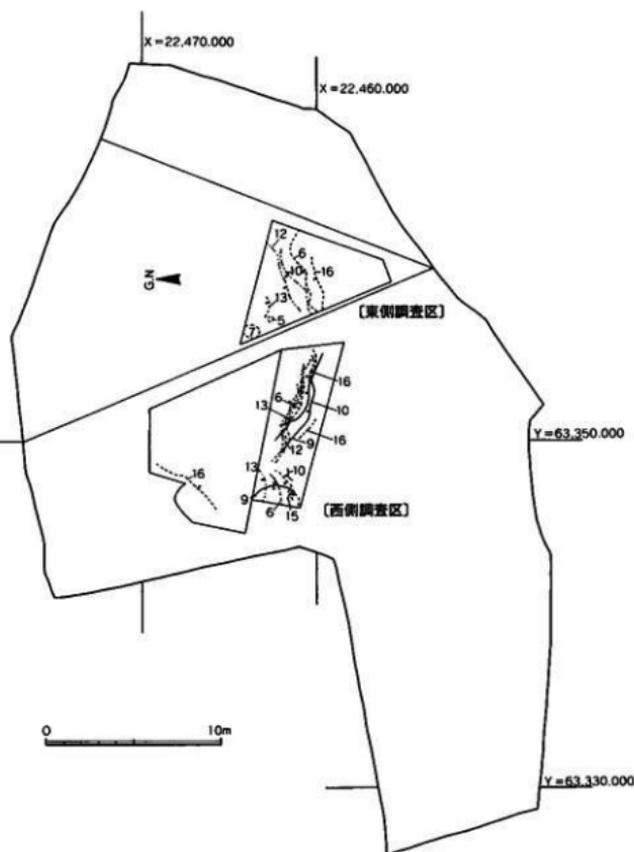
横尾遺跡第82-3次調査については、縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、早期末頃に比定される「水場の遺構」ならびに姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で発見された横尾遺跡第82次調査の追加調査として平成15年5月16日から実施しているものである。調査の目的は

「水場の遺構」を構成する建築部材の保存処理作業のため、部材の取り上げに先立って「水場の遺構」の全様と、その位置づけを明確にすることであり、82次調査地内の「水場の遺構」の南側と東側に2箇所の調査区を設定した。調査面積は約125㎡であり、出土遺物については現在コンテナ約50箱分に及んでいる。

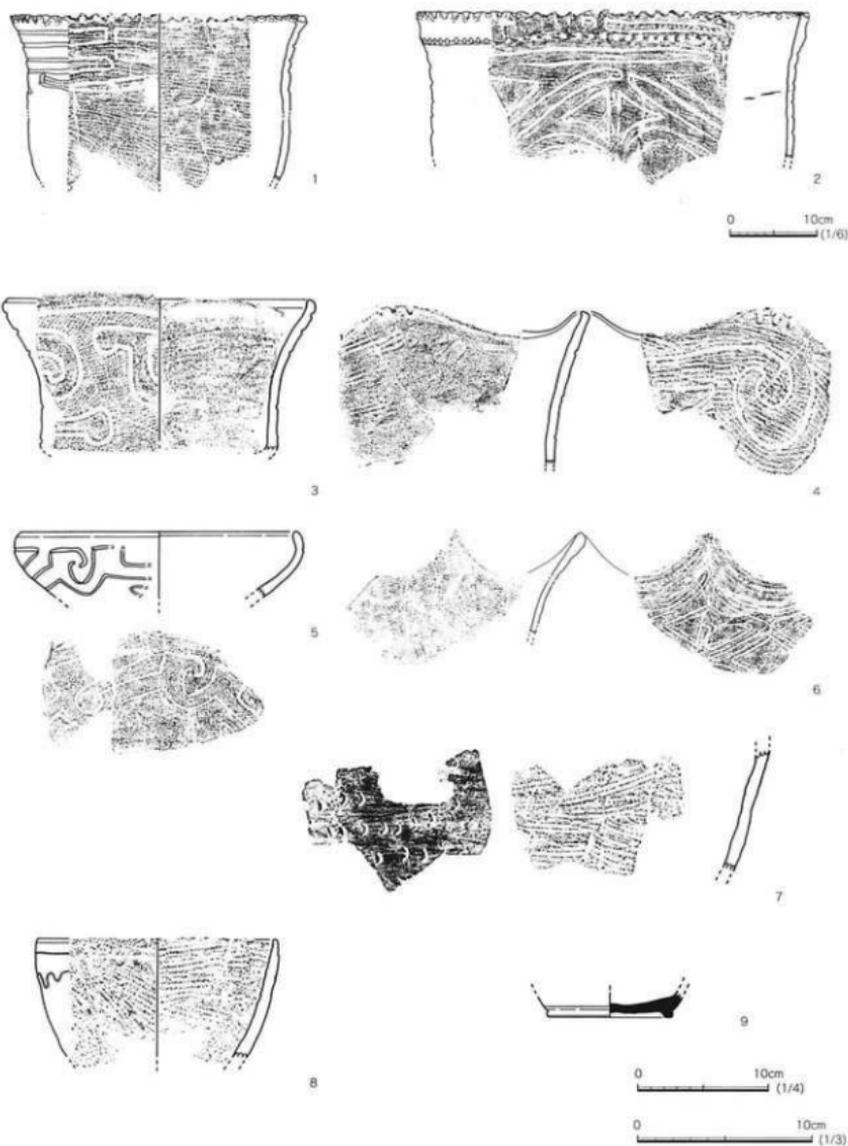
調査の結果、深さ約3mにも及ぶ堆積土層が確認され、各時代の堆積土層を基盤面とする遺構群が検出された。以下に、その様相についてまとめる。

1. 中世(第17・19図)

東側調査区において確認された堆積土層(82-3SX001・002・003・004)が該当する。上から大きく黒褐色土



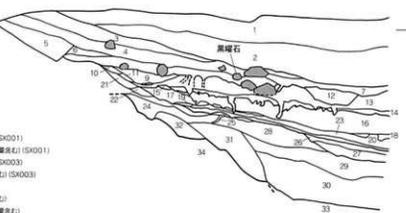
第17図 第82-3次調査区遺構略測図(1/300)



第18图 82-3SX001·002·003·004出土土器实测图 (1·2·6:1/6、4·5:1/4、3·7·9:1/3)

東側調査区西壁土層断面図

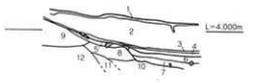
L=5,000m



東側調査区西壁土層記述

- 1: 黒褐色土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む) (SK001)
- 2: 暗黒黒褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む) (SK001)
- 3: 暗褐色土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む) (SK003)
- 4: 淡黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を中量含む) (SK003)
- 5: 灰黄色粘土 (微塵土層か?)
- 6: 褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 7: 褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 8: 暗緑褐色粘土 (SK004)
- 9: 草黄色粘土 (単人の礫を多量に含む)
- 10: 褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を多量、微塵の礫も少量含む)
- 11: 暗褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を多量に含む)
- 12: 褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む) (SK007)
- 13: 灰黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む) (SK007)
- 14: 灰黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を多量に含む) (SK006)
- 15: 草黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 16: 灰黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 17: 灰黄色粘土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 18: 淡黄緑色シルト質土 (土層か?)
- 19: 灰黄色シルト質土 (アカサヤ大山層、黄色の礫の塊が内方に傾き並び) (SK010)
- 20: 灰黄色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 21: 褐色粘土 (SK010)
- 22: 褐色粘土
- 23: 草黄色粘土 (アカサヤ大山層、南側で灰色が濃くなる) (SK012)
- 24: 草黄色粘土
- 25: 黒色粘土 (微塵土層か?)
- 26: 黒色粘土 (微塵土層、単人の灰白色砂質ブロックを少量含む) (SK013)
- 27: 草黄色粘土 (SK013)
- 28: 草黄色粘土 (緑色砂質ブロックを多量に含む) (SK016)
- 29: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロック、礫を多量に含む) (SK016)
- 30: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む、下部礫の砂質層が濃くなる) (SK016)
- 31: 灰黄色粘土 (礫を多量に含む、下部礫の砂質層が濃くなる)
- 32: 草黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量、単人の礫を中量含む) (SK016)
- 33: 暗黒黒褐色粘土 (単人の礫を多量に含む)
- 34: 暗黒黒褐色粘土

西側調査区西壁土層断面図 (部分)



西側調査区西壁土層記述

- 1: 暗褐色土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む) (SK006)
- 2: 淡黄緑色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 3: 灰黄色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 4: 灰黄色粘土 (アカサヤ大山層) (SK012)
- 5: 褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量、単人の礫を中量含む)
- 6: 草黄色粘土 (微塵土層、灰白色砂質ブロックを少量含む) (SK013)
- 7: 暗黒黒褐色粘土 (単人の礫を多量に含む) (SK013)
- 8: 褐色粘土 (緑色砂質ブロックを多量、黄色粒子を中量含む) (SK016)
- 9: 暗黒黒褐色粘土 (単人の礫を多量、1~2m程の黄色粒子を中量含む) (SK015)
- 10: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む) (SK016)
- 11: 草黄色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む) (SK016)
- 12: 暗黒黒褐色粘土 (灰白色砂質ブロックを多量、緑色砂質ブロックを少量含む)

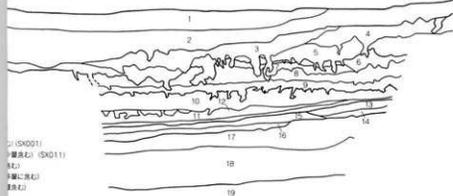
東側調査区北

東側調査区北壁土層記述

- 1: 黒褐色土 (1~2m程の黄色粒子を多量に含む)
- 2: 暗黒黒褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 3: 草黄色土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 4: 草黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 5: 草黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 6: 草黄色粘土
- 7: 灰黄色粘土
- 8: 灰黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 9: 草黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 10: 淡黄緑色シルト質土 (アカサヤ大山層)
- 11: 灰黄色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 12: 灰黄色粘土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 13: 褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 14: 草黄色粘土
- 15: 草黄色粘土 (微塵土層、単人の灰白色砂質ブロックを少量含む)
- 16: 草黄色粘土 (礫を多量に含む) (SK013)
- 17: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを多量含む)
- 18: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロック、礫を多量含む)
- 19: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む)

土層断面図

L=5,000m

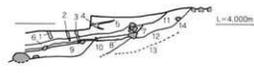


東側調査区北壁土層記述

- 1: 黒褐色土 (1~2m程の黄色粒子を多量に含む) (SK001)
- 2: 暗黒黒褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む) (SK001)
- 3: 草黄色土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む) (SK003)
- 4: 草黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 5: 草黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 6: 草黄色粘土
- 7: 灰黄色粘土
- 8: 灰黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 9: 草黄色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 10: 淡黄緑色シルト質土 (アカサヤ大山層)
- 11: 灰黄色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 12: 灰黄色粘土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 13: 褐色粘土 (1~2m程の黄色粒子を少量含む)
- 14: 草黄色粘土
- 15: 草黄色粘土 (微塵土層、単人の灰白色砂質ブロックを少量含む)
- 16: 草黄色粘土 (礫を多量に含む) (SK013)
- 17: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む) (SK016)
- 18: 暗黒黒褐色粘土 (微塵土層、単人の灰白色砂質ブロックを少量含む) (SK016)
- 19: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む)

西側調査区A-A' 土層断面図

L=4,000m

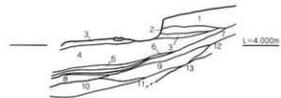


西側調査区A-A' 地点土層記述

- 1: 淡黄色シルト質土 (土層か?)
- 2: 淡黄色シルト質土 (土層か?) (SK011)
- 3: 淡黄色シルト質土 (土層か?) (SK011)
- 4: 淡黄色シルト質土 (土層か?) (SK011)
- 5: 淡黄色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 6: 淡黄緑色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 7: 淡黄緑色シルト質土 (アカサヤ大山層、単人の礫を多量に含む) (SK010)
- 8: 草黄色土 (土層の礫を多量に含む) (SK013)
- 9: 草黄色粘土 (SK016)
- 10: 暗黒黒褐色粘土 (SK016)
- 11: 暗黒黒褐色粘土 (SK016)
- 12: 暗黒黒褐色粘土
- 13: 暗黒黒褐色粘土
- 14: 淡黄緑色粘土

中央土層断面図 (部分)

L=4,000m



中央土層記述

- 1: 暗黒黒褐色粘土 (礫を多量に含む、黄色粒子を中量含む) (SK009)
- 2: 灰黄色粘土 (黄色粒子を少量含む) (SK006)
- 3: 灰黄色粘土 (黄色粒子を少量含む) (SK006)
- 4: 淡黄緑色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 5: 淡黄色シルト質土 (アカサヤ大山層) (SK010)
- 6: 草黄色砂土 (アカサヤ大山層) (SK012)
- 7: 暗黒黒褐色粘土 (礫を多量、黄色粒子を少量含む)
- 8: 草黄色粘土 (礫、砂質粒子を少量含む) (SK013)
- 9: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを多量に含む) (SK016)
- 10: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む) (SK016)
- 11: 草黄色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む) (SK016)
- 12: 草黄色粘土 (微塵土層、単人の灰白色砂質ブロックを少量含む)
- 13: 暗黒黒褐色粘土 (緑色砂質ブロックを少量含む)

層と茶褐色土層の2層に区分され、両者ともに大量の礫と遺物が内包されている。深さは合わせて約1mを測り、古代の遺物と共に縄文時代に比定される大量の遺物が出土している。

今回の調査では、これらの遺物は古代以降の造成に伴って廃棄されたものと判断されるものの、縄文時代に比定される遺物の大量廃棄という特筆される現象は第82・87次調査をはじめとする当該地の周辺調査区においても認められ、現段階においては既往の調査成果を踏まえ、14世紀前半頃に行われた開析谷を埋める一連の造成に伴って廃棄されたと理解できるものである。⁴¹¹⁾

また、この造成土からは約2.25kgを量る姫島産黒曜石製の大形原石をはじめ、縄文時代前期前半頃に比定される瀬戸内系土器(羽島下層Ⅲ式土器)などが出土しており、特筆される。さらに、この造成土をはじめとして各時代の堆積土層については基本的に乙津川から西側丘陵部に向けて厚く認められ、調査区東側に想定される微高地の存在を示唆する極めて重要な所見と判断される。

出土遺物(第18図)

今回、中世の造成土と位置づけた堆積土層から出土したものである。

第18図の1・2は出水式土器の深鉢と判断されるものである。⁴¹²⁾ 1は胴部～口縁部にかけて外反気味に立ち上がり、口唇部には波状の刻目が施される。口縁部外面にやや細く直線的な凹線による横方向の区画文が描かれ、器面調整としては内外面共に横方向の条痕が施される。この深鉢の色調については黒褐色や橙色を呈し、破片接合部を境に色調が異なる。また、黒斑についても破片接合部で途切れており、破片ごとに異なる焼成環境の下で焼き上がった可能性が指摘されるものである。⁴¹³⁾

以上の現象から、当該資料については土器焼成段階に破損し、廃棄されたものと判断され、これらに接合関係が認められることから、開析谷の周辺に土器焼成の場が存在する可能性を示唆するものとして注目される。

2は胴部～口縁部にかけて外反気味に立ち上がり、口唇部には波状の刻目が施される。肥厚した口縁部外面下端には刺突文がめぐり、口縁部と胴部に分割された文様帯を形成する。口縁部文様帯には縦位沈線文を境に「U」字状の文様が上下反転して交互に配置され、区画文内には刺突文が施される。また、胴部文様帯には菱形の文様を中心に左右対称的な沈線文が描かれる。器面調整としては外面には横方向の条痕後に横方向のナデ、内面には横方向の条痕が施される。この深鉢についても破片接合部を境に色調が異なるものの、1のように黒斑が破片接合部で途切れたり、破片の破面にまでのびるものや、接合する複数の破片で、一部の破片の破面にのみ黒化層が残るものなど、焼成時に破損した土器として認識されている現象が同一個体に複数観察することができないことから、現状では焼成時破損土器として評価するには慎重を要する。⁴¹⁴⁾

3・4は中津Ⅱ式土器の深鉢である。⁴¹⁵⁾ 3は平縁口縁を呈し、口縁部には内弯気味に立ち上がる。体部には磨消縄文帯を構成し、逆「L」字状文と下方向から巻き上がる渦巻文が描かれる。4は波状口縁を呈し、波頂部には刻目を施す。口縁部外面には下方から巻き上がる渦巻文が描かれ、巻貝による擬縄文が充填される。器面調整としては内外面共に横方向の条痕が施される。

5は福田KⅡ式土器古段階の鉢である。⁴¹⁶⁾ 外面上半部には磨消縄文帯を構成し、逆「L」字状文と下方向から巻き上がる渦巻文が描かれる。磨消縄文帯の幅は狭く、渦巻文については沈線の一部が途切れて鉤手状を呈す。

6はコウゴウ松式土器の深鉢である。⁴¹⁷⁾ 外反する山形の波状口縁を呈し、口縁部外面はやや肥厚する。口唇部には刺突文を施し、口縁部に沿って描かれた区画文内には刺突文が配置される。また、胴部外面には波頂部を基準として菱形の区画文が描かれ、その区画内にも刺突文がめぐり、器面調整としては外面にはナデ、内面には横方向の条痕が施される。器形ならびに文様構成から中津式土器の影響が示唆されるものである。

7は羽島下層Ⅲ式土器の深鉢である。外面には半截竹管状工具による「D」字形の爪形文が刺突される。器面調整としては内外面共に横方向の条痕が施される。⁴¹⁸⁾

8は沈線土器の深鉢である。従来、プロト曾畑式や野口・阿多タイプと称され⁴¹⁹⁾、高橋分類ではⅤ5式土

器に相当するものと判断される。¹⁰⁰⁾ 胴部～口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。口縁部には刻目を施し、口縁部外面には横波沈線文と波状文がめぐる。器面調整としては外面には右下がり方向の条痕、内面には横方向の条痕が施される。

9は須恵器坏cである。坏部外面の屈曲部と底部の境界に断面正方形の高台が貼付される。底部内面にはナデ、外面には横ナデが施される。

2. 縄文時代後期前葉頃

中世の造成土と判断される堆積土層の下位にあたり、標高約4m地点の灰茶緑色粘質土層を基盤面とする土坑(82-3 SX007)1基が該当する。この文化面は第82次調査において当該期のドングリ貯蔵穴群が形成された段階に相当するものである。

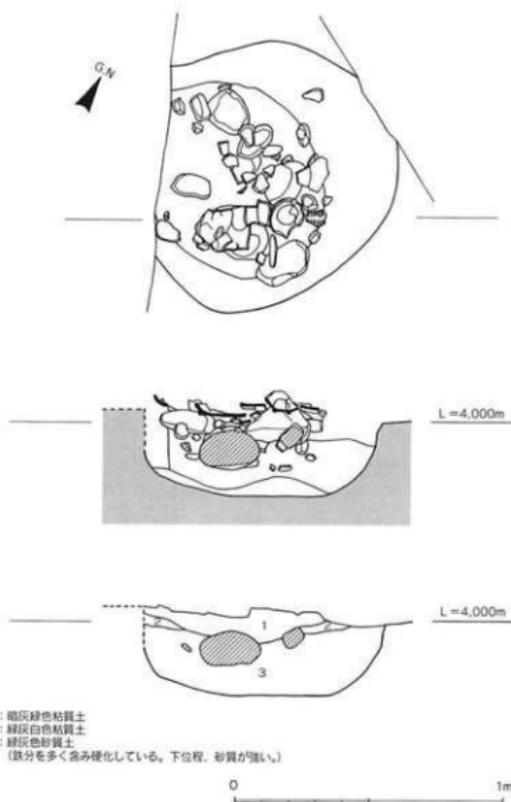
土坑 (82-3 SX007) (第20図)

東側調査区北西端部において検出された遺構である。平面不整形円形を呈し、径約0.9m、深さ約0.3mを測る。埋土については大きく2層に区分され、上層(1・2層)に粘質土、下層(3層)に砂質土が堆積しており、水性堆積により埋没したものと判断される。遺物については凹線文系の深鉢や粗製深鉢、轟B式土器深鉢などが出土している。これらの大半は土坑の上層から出土したものであり、土坑の最終埋没段階で上位の縄文時代の遺物を大量に含む中世の造成土が沈下した可能性も想定する必要があるものの、東側調査区西壁の土層観察から土坑の埋土として暗茶灰色粘質土層を確認できることから、上層出土の遺物についても当該遺構の埋没年代を示唆するものと判断される。

出土遺物 (第21図)

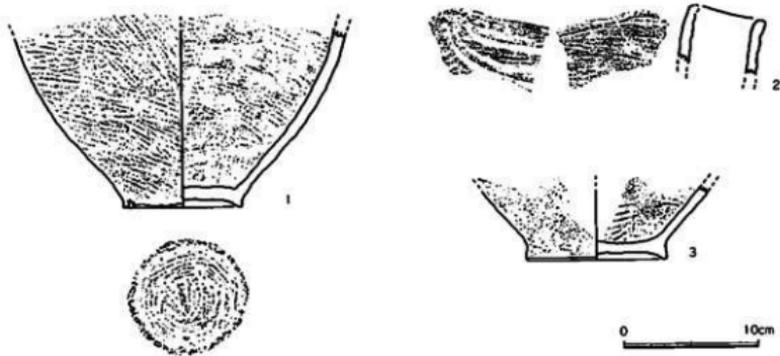
1は粗製の深鉢である。底部は高台状を呈し、胴部にかけて内湾気味に立ち上がる。器面調整としては外面には胴部に右下がり方向の条痕、底部に不定方向の条痕の後、高台状の底部側面に沿って円形に条痕が施される。また、内面には胴部下半上位に右下がり方向の条痕、下位には条痕後に横方向のナデ、底部には不定方向のナデの後、見込み部分に横方向の強いナデが施される。

2は反外する山形の波状口縁を呈し、口縁端部には面取りが施される。口縁部外面に波頂部から口縁部に沿って3条の浅い凹線が描かれる。器面調整としては外面には横方向のナデ、内面には右下がり方向の条痕が施される。



第20図 82-3 SX007実測図 (1/20)

3は粗製の深鉢である。底部は高台状を呈す。外底部を中心にほぼ全面に薄く白色物が付着する。破面にも付着している可能性がある。このため、器面調整については不明瞭であるものの、外面にはナデ、内面には横方向の条痕が施される。



第21図 82-3 SX007出土土器実測図(1/4)

3. 縄文時代早期末頃(第22図)

アカホヤ火山灰層の下位にある標高約3m地点の暗灰黒茶色粘質土層(82-3SX016)を基盤面とする段階で、「水場の遺構」(82SX080)ならびにその設置に伴う掘り込み地業(82-3SX013)が該当する。

アカホヤ火山灰層(82-3SX010・012)(第17・19図)

淡黄灰色～灰茶色を呈し、現状で約60cmの堆積が認められる。隣接する第82次調査区において砂層として報告した堆積層についてもアカホヤ火山灰層の下位において確認され(82-3SX012)、今回の調査によって両者共にアカホヤ火山灰層であることが判明した。⁽²³⁾

また、色調や質感の違いにより3層に分層され、上位～下位に向けて粒子が荒くなる級化現象(分級)が認められる。⁽²³⁾ 最下層を砂層と誤認した理由である。さらに、調査区南側においてアカホヤの堆積平面プラン(第17図・写真27)が確認され、その内縁部における堆積は中央部に比べ均質ではなく、攪拌される。以上のことから、第82次ならびに第82-3次調査区において検出されたアカホヤ火山灰層については水中に沈降したものであり、アカホヤ降下段階の古環境を示唆する極めて重要な所見と判断される。

また、第82次調査区の中央土層一帯において確認された不整合な堆積状況⁽²³⁾についても、当該西側調査区のアカホヤ火山灰層の中位において検出された。平面プランとしては細く帯状に広がる。(写真28)

「水場の遺構」(82-3SX080)(第23図)

第82次調査において確認された建築部材などの加工木を杭で固定し、「コ」の字状に配置した「水場の遺構」(82SX080)に沿って、南北方向に部材が検出されている。推定微高地に向かって「水場の遺構」が東西方向に展開することを予測し、設定した東側調査区においては部材の展開は見られない。南北方向に伸びる部材については谷地形に沿って南西方向～北東方向に向けて傾斜する。今回新たに出土した部材については顕著な加工は認められないものの、その残存状況については谷尻方向の北側に比べ谷頭方向の南側の部材の方が劣化している。

「水場の遺構」設置に伴う掘り込み地業(82-3SX013)(第18・22・23図)

暗灰黒色粘質土層において平面プランを検出した後、プラン内の土層観察のために設定した土層断面1箇所ならびに調査区壁の土層断面4箇所すべてにおいて確認され、その断面形状から人為的な掘り込み地業と判断され

るものである。この地業内に「水場の遺構」が設置される。地業の規模については現状で確定できていないものの、深さは約20cmを測る。

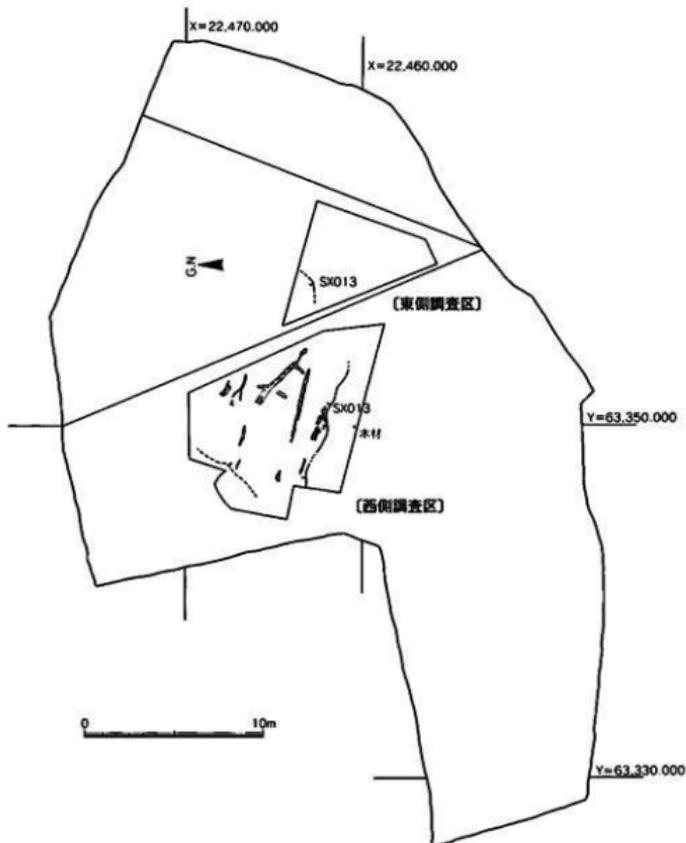
「水場の遺構」は地業南側の内際から設置され、その主軸方向に沿って配置されている。地業内には均質な黒色有機質土層が形成されているものの、拳大～人頭大の礫が一定量認められる。この黒色有機質土層からは条痕文土器の深鉢が出土している。

出土遺物（第26図1・2・4）

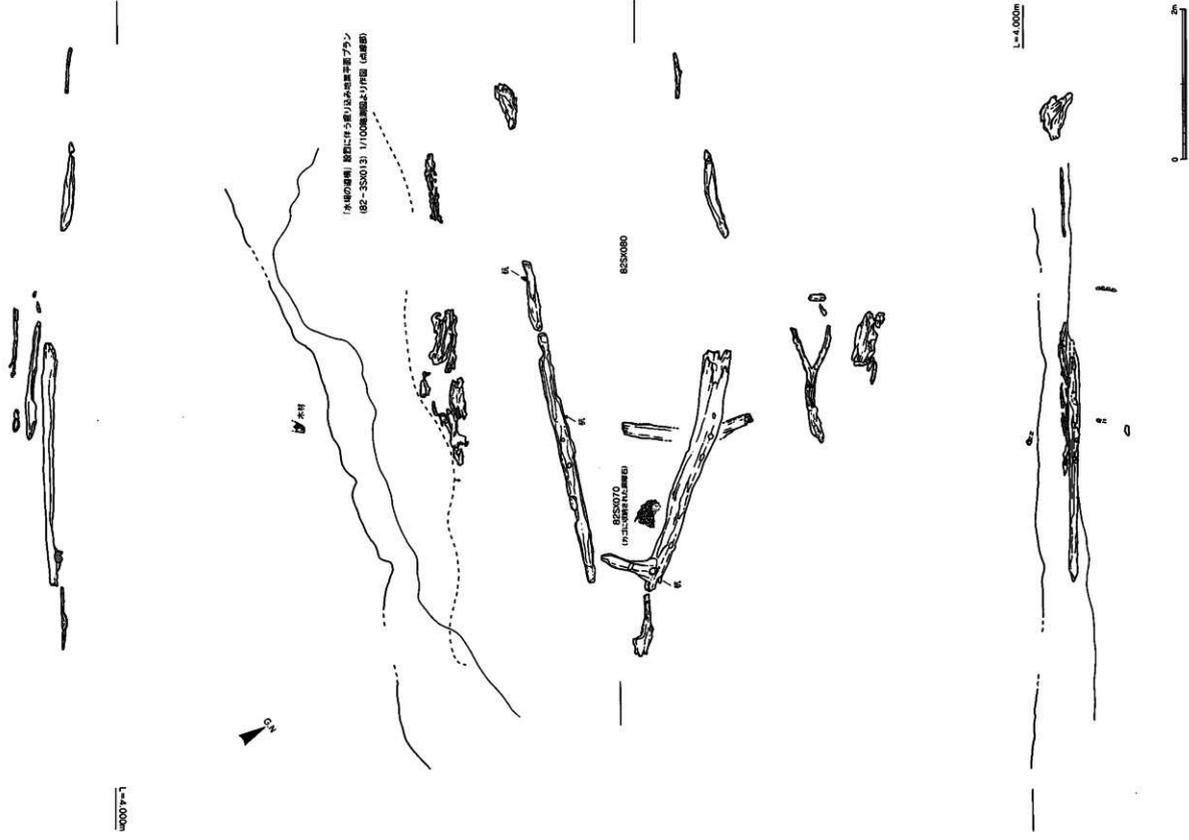
1・2は「水場の遺構」設置に伴う掘り込み地業（82-3 SX013）から出土した遺物で、条痕文土器の深鉢である。高橋分類の器1式もしくは2式土器に相当するものと判断される。1は胴部～口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部には面取りが行われる。器面調整としては内外面共に右下がり方向の条痕が施される。内外面共に煤の付着が認められる。2は円盤状の粘土塊を胴部下半部に貼付し、底基部が外側に張り出し、やや上げ底気味の底部を形成する。底部～胴部にかけては大きく外傾しながら立ち上がる。器面調整としては胴部には内外面共に条痕、底部は内面には条痕、外面にはナデが施される。

4はアカホヤ火山灰層（82-3 SX012）出土遺物で、条痕文土器の深鉢である。高橋分類の器1式もしくは2式土器に相当するものと判断される。口唇部全面に斜め方向の刻目を施し、口縁部は僅かに外反する。同外面下端には段が認められ、口縁部外面を肥厚させる。

器面調整としては口縁部の内外面には横方向の条痕、胴部内外面には右下がり方向の条痕が施される。内外面共に煤が付着する。

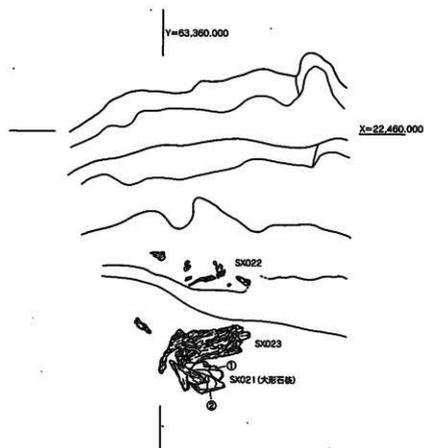


第22図 82-3 SX013遺構略測図 (1/300)



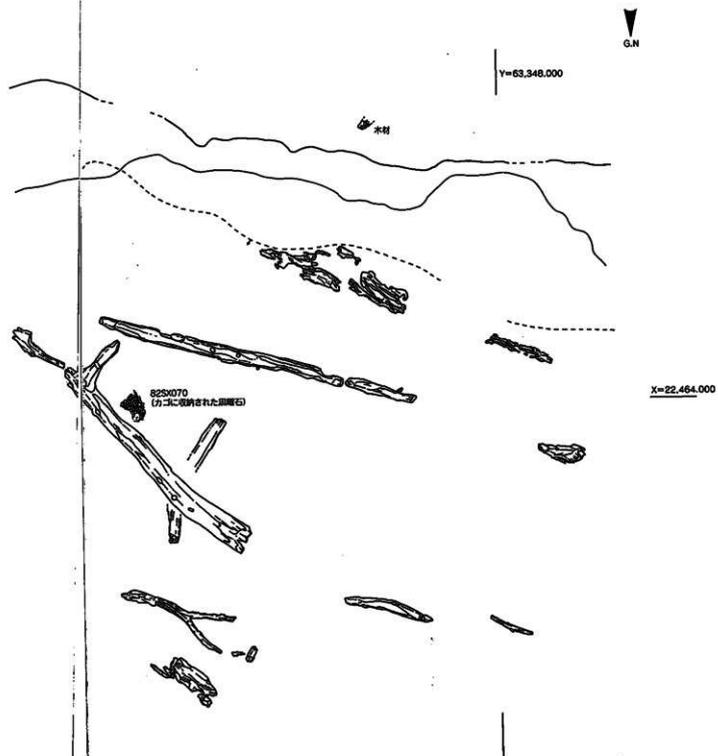
新23図 B2-3 Sx080城跡図 (1/50)

【東南調査区】



0 2m

【西側調査区】



4. 縄文時代早期中頃～後葉頃（第25図）

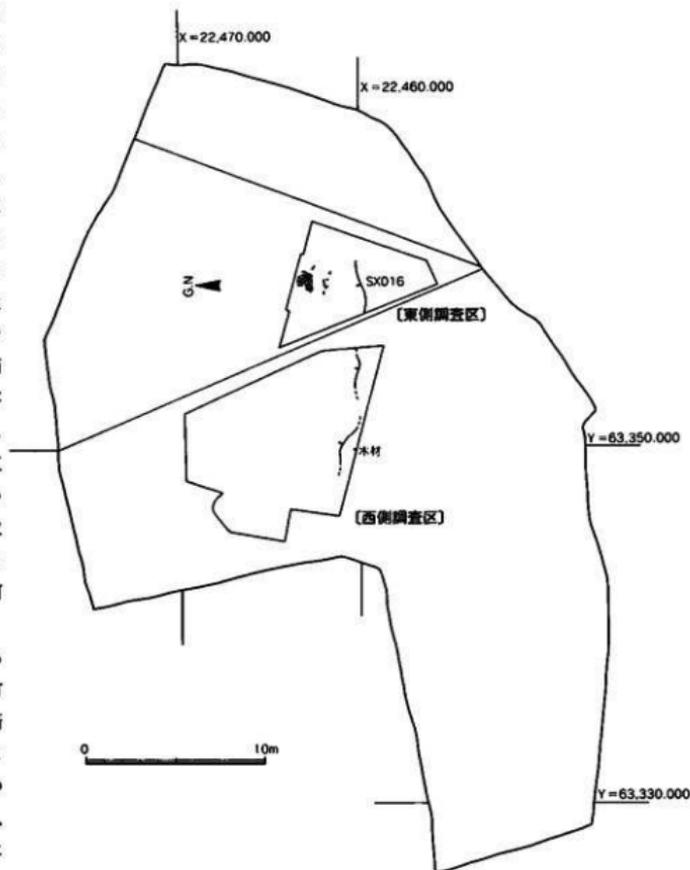
暗灰黒色粘質土層（82-3SX016）の下位にあたる標高約2m地点の礫地盤ならびに暗灰黒緑色礫土層を基盤面とする段階で、暗灰黒緑色礫土層の直上において姫島産黒曜石製の大型石核が出土し、南側斜面地においては礫地盤上に杭列の可能性が指摘される木材群（82-3SX022）が確認されている。暗灰黒色粘質土層（82-3SX016）については3層に区分され、地山ブロックならびに拳大の礫を多く含む堆積土層であり、下位ほど砂質が強くなる。また、西側調査区の北西隅においても礫地盤が確認され、暗灰黒色粘質土層（82-3SX016）の堆積平面プランが検出されている。

出土遺物としては姫島産黒曜石製大型石核や部材をはじめ、無文土器の深鉢が確認されている。姫島産黒曜石については両者ともに10kgを超える大型の石核である。暗灰黒緑色礫土層の直上において2点並んで出土しているものの、両者に接合関係は認められない。暗灰黒緑色礫土層ならびに黒曜石の上位にあたる暗灰黒色粘質土層の堆積状況から、当該期における本調査区の状況については水面下であった可能性が想定され、黒曜石の出土状況

を踏まえれば、廃棄された蓋然性は低いと考えられるものの、意図的な埋置と積極的に評価するまでには至っていない。

木材群(82-3SX022-023)(第24図)

82-3SX022については杭列の可能性が示唆されるものである。現状で、斜面に沿って逆「L」字状に確認されている。その中でも斜面に直行する木材群についてはほぼ等間隔に位置し、2本が対になって配置されている可能性が認められる。残存状況が不良であるため、人為的に打ち込まれたものか断定できていない。このため、当該資料のサンプリングを行い、現在、樹種ならびに部位の同定作業を実施している。



第25図 82-3SX016遺構略測図(1/300)

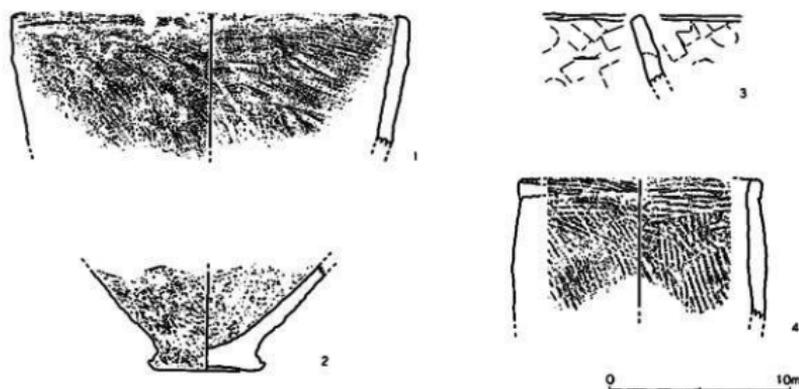
また、82-3 SX023については姫島産黒曜石製大形石核の直上で検出された木材である。黒曜石ならびに抗列の可能性が示唆される82-3 SX022との直接的な関係は解明できていない。現状で顕著な加工は認められないものの、後述する姫島産黒曜石製の大型石核(82-3 SX021)の帰属年代を検討する上で極めて良好な資料としてサンプリングを行い、現在、年代測定を実施している。

出土遺物(第26図3・第27図)

第24図の3は暗灰黒色粘質土層(82-3 SX016)の出土遺物で、無文土器の深鉢である。口縁部は内傾し、器面調整としては内外面共にナデが施されるものの、粘土結接合痕が認められる。縄文時代早期前半の新相段階に比定されている隅弓式土器に相当するものと判断される。⁽²³⁾

第27図は姫島産黒曜石製の石核である。⁽²³⁾ 節理面の多い角礫を素材としており、姫島の観音崎の崖面から分割採取したと推測される。最終作業面の高さ13.50cm、幅48.20cm、奥行23.00cm、重さ12.2kgを測り、姫島産黒曜石製としては管見の限り、2番目に大きな石核である。⁽²³⁾ 作業面以外は殆ど分割面と考えられ、緻密な意味での打面調整も認められない。

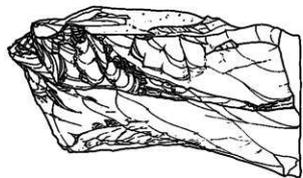
作業面は3箇所看取されている。即ち、①d面を打面に、90度に近い剥離角で剥離したa面上半の右半、②b



第26図 82-3 SX013・016出土土器実測図(1/3)

面を打面としてやはり90度に近い剥離角で剥離したと推測されるa面下半の右半、③a面下半を打面に約75度の鋭角な剥離角で剥離したb面右半である。①と②、①と③の剥離面は切り合いがなく、前後関係は判然としませんが、②と③は、後者の剥離面が全て前者の剥離面を切っており、②→③の順となっている。②・③の先後関係や、広くて剥がしやすいa面で剥離した後、狭いb面に移ったと考えられることから、①・②の前後関係は判らないが、①・②の作業の後、③で剥離したと考えるのが妥当であろう。なお、②と③は打面と作業面を入れ替えて剥離作業を行っており、石器の刃部状となる旧石器時代の交互剥離に似るが、旧石器のそれが一回一回打面と作業面を入れ替えるのと違い、サイコロ状石核のように、先ず片方の面で剥離作業を為してから、打面と作業面を交替している。一方、縄文時代の石核には珍しく、①a面上半・③b面右半の2作業面には顕著な頭部調整が認められる。②a面下半には殆ど見られないが、③の剥離で切られて残存していないだけで、実際には同様に施されていた可能性が高い。

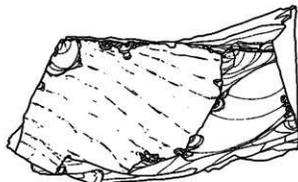
また、剥片を剥離しているので石核には違いないが、剥離された剥片の長さは最小で3cm弱、最大で11cm強を測り、厚みも1~3cmを有しており、剥がされた剥片はツールの素材というより、一般的な石核の素材になったと考えられる。



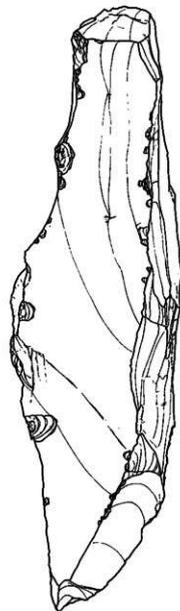
f



c



e



d



a



b

第5章 まとめ

平成14・15年度における確認調査の概要報告を終えるにあたり、今回の調査によって新たに抽出された問題点を以下に列記し、まとめにかきたい。

(1) 中世の大規模造成について

すでに平成13年度の確認調査において指摘された事象であり、今回の調査においても中世に比定される堆積土層が確認された。この堆積土層については現状で深さ約1.5mにも及び、中世の遺物と共に縄文時代に比定される遺物を大量に内包する。第82次調査において不整合な堆積状況が認められ、人為的な造成土と判断されるものである。中世に比定される遺物の出土量について第82次調査区が既往の周辺調査地を凌駕することをはじめ、当該期に比定される遺物の出土状況に差異が認められることから同一の堆積土層と位置づけるには検討の余地があるものの、縄文時代後期前葉頃に比定される文化面の直上に堆積していることや、縄文時代に比定される遺物が大量に内包されていること、さらに、それらの遺存状態が極めて良好であることなど共通する現象が認められ、現状では一連の堆積土層と考えられる。

この造成土からは第82次調査区をはじめとして、貿易陶磁器や和泉型瓦器、さらに東播系須恵器鉢などの広域流通品が相当量出土しており、その上、東播系須恵器碗についても認められることは特筆される。

(橋本1995)によれば、12世紀後半以降東播系須恵器や常滑焼さらに中国製陶磁器などの遠隔地流通が活発化し、和泉型瓦器碗についても西日本への拡散が顕著となることが指摘されている。その中でも和泉型瓦器碗が大量に出土する遺跡については港湾都市もしくは、地方の中核市場としての性格を持つものと位置づけられていることから、当地一帯が水上交通の要地であった可能性は高い。

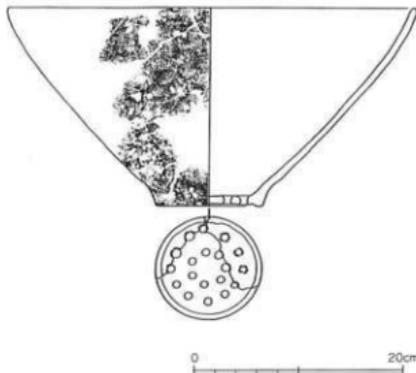
また、文献上、乙津川河口の乙津地区には「高田庄之船津」が推定され、中世段階にはこの船津から摂津方面への廻船が存在し、港湾都市的な景観が形成されていた可能性についても指摘されている。⁽³³⁰⁾ さらに、近世以前はこの乙津川が大野川の本流であったと考えられており、本遺跡が乙津川左岸に所在することを踏まえれば、当該地周辺にも「高田庄之船津」に代表されるような「津」の存在を想定し、今後検討していく必要がある。⁽³³⁰⁾

(2) 第87次調査地出土の底部穿孔土器について (第7図・28図)

中世の造成土から出土したものである。先述のとおり、底部には焼成前の穿孔が認められ、底部外面～内面のほぼ全面にかけて白色物の付着が認められるものである。さらに、口径に対して底径が極めて小さく、底部の断面形状も球形を呈していることから、自立させて使用するものではなかったと想定される。

このような底部に焼成前の穿孔が施される縄文土器については管見の限り、大分県豊後高田市寺田卯月遺跡⁽³³¹⁾、福岡県北九州市勝門遺跡⁽³³²⁾、愛媛県周桑郡小松町鶴来が元遺跡⁽³³³⁾などで出土しており、概ね縄文時代後期前葉頃に比定されるものである。

これらは、底部中央の1箇所に穿孔するものと、底部全域に複数箇所穿孔するものに区分され、器形が判



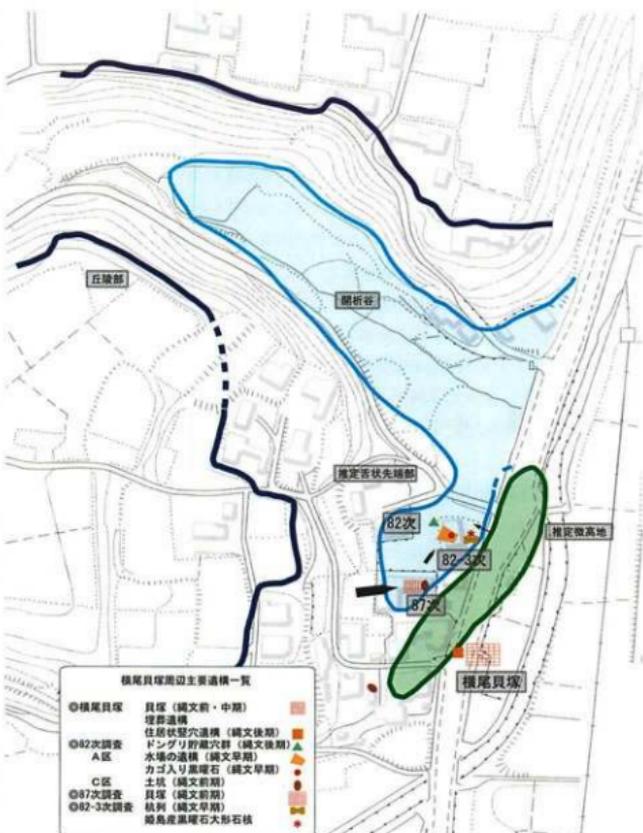
第28図 愛媛県鶴来が元遺跡出土土器実測図

明しているものについては、口径に対して底径が極めて小さく、当該資料と共通する特徴が見受けられる。また、白色物が附着するものも認められ、鶴来が元遺跡の調査において土器の内側に附着した白色物の脂肪酸分析が行われている。分析の結果、白色附着物については海藻をはじめとする植物質の水産物である可能性が示唆され、それらの有機成分が変成したものであることが判明している。その分析結果を受けて、発掘調査担当者は全体器形が鉢形を呈し、底部に複数の穴をあける土器の内面に白色附着物が認められることに着目し、この鉢形の土器が食物を蒸す道具として使用された可能性を指摘している。

以上のことから、底部穿孔土器については縄文時代後期前葉頃における食文化を検討する上で極めて重要な情報を保有していることが想定され、今後は白色附着物の分析はもとより、出土遺跡の分布状況ならびに形式学的な考察を進めていく必要がある。

(3) 縄文時代における横尾貝塚周辺の古地形について (第29図)

横尾貝塚は県内最大河川である大野川の分流、乙津川左岸に沿って南北方向に広がる鶴崎丘陵先端部の標高約6～8m地点に所在する。先述のとおり、大野川が現在のように開削されたのは近世のことであり、中世においては乙津川が大野川本流であったと考えられていることから、横尾貝塚は大野川本流沿いに形成されていた可能性が想定される。また、平成12・13年度に実施された横尾遺跡第82次調査では貝塚の北西部に存在する開析谷の一角において縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、同早期末頃に比定される「水場の遺構」ならびに姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で発見され、縄文人による谷地利用の状況



第29図 横尾貝塚周辺古地形復原想定図

が窺われる。この開折谷の南側から横尾貝塚にかけては現状でも比較的平坦な地形が認められ、横尾貝塚の調査において堅穴住居跡の可能性が指摘されている堅穴遺構（縄文時代後期前葉頃）が検出され、第82次調査においても開折谷を埋める中世の大規模造成に伴って、谷部南側斜面より縄文時代に比定される遺物が大量に廃棄されていることから、当地一帯が縄文時代後期前葉頃における居住空間として機能していた最有力候補地として想定される。

このような状況の中、横尾貝塚の北西部に近接する横尾遺跡第86次調査において南北方向に広がる微高地が確認され、その西側に位置する第87次調査区において微高地から西側に広がる丘陵斜面地にかけてレンズ状の堆積土層が検出されている。また、微高地の西側斜面には横尾貝塚形成期にあたる縄文時代前期前葉頃に比定される貝・獣骨層が確認され、横尾貝塚の隣接地に同時期の貝塚の存在が明らかとなっている。さらに、第82-3次調査区におけるは各時代の堆積土層については基本的に乙津川から西側丘陵部に向けて厚く認められ、同西側調査区の北西隅において丘陵斜面部につながる礫地盤が検出されている。

以上のことから、当該地一帯において北側に開口する谷部の存在が示唆され、乙津川に向かって東側に開口する開折谷と結節する可能性が高い。この谷部の東側には微高地が広がり、西側には丘陵の舌状先端部が推定される。つまり、「水場の遺構」は北側に開口する谷部の斜面地を改変し、北側の開折谷に向かって設置された遺構と位置づけることが可能となる。

一方、中世の大規模造成に伴って廃棄された当該期に比定される遺物の出土量については、感覚的な比較ではあるものの、第87次調査区が既往の周辺調査地を凌駕し、その遺存状態も極めて良好である。また、出土状況から各地点における廃棄の方向が想定され、これらの遺物については西側丘陵斜面地ならびに推定微高地上から廃棄されたものと判断される。さらに、遺物の遺存状況を踏まえれば、縄文時代に比定される遺物が本来内包されていた遺構群、つまり縄文時代の遺構群についても至近の場所に存在する可能性が示唆され、調査区西側に広がる丘陵斜面地ならびに推定微高地一帯において当該期の遺構群が展開する蓋然性は極めて高いと判断される。

(4) アカホヤ火山灰について

アカホヤ火山灰については鬼界カルデラの大噴火によって約7300年前に噴出した広域火山灰であり、一般的には濃い橙色を呈すものの、保存状態が良好である場合は白色に近い色調を留める。⁴³⁾ 横尾遺跡82次調査区において確認されたアカホヤ火山灰層については淡黄灰色～灰茶色を呈し、現状で約60cmの堆積が認められる。上位～下位に向けて粒子が荒くなる級化現象（分級）が認められることから、当該地において検出されたアカホヤ火山灰層については水中に沈降したものであると判断される。この所見から、当該地はアカホヤ降下段階においては水域であった可能性が示唆される。さらに、開折谷の周辺には縄文時代前期前葉頃の貝塚や土坑などが形成される中、谷部に当該期の遺構ならびに遺物包含層が確認されないことは注目される。

また、アカホヤ火山灰降下以前の状況については先述のとおり、暗灰黒色粘質土層を基盤面として「水場の遺構」が設置される。今回の調査によって「水場の遺構」については暗灰黒色粘質土層を浅く掘り込んで設置されたものと判断され、ここに1つの疑問が生じることになる。つまり、アカホヤ降下段階においては少なくとも現存するアカホヤ火山灰層の深さまでは水位があったことになり、環境の変化を想定しなければ、「水場の遺構」の設置は水面下での作業を余儀なくされるのである。現状では、「水場の遺構」を構成する建築部材に伐採後の二次的な負荷による平坦面が存在し、「足場」として機能していた可能性を想定しており、今回の調査によって設置に伴う掘り込み地業の存在を確認したことから、当該期についてはかなり陸地化していたものと推定される。⁴⁴⁾

さらに、「水場の遺構」設置段階以前については暗灰黒緑色礫土層の直上において10kgを超える大形の姫島産黒曜石製の石核が2点並んで出土している。この段階で注目される現象は、黒曜石の検出面を境にして堆積状況に差異が認められることである。改めてその状況をまとめると、黒曜石が埋戻される暗灰黒茶色粘質土層につい

ては「水場の道構」設置に伴う掘り込み地業の基盤面となる暗灰黒色粘質土層（82-3 SX016）の最下層にあたるものである。この暗灰黒色粘質土層（82-3 SX016）については地山ブロックならびに拳大の礫を多く含む堆積土層であり、下位ほど砂質が強くなる。一方、黒曜石の検出面にあたる暗灰黒緑色礫土層については一定量水流が認められる段階の水性堆積土層である可能性が指摘され、姫島産黒曜石製の大型石核が残された時点では依然として当該地にまで水域が及んでいたと想定される。

(5) 姫島産黒曜石の入手について（第30～33図）

大分県内における姫島産黒曜石の利用については後期旧石器時代に開始され、縄文時代早期後半～前期におい



第30図 横尾遺跡82SX070黒曜石出土状況



第31図 横尾遺跡82SX070カゴ検出状況（側面部）



第32図 一の釜遺跡第55号土坑黒曜石出土状況



第33図 午戻遺跡SX002集積道構黒曜石出土状況

て広域かつ大量に利用されはじめたことが指摘されている。⁽³⁰⁾ 近年、その前段階にあたる縄文時代早期前葉～中葉頃に大分平野の縄文人が姫島産黒曜石の採掘活動に携わっていた可能性についても示唆されており、注目される。⁽³¹⁾

姫島産黒曜石の入手については、原産地が海上に浮かぶ離島であり、直接船で姫島に向いて採取するか、姫島の黒曜石採掘集団が、船で各地に搬出するかのいずれかの方法で行われていた可能性が指摘されている。しかしながら、大分県下における姫島産黒曜石の分布量が海岸部に比べ、内陸部の場合に少なくなる傾向が認められることから、内陸部において直接的な取引が行われた可能性は少なく、中継地を経由した取引を考える方が妥当であると位置づけられている。⁽³²⁾ また、縄文時代早期後半～前期にかけて、香川県金山産サヌカイトなどを一定量、それも安定的に入手している状況が見受けられることから、石材入手の範囲がより遠くから組織的な均衡的交換、または取引によるものへと変化したという注目される見解が提示されている。⁽³³⁾ さらに、大分県内の旧石器時代～縄文時代における姫島産黒曜石出土遺跡の集成を行った宮内（2003）によれば、主要河川の河口周辺部に姫島産黒曜石の原石や石核を多量に保有する遺跡が認められることから、主要河川の下流域に姫島産黒曜石交易の中継地が存在し、そこから周辺の消費遺跡へ姫島産黒曜石が将来された可能性が指摘されている。

横尾道跡は県内最大河川である大野川の分流・乙津川の左岸に所在する道跡であるものの、近世以前は、この乙津川が大野川の本流であった可能性が指摘されていることから、本道跡は主要河川の河口周辺部に位置していた可能性が示唆される。当該道跡からはカゴに収納された姫島産黒曜石や10kgを超える大形の石核をはじめ、多くの姫島産黒曜石が出土しており、すでに、沿岸部における交易上の中継地的存在である可能性が指摘されている。¹⁰⁴⁾ 管見の限り、本道跡出土のカゴに収納された黒曜石(第29・30図)と類似した資料については長野県下諏訪町の釜道跡第55号土坑出土の黒曜石原石一括資料(第31図)¹⁰⁵⁾ならびに佐賀県伊万里市午戻道跡SX002集積遺構出土資料(第32図)¹⁰⁶⁾が認められる。両者ともにカゴ自体は残存していないものの、石器の出土状況¹⁰⁷⁾や石器個体の詳細な調査研究¹⁰⁸⁾により、袋状の入れ物に入れて運搬されてきた可能性が指摘されているものである。

一の釜道跡については信州産黒曜石の原産地道跡と知られる星ヶ塔山に最も近い縄文時代前期末頃の集落で、地理的条件と数万点を超える大量の黒曜石が出土していることから、「黒曜石採掘集団のムラ」と位置づけられ、¹⁰⁹⁾ 午戻道跡については九州における黒曜石の二大原産地と称される腰岳から派生する丘陵末端部に位置する道跡で、出土石器の内、9割以上がチップ、不定形剥片、原石で占められており、製品が少ないことから縄文時代後期後半頃に比定される「石器の加工場」と位置づけられている。両者共に原産地道跡の隣接地に所在し、大量に黒曜石を保有する道跡であることは注目される。

以上の横尾道跡における古地形の復原想定ならびに姫島産黒曜石の出土状況などの検討からも、すでに指摘されており、本道跡については姫島産黒曜石交易の中継地として機能していた可能性が高いと判断される。

註

註1 大分県教育委員会 2000『大分県条坊跡XIV—陶磁器分類編—』

註2 ミガキa2と分類される調整である。

坪根伸也 1995『羽田道跡出土石器に関する二・三の問題』『羽田道跡Ⅱ』大分県教育委員会

註3 註2と同じ

註4 水ノ江和同 1992『西平式土器に関する諸問題—福岡県基上部築城町所在、松丸道跡(D地区)出土縄文土器の位置づけ—』『九州考古学』第67号 九州考古学会

註5 水ノ江和同 1992『小池原上層式・下層式土器に関する諸問題—福岡県基上部大平村所在、土佐井道跡出土土器の位置づけ—』『古文化談叢』第27集 九州古文化研究会

註6 玉田芳英 1989『中津・福田Ⅱ式様式』『縄文土器大観』4 小学館

註7 高橋信武 1989『藤式土器再考』『考古学雑誌』第75巻 第1号 日本考古学会

註8 宮本一夫 1993『瀬戸内の縄文時代前期の地域採掘—江1日塚の事例を中心に—』『高瀬・畑塚の考古学』豊後県大西町教育委員会
中越利夫 1985『Ⅱ 帝釈峠道跡群出土の縄文前期土器の研究(1)』『広島大学文学部帝釈峠発掘調査年報Ⅱ』広島大学文学部帝釈峠道跡群発掘調査室

註9 橋賢俊一 1999『九州の縄文時代早期末から早期の土器編年に関する一考察』『古文化談叢』第42集 九州古文化研究会

註10 田崎博之 2002『焼成失敗品からみた弥生土器の生産と供給』『福岡市内の考古学—平井勝彦氏追悼論文集—』上巻 古代吉備研究会

註11 大分県教育委員会 1993『城南道跡—大分県大分市大字永興所在道跡の発掘調査報告書—』

註12 栗嶋重司 1993『永添道跡 中津城 中津市教育委員会』

註13 大分県教育委員会 2001『横尾道跡群第79次調査D-4・6地点(東中尾道跡)』『大分県遺産文化財調査年報』vol.12 2000年度

註14 後藤宗俊 1987『地産原道跡は語る』『大分県史』上巻 大分市

註15 大分県教育委員会 1996『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.7 1995年度

註16 池田千太郎 2001『豊後須恵器窯跡について』『大分県地方史』第180号 大分県地方史研究会

- 注17 大分市教育委員会 1997「井ノ久保遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 8 1996年度
- 注18 横尾遺跡第82次調査の概要については下記の文献にまとめているもの、刊行後に行った出土遺物の選別作業の結果、報告に若干の修正が必要となってきている。具体的には中世の埴輪土層の下部において確認された古代の埴輪土層 (82SX042) ならびに縄文時代後期中葉頃に比定した遺物包含層 (82SX046) の位置づけであり、後者からは多量に出土した縄文時代の遺物に伴って中世の遺物が僅かに認められたのである。このため、これらの埴輪土層は中世に行われた一連の造成土と判断されるものであり、この造成土の直下において縄文時代後期前葉頃に比定されるドンブリ貯蔵穴群が検出されたことになる。今回の修正結果は第87次調査における遺物の検出状況と符号するものである。
- 大分市教育委員会 2002「横尾遺跡第82次調査」『大分市市内遺跡確認調査概報 ー2001年度ー』
- 注19 田中良之 1996「出水式土器」『日本土器学典』雄山閣
田中良之 1981「阿蘇式土器」『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器Ⅱ 雄山閣
吉田 寛 坂本嘉弘 1997「下原遺跡」大分県教育委員会
- 注20 田崎博之 2002「焼成失敗品からみた弥生土器の生産と供給」『四瀬戸内海の考古学—平井 勝氏追悼論文集—』上巻 古代古墳研究会
- 注21 注20と同じ
- 注22 玉田芳英 1989「中津・高田KⅡ式土器土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 注23 注22と同じ
- 注24 水ノ江和岡 1993「九州の緑帯土器」『古文化談叢』第30集(上) 九州古文化研究会
- 注25 中越利夫 1985「Ⅱ 帯状焼遺跡群出土の縄文前期土器の研究(1)」『広島大学文学部帯状焼遺跡群発掘調査報告』
- 宮本一夫 1993「瀬戸内の縄文時代前期の地域縁組—江口貝塚の事例を中心に—」『古蹟・縄文の考古学』愛媛県大西町教育委員会
- 注26 牧尾義剛・宮内克己 1990「羽田遺跡(1地区)」大分県国東町教育委員会
- 注27 注7と同じ
- 注28 町田 洋先生(東京都立大学名誉教授)よりご教示いただいた。
- 注29 金原正明先生(奈良教育大学助教授)よりご教示いただいた。
- 町田 洋 新井研夫 2003『新編 火山図アトラス—日本列島とその周辺』東京大学出版会
- 注30 下記ではアカホヤ降下後の液状化現象による噴砂として報告したものであるが、背崩の可能性がある高くなっている現象である。
- 大分市教育委員会 2002「横尾遺跡第82次調査」『大分市市内遺跡確認調査概報 ー2001年度ー』
- 注31 稲賀俊一 1999「九州の縄文時代草創期末から中期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集 九州古文化研究会
- 注32 2つ並んで出土した黒曜石の内、北側に位置するものである。南側の黒曜石については最終作業面の高さ12.60cm、幅42.40cm、奥行23.00cm、重さ10.3kgを測る。
- 注33 黒島産黒曜石においては大分県国東町羽田遺跡出土の大形石核が最大のもので、12.5kgを重る。縄文時代前期に比定され、黒島産黒曜石の中継・加工基地と位置づけられている遺跡から出土している。
- 宮内克己 2003「大分県旧石器—縄文時代遺跡出土の黒島産黒曜石」『大分県立歴史博物館』第4号 大分県立歴史博物館
- 注34 吉良照光 1996「鎌倉時代後葉期における地域的流通圏について—大野川流域を中心として—」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第33巻 大分県立芸術文化短期大学
- 注35 注34と同じ。正安3年(1301)鎮西探題は島津久長に対し、海賊鎮定のため「豊後國津々浦々船」に対し、在所・船主交名を其の船に印り付け、且敵を往還するように命じているにも富及し、豊後國內の隈東から南部にかけての河口を中心とした海岸部に、乙津と同様な「津」がかなりの数存在していた可能性を指摘している。
- 注36 今田勇樹氏(天瀬町教育委員会)よりご教示いただいた。豊後高田市教育委員会 1995「寺田御月遺跡」
- 注37 坂本嘉弘氏(大分県教育委員会)よりご教示いただいた。北九州市教育委員会 1985「勝丹遺跡(C)地点」
- 注38 中野良一氏(愛媛県埋蔵文化財調査センター)よりご教示いただいた。愛媛県埋蔵文化財調査センター1994「鶴来が元遺跡」四国版頁

註39 町田 洋 新井房夫 2003『新編 火山灰アトラス-日本列島とその周辺』東京大学出版会

アカハヤ火山灰の降下年代については約6300年前とみなされていたものの、近年同位体分別測定を行い、暦年校正した年代が提示されている。

註40 「水場の遺構」設置に伴う掘り込み地帯内に形成された黒色有機質土層については既往の調査において掘削と報告した堆積土層にあたる。泥炭層という表現は半融成の腐植作用によって形成された土壌を示すもので、今回の報告では生成環境をほぼ特定することになる表現は避けることにした。当該土層については現在サンプリングを行い、生成要因について分析中であり、分析結果に期待したい。

平山麻治 1993「1.2 腐植の形態分析法」『第四紀試料分析法2 研究対象別分析法』東京大学出版会

註41 清水栄昭 1982「鹿島産の黒曜石とガラス質安山岩の分布について」『賀川光夫先生追悼記念論集』賀川光夫先生追悼記念会

註42 志賀智史 2002「大分県における縄文時代の石材利用と西北九州産黒曜石製石器について」『石器原産地研究会誌Stone Sources』№1 石器原産地研究会

註43 清水栄昭 1983「交易」『大分県史』先史Ⅳ 大分県総務部

註44 綿貫俊一 2002「九州の旧石器時代後期から縄文時代早期の石材入手とその消費」『石器原産地研究会誌Stone Sources』№1 石器原産地研究会

註45 宮内克己 2003「大分県旧石器-縄文時代遺跡出土の黒島産黒曜石」『大分県立歴史博物館』第4号 大分県立歴史博物館

註46 宮坂 清 1990「一の釜遺跡(2)」下瀬町教育委員会

註47 伊万里市教育委員会 2000『午尻遺跡』

註48 金山嘉昭 1993「縄文時代前期における黒曜石交易の出現」『法政考古学』第20号 法政考古学

金山嘉昭 1998「黒島間の交流と交易」『季刊考古学』第64号 雄山閣出版

註49 小畑弘己 2003「佐賀県伊万里市午尻遺跡の石材集積遺構と鉤型石刃技法」『石器原産地研究会 第3回研究会発表資料』石器原産地研究会

SX002集積遺構出土資料を検討した結果、部分的ではあるものの、石材の稜線を中心に微細な段れや擦り合わせたような面的な広がりをもつものが高率で認められ、パティナが他の面と同じであることや1個体の複数の面に存在することから、後世の傷とは考えられないことが指摘されている。また、その部位が刃として使用しないような角度をもつ稜上に認められることから、これらの痕跡についてはそれぞれの石材同士がぶつかりあったりこすれあったりして生じた傷と位置づけ、袋状の入れ物に入れて運搬された時についたものと推定されている。

註50 宮坂 清 印中慎太郎 2001『黒曜石原産地詳細分布調査報告書Ⅰ-和国峠・霧ヶ峰-』下瀬町教育委員会

参考文献

- 高橋信武 1986『古京西道跡』 获町教育委員会
- 富田祉一 1986「付録、Ⅱ-8。千原台道跡出土縄文土器の位置づけ」『戸塚道跡発掘調査報告書』 熊本市教育委員会
- 千葉 豊 1992「西日本縄文後期土器の二三の問題—熊戸内地方を中心とした研究の現状と課題—」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会
- 前田光雄 1994「宙毛式。その特質」『研究紀要』第1号 (財)高知県文化財保護文化財センター
- 橋本久和 1995「土器論から中世前期商業史への展開」『展望 考古学』 考古学研究会
- 吉良国光 1995「縄文時代豊後国における地域的流通圏について—大野川流域を中心として—」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第33巻 大分県立芸術文化短期大学
- 塩地朋一 1997「豊前南部及び豊後地方における古墳の終焉と火葬墓の出現」『古墳時代から古代における地域社会』 第41回埋蔵文化財研究委員会発表資料 埋蔵文化財研究会
- 狭川真一 1996「古代火葬墓の遺言とその背景」『古代文化講座』第41集 九州古文化研究会
- 狭川真一 1999「北部九州における火葬墓の出現」『古代文化』第51巻第12号 財団法人古代学協会
- 綿貫俊一 萩 申二 1999「一方平」道跡』 大分県教育委員会
- 大分市教育委員会 2002「隴尾道跡第82次調査」『大分市市内道跡発掘調査報告書 —2001年度—』

横尾遺跡第86・87次調査



写真1 第86次・87次調査区全景（北より）



写真2 調査区遠景（南より）



写真3 86SD001土層断面（南より）

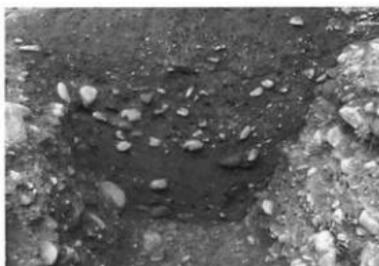


写真4 86SD015土層断面（南より）



写真5 86SX023道構検出状況（北より）



写真6 86SD001全景（北より）



写真7 第87次調査区北壁土層断面（南西より）



写真8 第87次調査区中央土層断面（東より）

横尾遺跡第87次調査



写真9 SX018道構検出状況(南より)



写真10 SX019道構検出状況(東より)



写真11 SX012土層断面(東より)



写真12 SX012遺物出土状況(北より)



写真13 SX012遺物出土状況(南より)

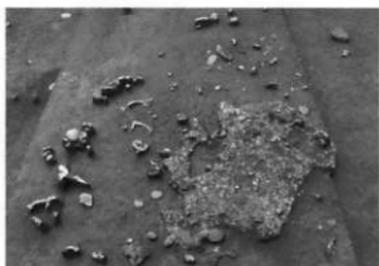


写真14 SX026遺物出土状況(北より)



写真15 SX026遺物出土状況近景(東より)



写真16 SX031道構検出状況(南より)

横尾遺跡第88次調査



写真17 SX007遺構検出状況（東より）

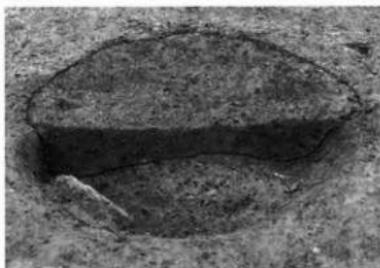


写真18 SX025土層断面（西より）



写真19 SX009遺構検出状況（南より）



写真20 SX011遺構検出状況（北より）

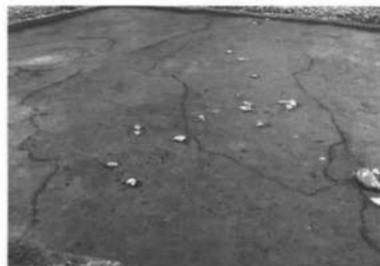


写真21 SD008遺構検出状況（南より）



写真22 SD001遺構検出状況（西より）

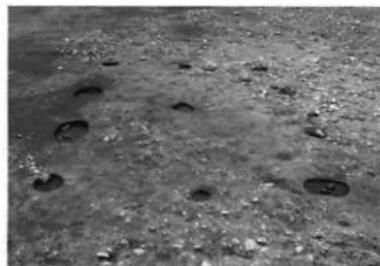


写真23 SB010遺構検出状況（南より）



写真24 SD028遺構検出状況（東より）

横尾遺跡第82-3次調査



写真25 中世造成土出土姫島産大形原石

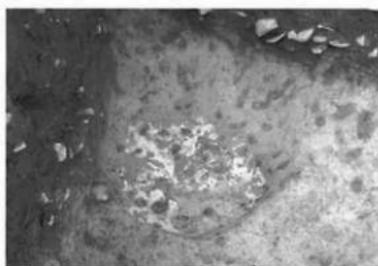


写真26 SX007完掘状況(南より)



写真27 SX010堆積面プラン検出状況(東より)

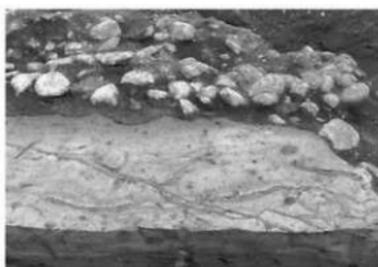


写真28 SX010・011平面プラン検出状況(北より)



写真29 西側調査区西壁土層断面(東より)



写真30 西側調査区A-A'地点土層断面(西より)



写真31 中央土層断面(西より)

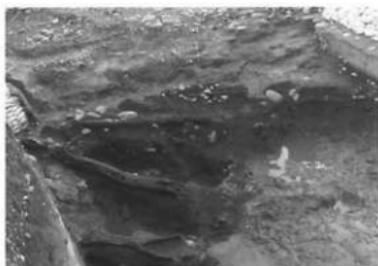


写真32 SX080検出状況(北より)

横尾遺跡第82-3次調査



写真33 「水場の遺構」を固定する杭検出状況(北より)



写真34 東側調査区西壁土層断面 (東より)



写真35 東側調査区西壁土層断面近景 (東より)



写真36 SX021黒曜石出土状況 (南より)



写真37 黒曜石出土状況近景 (南より)



写真38 SX022木材群検出状況 (南より)



写真39 SX021黒曜石出土状況 (上が北)



写真40 東側調査区北壁土層断面 (南より)

城原・里遺跡

第7次調査



2004

例 言

- 1 本書は、平成15年度に大分市教育委員会が実施した城原・里道跡における埋蔵文化財確認調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査の費用は、国と県から補助金を受けて、大分市が負担した。
- 3 調査および本書の編集は池邊千太郎、羽田野達郎、松竹智之が担当した。
- 4 本書に掲載した遺構実測図は、調査担当である池邊千太郎・松竹智之が、姫野尚之・植田高夫の協力を得て作成した。遺構の写真撮影は池邊、松竹が行った。
- 5 遺物の整理・土器の実測・トレースは、芦田美保子・矢野幸栄・神崎順子の協力を得て行った。
- 6 図版、表作成は、芦田・矢野・神崎が行った。
- 7 本調査の座標は、旧日本測地系の平面直角座標2系（北緯33°07'、東経131°07'）をX・Y座標を基点として調査を行った。図版の座標の（ ）内は、世界測地系（日本測地系2000）の数値を記載している。
- 8 図版の座標に用いた方位は、すべて座標北(G.N.)である。
- 9 発掘調査従事者は下記の通りである。
荒倉 貴子 植田 高夫 大杉 啓子 神田ムツ子 草野扶美子 佐々木盛子 佐藤 良江 薬 忠次
杉谷 玲子 富永 妙子 直野 俱枝 西田 裕子 林 スミエ 姫野 尚之 姫野 学 御手洗幸子
幸 富蔵 幸 房代
- 10 調査・報告に際して下記の方々には多くのご指導を頂いた。(敬称略)
西別府元日(広島大学教授)、山中 章(三重大学教授)
橋 昌信(別府大学教授)、下村 智(別府大学助教授)、大林達夫(防府市教育委員会)

目 次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第2章 道跡の立地環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	
第1節 城原・里道跡の調査	5
第2節 城原・里道跡第7次調査	8
第3節 出土遺物	15
第4章 まとめ	
第1節 掘立柱建物跡の変遷	16
第2節 今後の課題	19

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

城原・里道跡は、大分市大字里字台に位置する。これまでこの周辺における調査は、平成7年度に第1次調査がおこなわれて以来、平成9年度に南側に位置する丹生川坂ノ市条里跡から円面硯が出土し、付近に官衙の性格を持つ道跡の存在を窺わせるようになった。そうした折、平成10年度～12年度にかけて、都市計画道路横塚・久土線の工事に伴い第2次～第4次調査（中安道跡）がおこなわれた。ここでは、規格性のある大型掘立柱建物跡が見つかるとともに円面硯や刻書土器、都城系土師器の出土から官衙道跡として推定されるに至った。さらに、平成14年度には、市道の城原・里線において道路拡幅工事に伴う第5次調査を実施した。この調査では、弥生時代中期の円形の竪穴住居跡、7世紀前半～中頃の方形の竪穴住居跡、7世紀中頃～末の掘立柱建物群が確認された。特に、注目すべきは、大型の掘立柱建物跡が東西と南北方向に十字状に整然と配置していることであった。

こうした調査の経過により、城原・里道跡は古代の官衙関連が展開した重要な道跡と考えられるようになり、今年度より市内道跡確認調査として継続的に調査をおこなうこととなった。

今年度の調査は、昨年度調査をおこなった第5次調査区の南側を調査対象とし、大型掘立柱建物跡の建物配置と範囲、並びに道跡の性格を確認するために平成15年7月29日～10月31日にかけて実施した。

第2節 調査組織

調査指導	坂井 秀弥（文化庁文化財部記念物課主任調査官）
	岡田 康博（文化庁文化財部記念物課文化財調査官）
	山中 敏史（独立行政法人奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 遺物調査技術研究室長）
	後藤 宗俊（別府大学教授）
	渋谷 忠章（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）
調査主体	大分市教育委員会 教育長 秦 政博
事務局	大分市教育委員会
文化財課	課長 帯刀 修一
	参事 玉永 光洋
管理係	管理係長 久多羅岐明
	主査 平野 勝敏
指導主事	姫野 公徳
	主任 桑原 治 安部 一成
	主事 三浦 亜紀
文化財係	課長補佐兼文化財係長 讃岐 和夫
	専門員 塔鼻 光司
指導主事	後藤 典幸
	主任技師 坪根 伸也 池邊千太郎 塩地 潤一
	技師 高島 豊 河野 史郎 中西 武尚
	主事 永松 正大 佐藤 道文
	事務員 五十川雄也
嘱託	井口あけみ 萩 幸二 宮田 剛 奥村 義貴 勝間田あや 苅谷 史徳
	羽田野達郎 梅木 信宏 上野 淳也 梅田 昭宏 岩尾美保子 佐藤 孝則
	松竹 智之 松尾 聡 小住 武史 羽田野裕之 吉本 明弘 水町 裕子
	江上 正高 小橋 寛之 衛藤 亮介 秦 さとみ 大野 瑞穂 佐藤 暁子

第2章 遺跡の立地環境

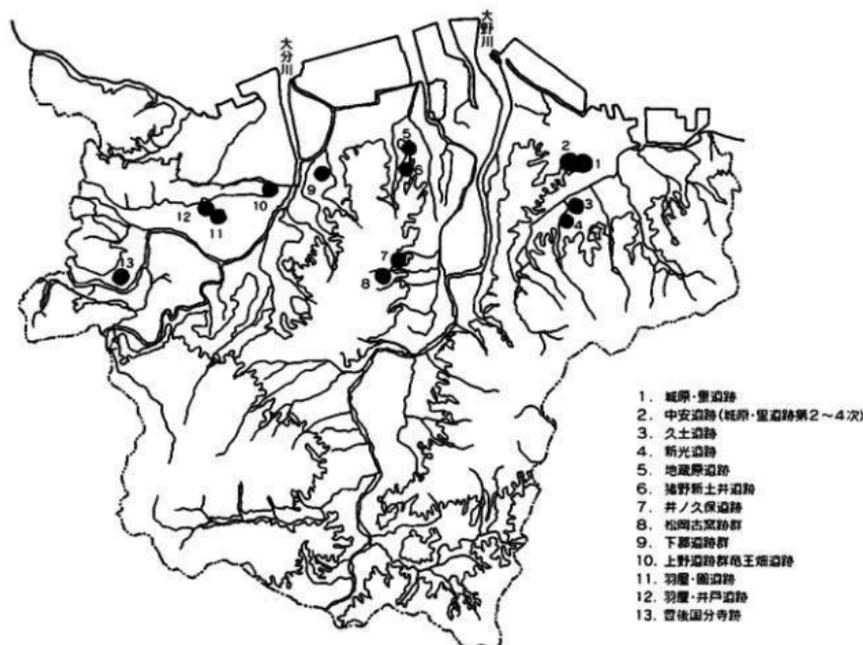
第1節 地理的環境

城原・里道跡は、大分市の東部にあり、北に別府湾を望み、南道には九六位山をはじめとした佐賀岡山地が東に向かって延びている。このうち道跡は、西側にある大野川下流域と東側にある丹生川とに挟まれた標高42mの城原丘陵の東部に位置する。道跡周辺の地形は、道跡が展開する200m四方が平坦面を形成し、やや南下がりの傾斜を有する。東側では開析谷が押寄せている一方、西側では一旦丘陵尾根が挟まるものの平坦な丘陵が連なって延びている。この平坦面に中安道跡が展開する。南側は丘陵斜面が迫っており、その前方に丹生川を展望することができる。北側も同様に丘陵斜面が迫っており、大野川と丹生川によって形成された沖積低地の大分平野が丘陵下に広がっている。

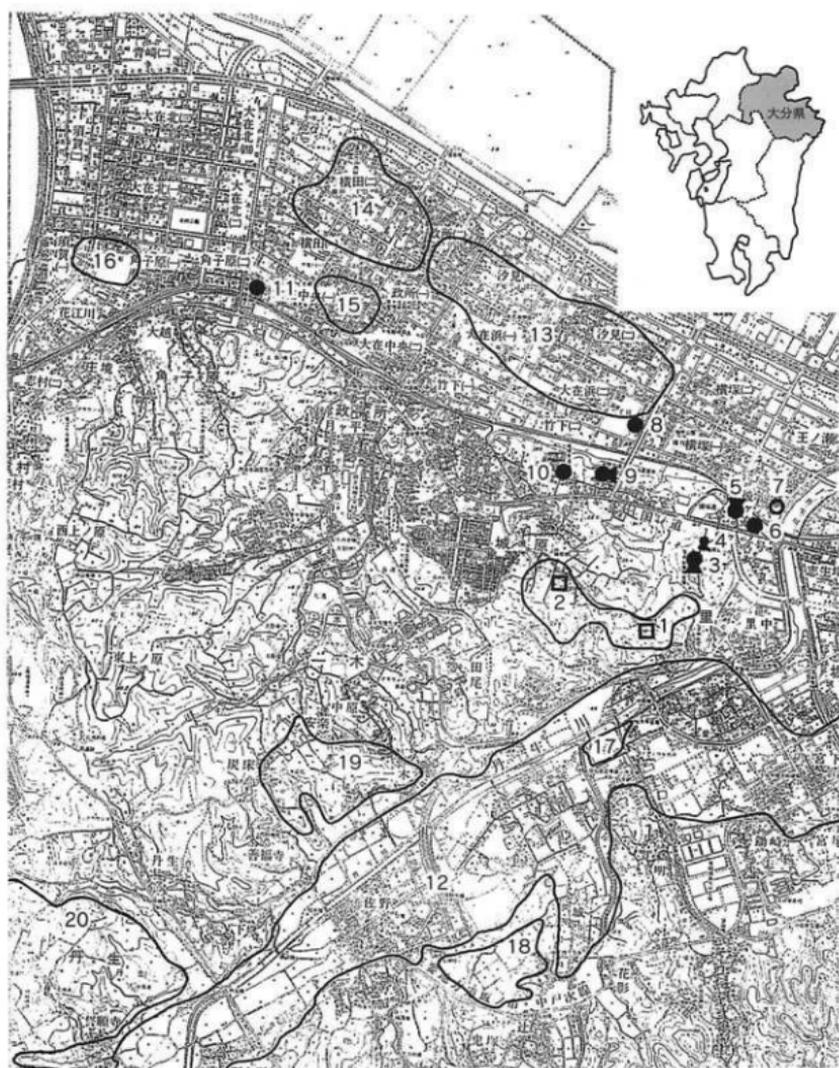
第2節 歴史的環境

城原・里道跡を中心とした周辺の歴史的環境を時代別に見ると、最も古い時期の遺物が確認できるのは、南西側に位置する丹生道跡である。ここでは後期旧石器時代後半～細石器文化期に比定される石器が出土している。

縄文時代では丹生道跡において継続して見られる。その南側に位置する丹生川道跡において後期前半頃から遺物が見られる。城原丘陵周辺の北側に位置する浜道跡では、後期の土器が見られるようになり、さらに浜・長無田道跡では、晩期終末の上管生B式・下黒野式土器を主体とする資料がまとまって発見されている。このことから、この段階に台地上から低平地への生活の場の移動がおこなわれたと考えられる。



第1図 大分市内における官衛関連遺跡分布図



1 城原・里遺跡	2 中安遺跡(城原・里遺跡)	3 亀塚古墳	4 小亀塚古墳	5 辻1号墳
6 辻2号墳	7 王ノ瀬石棺	8 横塚古墳	9 大蔵古墳	10 城原天神社裏古墳
11 大在古墳	12 丹生川坂ノ市条里跡	13 浜・長無田遺跡	14 政所遺跡	15 大在政所遺跡
16 下志村遺跡	17 丹生川遺跡	18 久土遺跡	19 一本遺跡	20 丹生遺跡群

第2図 城原・里遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

弥生時代では、縄文時代から継続する丹生川遺跡において、水田跡そのものは発見されていないが、近年の粘土採集現場から矢板・杭・木塚などが見つかっており、丹生川沿いの狭い丘陵地の體で水稲耕作が始まった可能性が指摘できる。また、城原丘陵北側の海岸に面した砂丘段丘上には、墓域が形成された浜遺跡、丹生川を越えて東側の同じ砂丘にも墓域が形成された久原遺跡が連なっている。また、この地域では青銅器が出土していることから、有力者のムラの存在が想定される。これまで集落は、台地上の城原・里遺跡の西側に位置する一木遺跡や大野川下流沿いの平野部に位置する下志村遺跡において、竪穴住居跡が多く見つかっている。

古墳時代に入ると、墓域を形成する浜遺跡では、前期に箱式石棺墓が登場し、副葬品の存在により、ムラの構成員の中から有力集団が出現したことを示唆している。城原丘陵周辺では古墳が中期に現れ、大分県内で最大規模を誇る全長120mの前方後円墳である亀塚古墳をはじめ、全長50mの大蔵古墳、蓋形・家形埴輪等の形象埴輪が出土した辻1号墳など多くの前方後円墳が点在している。

6世紀以降、周辺部の丘陵斜面には多くの横穴墓が造営されるようになる。なかでも東側に位置する飛山横穴墓群では、横穴式石室と遜色ない副葬品が見られることから、この地域では墓制が高塚墳から横穴墓へ変わっていく様子が窺える。

古代に移ると、城原丘陵周辺は海部郡の大分君の支配下に豊後国佐井郷として編成されていたことが、「和名抄」などから窺える。城原・里遺跡の400m西側にある中安遺跡では、整然と並ぶ大型掘立柱建物跡群が確認され、海部郡衙の政庁であると推定される。近くに亀塚古墳をはじめとする古墳群が多く見られることから、海部郡の中心が古墳時代以来、丹生川下流域の佐井郷にあったことが窺われる。

中世には「豊後國圖田帳」によると、佐井郷は國衙領となり、その後、南北朝時代以降は大友氏の所領となっている。この段階の周辺の遺跡では、下志村遺跡において多数の掘立柱建物跡や井戸による遺跡が展開しており、これらとの関連が注目される。

近世には臼杵藩および熊本藩の藩領として、村ごとに複雑に入り組んだ状況で幕藩体制に組み込まれていった。

参考文献

- 大分市史編纂委員会 1987『大分市史』上・中
大分県考古学会 2000『古代律令国家と海部の先史』

第3章 調査の概要

第1節 城原・里道跡の調査

城原・里道跡における調査は、今回の調査で第7次となる。平成7年度に第1次調査がおこなわれて以来、平成10年度～12年度にかけて第2次～第4次調査（中安道跡）がおこなわれ、平成14年度に市道の城原・里線の改良工事に伴う第5次調査、平成15年度に同工事に伴う第6次調査がおこなわれている。

第1次調査

今回の調査区の200m西に位置する。携帯電話中継局建設に伴う調査により、弥生時代、古代、中世、近世の遺構が確認された。主な遺構では、弥生時代前期末頃の溝状遺構、同時代中期の貯蔵穴、8世紀初頭に比定される木棺墓、15世紀代の南北に延びる溝状遺構2条、木蓋土坑墓が確認されている。特に弥生時代前期末頃の環濠の一部と思われる溝状遺構は、断面形状が調査区の南側で逆台形、北側でV字形と異なっている。

第2次調査～第4次調査

第2次～4次調査は、都市計画道路の横塚・久土線の工事に伴っておこなわれ、弥生時代、古墳時代、古代、近世の遺構が確認された。

第2次・4次調査区では、方形周溝遺構、溝状遺構、6世紀前半～7世紀中頃の竪穴住居跡が調査区の西側と東側の一部に約30軒が集中して確認されている。

第3次調査区では、7世紀後半～8世紀後半にかけての郡庁と推定されている大型掘立柱建物跡群が確認された。この建物跡群は、建物の方位や切り合い関係、出土遺物から3時期に区分できる。



第3図 城原・里道跡の調査区位置図 (1/5,000)



第4図 中安遺跡遺構配置図

第3期（8世紀後半頃）は、第1・2期の遺構群を埋めた整地層を基礎面とした遺構群で、明確な建物配置は不明ながらも、第1期の建物方位と同じ大型の掘立柱建物群が展開する。

第5次調査

第5次調査は、市道の城原・里線の改良工事に伴う調査によっておこなわれた。調査は、道路幅幅予定部分の東西200mにおよび、東のA区から西のD区まで4地区に分けて調査（調査面積1617m²）を実施した。

その結果、ほぼ全対象区域から遺構が確認された。特にA区の一部においては、道路幅幅部分に大型の掘立柱建物群の一部が検出されたため、道路幅幅予定部分外の南側に調査区（A-1区：調査面積780m²）を拡げて遺構を確認した。これにより、弥生時代中期の円形の竪穴住居跡2軒、7世紀前半～中頃の方形の竪穴住居跡6軒、7世紀中頃～末の大型掘立柱建物跡9棟が確認された。

この大型掘立柱建物跡は、整然と建物が配置されており、一定の規格性が見られた。そして建物が、3時期に継続しながら展開する状況が確認された。特に2期の段階より南北に延びる建物と東西に連なる建物が規格性を持って配置されている。建物の規模は、いずれも大型であり、柱穴の掘り方が直径1mを越すものも多く見られた。

建物群1期

最初の建物群は、東西方面に延びるSB005（2間×5間、4.4×10.5m）・SB008（2間×1+ α 間、3.9×1.9+ α m）の2棟である。いずれの建物も方形の竪穴住居跡を切って建てられている。

建物方位は2期や3期に比較して西側に傾き、N-11°-12°-Wに振る。また、柱間寸法も1.9～2.0mと間隔が広い特徴が見られ、柱穴は隅丸方形を呈している。

出土遺物は、時期を決定できる遺物は出土していないが、周囲に方形の竪穴住居跡（SH118）が検出されており、畿内産土師器の腕、須恵器の坏身・灯蓋から7世紀第2四半期に位置付けられることから、これと同時期もしくは、やや下った年代が考えられる。

建物群2期

2期の段階では、建物配置が1期の建物を踏襲した状況で配置されている。建物配置は、3時期の中で最も整然としている。北側には、総柱の掘立柱建物跡であるSB001（2間×2間、3.6×3.9m）があり、南北に延びる掘立柱建物跡であるSB002（2間×5+ α 間、3.9×8.2+ α m）からし字状に直行する状況でSB004（3間×5間、4.8×10.1m）とSB006（2間×5+ α 間、3.6×8+ α m）が西側に延びている。なお、SB002とSB004の間には柵列跡が確認でき、北側にあたる柱穴列の面は一直線にそろっている。

建物方位はN-6°-7°-Wに振る。柱間寸法は約1.8mと1期と比較するとやや短い。柱穴の掘り方は大きく、1mにおよぶものが見られる。

第1期（7世紀後半～末頃）は、丘陵に沿って東西に伸びる道路状遺構に直行して南北建物群が展開し、柵によって部分的に区画されており、ある程度の規格性が認められる。

第2期（8世紀初頭～前半頃）は、大型掘立柱建物群3棟と井戸跡が造られ、南側に四脚門を持った建物が見られる。建物群には規格性があり、建物の配置から南北40m以上、東西30m以上のコ字形あるいはロ字形に囲まれた官衙的な建物配置となっている。大型の掘立柱建物群からの出土遺物は、官衙的施設で多く出土する円面硯・刻土器・都城系土師器などが見つかっており、郡庁である可能性が高い。

出土遺物は、掘立柱建物跡であるSB002の南西側にあたる柱穴(S008)の柱痕抜き取り跡の埋土から都城系土師器皿、須恵器の坏身・坏蓋が出土した。また、掘立柱建物跡であるSB004の南西側にある柱穴(S038)からは完形の須恵器の坏蓋が出土した。時期は7世紀第3四半期に位置付けられる。

建物群3期

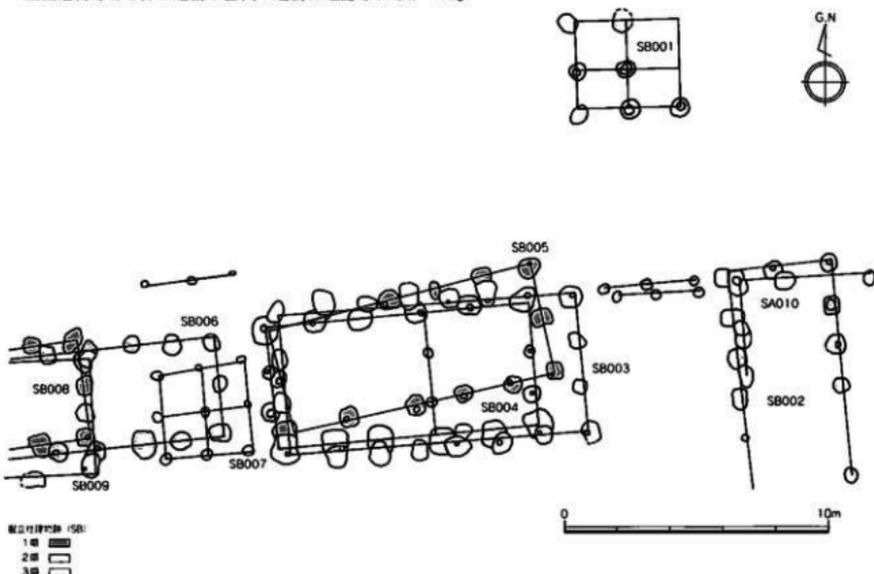
3期は、2期に続いて同一場所に建替えがおこなわれている。中心的な建物であるSB003(3間×7間、5.4×11.4m)は、3期中で最大規模となる。SB007(2間×2間、3.4×3.4m)とSB009(2間×1+α間、4.5+αm)の南面は軒を真直ぐにそろえている。

建物方位は、2期よりも北寄りに向き、N-4°~6°-Wに振る。柱間寸法は、3時期の中で最も短く、約1.5~1.7mになる。柱穴の掘り方は、1・2期と比較すると粗雑化している。

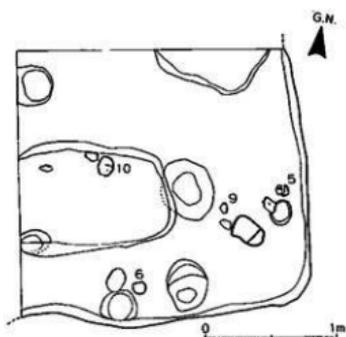
出土遺物は、東側に位置する柵列(SA010)の柱穴(S013・S019)から都城系土師器皿が出土している。SB003の柱穴(S023)からは、完形に近い須恵器の坏蓋、柱穴(S029)からは都城系土師器皿、柱穴(S040)からは須恵器の坏蓋が出土している。これらの遺物から遺構の最終埋没時期は7世紀第4四半期と考えられる。

竪穴住居跡は、A-1区から8軒検出された。そのうち6軒は、7世紀前半~中頃の方形の竪穴住居跡である。その大半は、掘立柱建物跡に切られていることから、竪穴住居から掘立柱建物の変遷が窺える。しかし、SH118(4.0×4.5m)のみは、大型掘立柱建物跡との切り合いがなく、北側に並列した位置である。期的には、床面から都城系土師器の椀、土師器の甕、須恵器の坏蓋・坏身などの遺物が出土しており7世紀第2四半期に比定される。このため、SH118は建物1期と並存していた可能性も考えられる。

A-1区の北側にあたるA-2・3・4区(調査面積241m²)では、A-1区と比較して遺構検出面が近世の耕作によって約90cm程削平されており、遺構は検出されなかった。また、道路に沿った調査区のB・C・D区(調査面積588m²)においては、柱穴・溝状遺構・道路状遺構が確認されたが、A-1区に見られるような大型掘立柱建物跡群を伴う遺構や古代の遺物は確認されなかった。



第5図 大型掘立柱建物跡配置図(1/200)



第6回 SH118平面図 (1/40)

第6次調査

第6次調査は、市道の城原・里線の改良工事の路線変更に伴っておこなわれた。調査区は、第1次調査区と第5次調査B・C区の北側に隣接している。

調査の結果、弥生、中世、近世の遺構を確認したが、第5次調査A-1区で確認した大型掘立柱建物跡群に関連する遺構は検出されなかった。主な遺構は、弥生時代中期の貯蔵穴1基、中世の南北に延びる溝状遺構2条、現在の道路に沿って第5次調査C・D区で確認された道路状遺構の続きである近世段階の道路状遺構を確認した。

なお中世の溝状遺構2条は、第1次調査で確認された15世紀代の溝状遺構の延長部と考えられる。

第2節 城原・里遺跡第7次調査

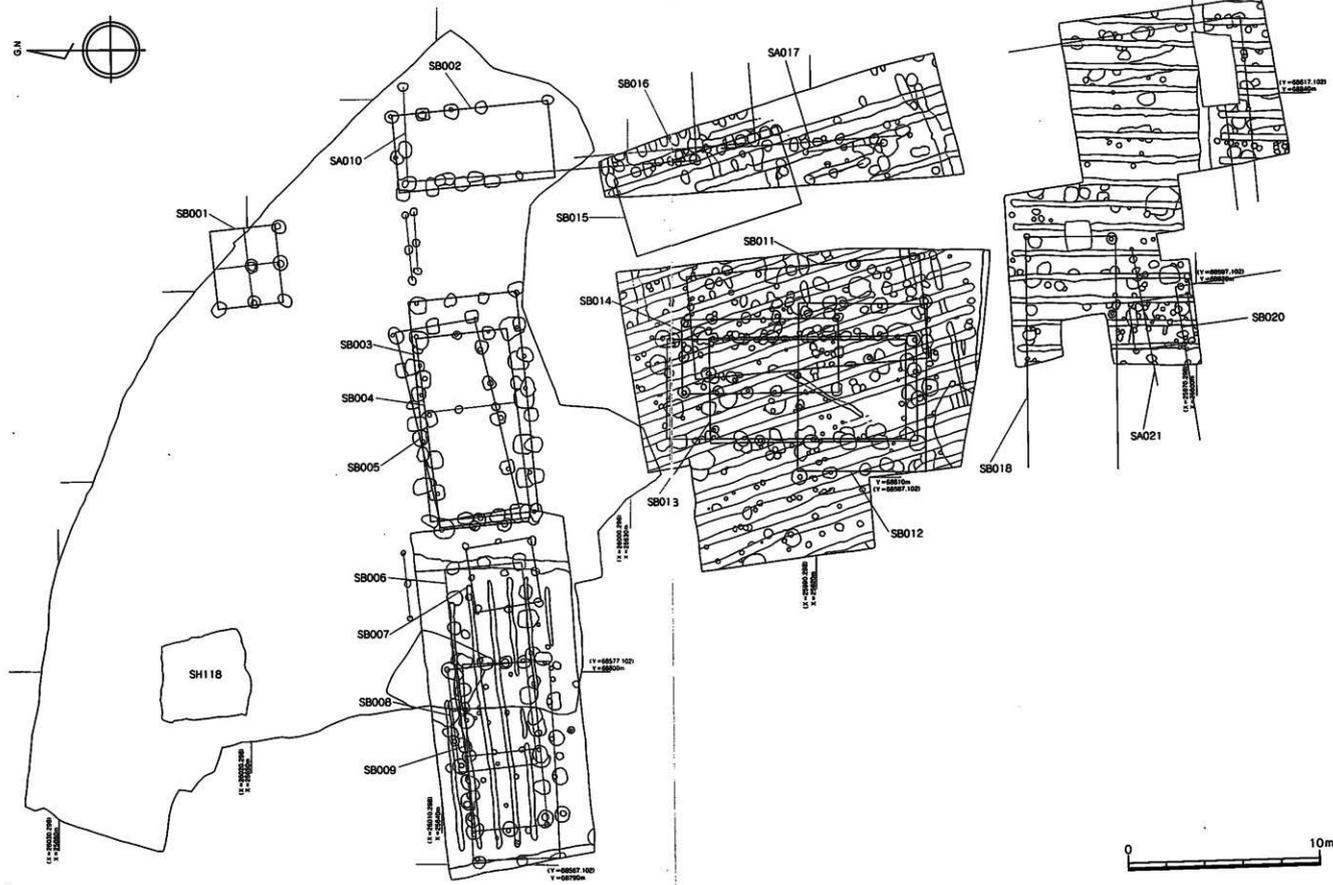
今回の調査では、第5次調査で確認された大型掘立柱建物跡群の南側と西側の状況を把握することと、建物群の性格を明らかにすることを目的として、A区からD区の4ヶ所に調査区（調査面積654.1㎡）を設置し、調査をおこなった。

A区は調査区西側に位置し、第5次調査で確認された東西方向に延びる大型掘立柱建物跡（SB008・SB006・SB009）の延長部に設置した。B区は調査区東側に位置し、第5次調査で確認された南北方向に延びる南北建物跡（SB002）の延長部に設置した。C区は調査区南側に位置し、東西方向に設置した。D区は調査区中央部に位置し、東西方向に延びる大型掘立柱建物跡の南側に設置した。

遺構の検出面は、北側にあるA区から南側のC区に向かって約80cm下っており、全体的に南側に向かって緩やかに低くなっている。また、A区から東側のB区に向かって約80～100cm下っており、谷が押寄せている東に向かって低くなっている。

また、A～D区の各調査区には、等間隔に並ぶ溝状遺構が確認された。その方向は、現在の畑の区画毎に異なっている。溝の深さは、検出面より約20～50cmと深く、しっかりした造りである。また、溝には切り合いが無いことから1時期に掘削されたものである。遺構の時期は、古代の建物群を切っており近世の遺物を含んでいることから、近世以降の所産と考えられる。遺構の性格としては、畑の耕作や植栽に伴って掘削されたものが想定されよう。

全体的に遺跡は、近世の削平を受けているものと見られ、掘立柱建物群が構築された段階において整地を伴っていたかは確認することができなかった。



第7圖 第5・次調査遺構図

A 区

A区は、第5次調査で確認した東西に延びる大型掘立柱建物跡群の西側にあたる東西18m、南北8mの調査区(面積144㎡)である。遺構は、地表面より約30cm下で検出され、第5次調査で確認された大型の掘立柱建物跡3棟(SB008・SB006・SB009)の延長部と柱穴、土坑、近世の溝状遺構である。

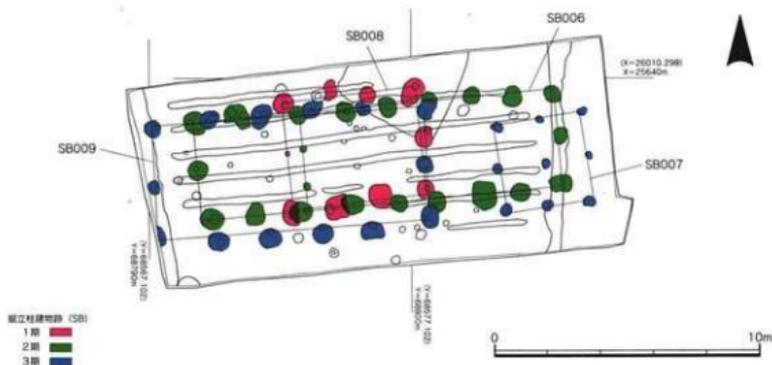
SB008は、東西建物跡(3間×2間、5.2×4.2m)で、建物方位はN-11°-W、柱間寸法は桁行1.8~1.9m、梁行1.9mを測る。柱穴は直径70cmの隅丸方形を呈している。SB006によって切られている。

SB006は、中央部で検出した東西建物跡(8間×2間、13.9×3.8m)で、建物方位はN-6°-W、柱間寸法は桁行1.6m、梁行1.8~1.9mを測る。柱穴は直径60~70cmのやや崩れた隅丸方形を呈している。SB009によって切られている。

SB009は、西側から中央部で検出した東西建物(5間×2間、10.4×4.6m)で、建物方位はN-5°-W、柱間寸法は桁行1.5~1.8m、梁行2.2mを測る。柱穴は直径80~100cmのやや崩れた隅丸方形を呈している。

これらの掘立柱建物跡3棟は、建物方位と柱穴の切り合い関係により、SB008→SB006→SB009の変遷を捉えることができる。

また、第5次調査では、建物群1期の時期が不明であったため、1期の建物にあたるSB008の柱穴(S002・S005)について一部掘り下げをおこなった。いずれも柱穴の残りは良く、深さは約60~70cmを測る。柱痕の抜き取り跡を観察することができたが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。その他の出土遺物では、第5次調査の建物群2期に該当するSB006の南西隅にあたる柱穴(S023)の柱痕抜き取り跡より須恵器の坏蓋が出土した。遺物は、形態の特徴から7世紀第3四半期に位置付けられる。それ以外の遺構からは、時期を特定できる遺物は確認できていない。



第8図 A区遺構配置図(1/200)

B 区

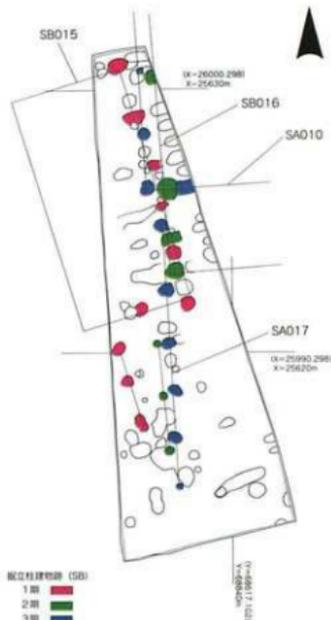
B区は調査区東側に南北19m、東西2～6.5mの南北方向に長い調査区(84.4㎡)である。遺構は、地表面より約50～70cm下で検出され、掘立柱建物跡2棟(SB015・SB016)、柵列(SA017他)、柱穴、近世の溝状遺構である。いずれも南北方向に延びている。

SB015は、北西側で検出した南北建物跡(5間×2間+ α 、 $9.4 \times 3.9 + \alpha$ m)で、建物の一部が調査区外に延びている。建物方位は $N-11^\circ-W$ 、柱間寸法は桁行1.9～2.1m、梁行1.9mを測る。柱穴は直径50～70cmの隅丸方形を呈している。建物群1期のSB005やSB008と方位が同一である。

SB016は、SB002の南側の延長部にあたる南北建物跡(4間× α 間、 $7.6 + \alpha \times 1.6 + \alpha$ m)で、建物の東側一部が調査区外に延びる。建物方位は $N-6^\circ-W$ 、柱間寸法は桁行1.8～1.9mを測る。柱穴は直径60～80cmのやや崩れた隅丸方形を呈している。建物群2期のSB002、SB004、SB006の方向と同一である。

この掘立柱建物跡2棟は、建物群1期と2期に該当することから、SB015→SB016の変遷が想定できる。また、SB015とSB016には、これらに付随して造られたと考えられる同一方位に延びる柵列が見られた。

なお、南北柵列であるSA017(5間+ α 、 $9.4 + \alpha$ m)は、第5次調査区のSA010の延長線上に位置し、方位は $N-5^\circ-W$ 、柱間寸法は1.9～2.0mを測る。柱穴は直径50～70cmのやや崩れた隅丸方形を呈している。したがって、建物群3期に相当するものと考えられる。



第9図 B区遺構配置図(1/200)

C 区

C区は調査区南側に設定された東西19m、南北最長15mの不規則に設置された調査区(面積168.8㎡)である。遺構は、地表面より約30～40cm下で検出され、東側に向かって若干低くなっている。検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟(SB020・SB018)、柵列跡(SA021)、土坑、柱穴、近世の溝状遺構である。遺構の大半が、調査区外に延びているために、検証できていない遺構が多数あると考えられるが、いずれも東西方向に延びる遺構配置が多い。近世の溝状遺構については、南北方向であった。

SA021は、調査区の中央部から南西側で検出した東西柵列跡(4間+ α 、 $6.1 + \alpha$ m)で、建物方位は $N-11^\circ-W$ 、柱間寸法は1.8～2.0mを測る。柱穴は直径20～30cmの円形に近い隅丸方形を呈している。南側に展開する建物配置を有することも考えられる。建物群1期と方向的に類似する。

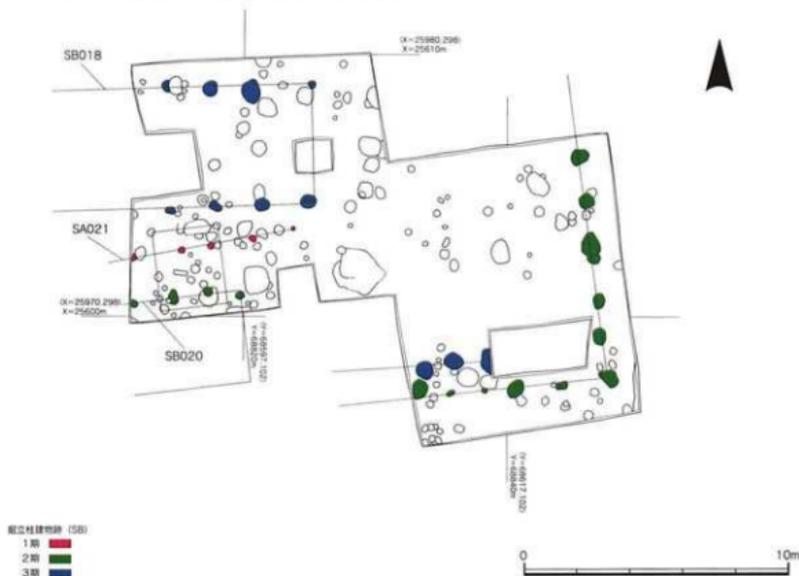
SB020は、南西側で検出した東西建物跡(3間+ $\alpha \times 3$ 間+ α 、 $6.2 + \alpha \times 0.9 + \alpha$ m)で、建物方位は $N-6^\circ-W$ 、柱間寸法は桁行1.6～1.8mを測る。柱穴は直径40～60cmのやや崩れた隅丸方形を呈している。北面の桁行のみの検出であるが、柱穴の規模から建物跡と考えられる。建物群2期のSB004と対称的な位置にあたる。

SB018は、北西側で検出した東西建物跡(3間+ $\alpha \times 2$ 間+ α 、 $6.6 + \alpha \times 4.7$ m)で、建物方位は $N-5^\circ-W$ 、柱間寸法は桁行1.5～1.7m、梁行1.9mを測る。柱穴は直径40～80cmの円形に近い隅丸方形を呈している。建物群3期のSB003と対称的な位置にあたる。

これら掘立柱建物跡2棟と柵列跡は、第5次調査で確認された建物跡と建物方位の建物群2期と3期と関連すると考えられ、SA021→SB020→SB018の変遷で建替えられたものと推測される。

また、調査区東側において南北方向に延びる柵列跡を確認したが、その延長線上には、第5次調査区で確認されたSB002の東側の桁行方向と一直線につながることが判明した。さらに、この柵列跡が調査区南東隅において、直角に屈曲し西側に向かっていることも確認できた。

こうした東西方向に延びる建物跡や柵列跡の配置は、C区の南に丘陵斜面が迫って規制された地形となっている状況も踏まえると施設南端の状況を見ることができる。



第10図 C区遺構配置図 (1/200)

D 区

D区はA区・B区・C区に囲まれた中心にあたる南北20m、東西16mの調査区(面積257㎡)である。遺構は、地表面より約30cm～40cm下で検出され、南に向かって低くなっている。遺構は、掘立柱建物跡4棟(SB011・SB012・SB013・SB014)、土坑、柱穴、近世の溝状遺構である。いずれも建物・溝状遺構ともに南北方向に延びている。

SB011は、東側で検出した南北建物跡(5間×3間、12.4×5.1m)で、建物方位はN-5°-W、柱間寸法は桁行1.5～1.7m、梁行1.8～1.9mを測る。柱穴は直径30～60cmの円形に近い隅丸方形を呈している。D区のなかでは、柱穴が最も小形である。SB012によって切られている。建物群3期のSB003の東梁行面と同一方向にそろっている。

SB012は、調査区中央で検出し、SB011を切って建てられた南北建物跡(7間×3間、12.6×5.2m)で、南側の外に1間張り出し、柱穴を巡らす庇の付きの構造である。庇の部分を含めると調査区内で最大規模の建物跡になる。建物方位はN-2°-W、柱間寸法は桁行1.7～1.9m、梁行1.6～1.8mを測る。柱穴は直径50～80cmの隅丸

方形を呈している。

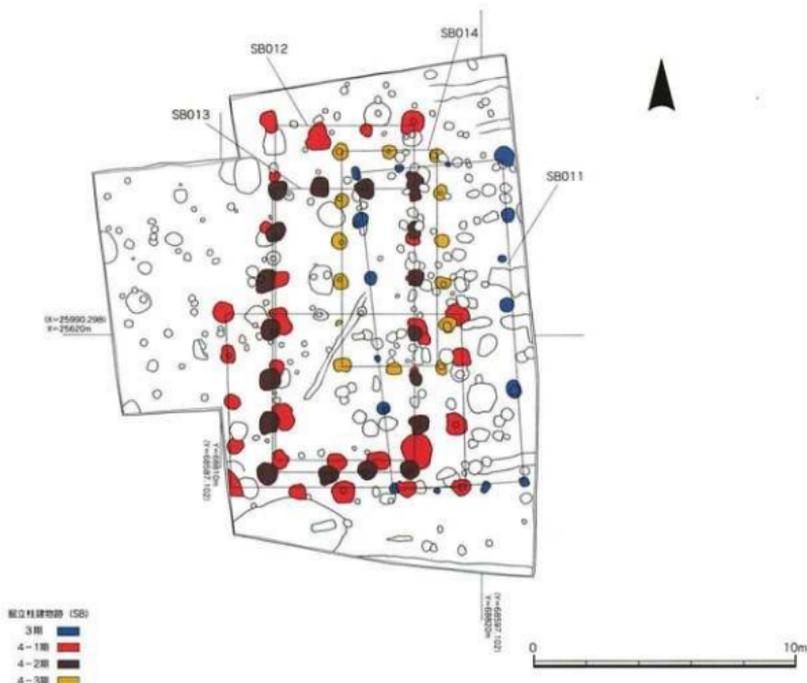
SB013は、SB012を切って建てられた南北建物跡（6間×3間、11.0×5.4m）で、SB012とはほぼ同一位置に建てられているが、外側には庇の構造はない。建物方位はほぼ真北、柱間寸法は桁行1.6～1.8m、梁行1.7～1.9mを測る。柱穴は直径70～90cmの隅丸方形を呈している。

SB014は、SB012を切って建てられた南北建物跡（5間×2間、8.3×3.8m）で、建物方位はほぼ真北、柱間寸法は桁行1.8m、梁行1.8mを測る。柱穴は40～60cmの円形に近い隅丸方形を呈している。

掘立柱建物跡4棟は、建物方位とこれらの柱穴の切り合い関係により、SB011→SB012→SB013→SB014の建替えの変遷を捉えることができる。

なお、SB012・SB013・SB014の3棟は、建物方位が建物群1期～3期のいずれにも該当しておらず、柱穴の切り合い関係によっても建物群1期～3期の建物よりも新しい時期の建物跡であると考えられる。さらに、建物群の方位が新しく建替えられるたびに真北に近づいていることからそのことが考察できる。

なお、SB012・SB013・SB014の時期を確認するために柱穴の一部掘り下げをおこなった。柱穴の深さはSB012・SB013で、約50～60cm、SB014は40cmを測る。一部を除き、柱痕の抜き取り跡を確認することができた。時期を特定できる遺物は、SB012の柱穴（S107）から出土した須恵器の坏身片（第12図8）であり、形態の特徴から7世紀第3四半期と考えられるが、それ以外の遺構からは確認できなかった。



第11図 D区遺構配置図 (1/200)

第3節 出土遺物

城原・里遺跡第7次調査では、掘立柱建物群より須恵器の坏蓋および都城系土師器の坏が出土したが、時期を特定できる遺物は少なく、第5次調査の出土遺物も併せて報告する。

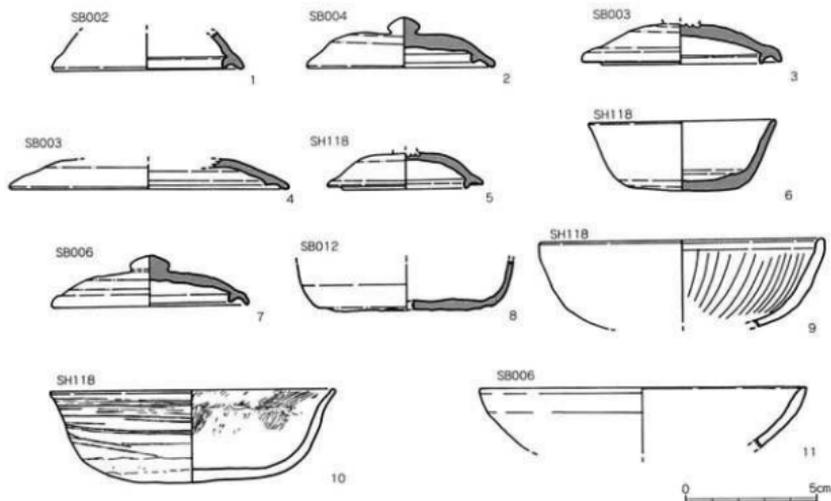
遺物は、大型掘立柱建物跡の柱穴または柱痕抜き取り跡より、須恵器・都城系土師器（第12図1～4・7～8・11）、住居跡より須恵器（第12図5～6）・畿内産土師器・都城系土師器（第12図9～10）である。

SB002の柱穴（S008）から出土した須恵器坏蓋（第12図1）は、口径10.6cmを測り、内面にかえりが見られ、天井部が欠損している。SB004の柱穴（S038）から出土した完形の須恵器坏蓋（第12図2）は、口径10.5cmを測り、退化したつまみが付き、内面にかえりが見られる。SB003の柱穴（S023）から出土した完形に近い須恵器坏蓋（第12図3）は、口径11.2cmを測る。つまみが付いていたと思われ、内面にかえりが見られる。SB003の柱穴（S040）から出土した須恵器坏蓋（第12図4）は、口径15.7cmを測り、内面のかえりが僅かに残る。また、建物群1期段階と並存した可能性がある堅穴住居跡（SH118）からは、須恵器坏蓋（第12図5）が出土し、口径8.9cmを測り、内面にかえりが確認できる。須恵器坏身（第12図6）は、口径10.4cmを測り、ロクロ回転によるヨコナデを施す。都城系土師器碗（第12図9）は、口径15.8cmを測り、内面に暗文を施している。畿内産土師器碗（第12図10）は、口径16.2cm、器高5.4cmを測り、内面に暗文を施している。

第7次調査では、A区のSB006の柱穴（S023）の柱痕抜き取り跡から出土した須恵器坏蓋（第12図7）は、口径11.0cmを測り、退化したつまみが付き、内面のかえりが確認できる。SB006の柱穴（S024）の掘り方から出土した都城系土師器坏（第12図11）は、口径18.4cmを測る。内面に暗文が僅かであるが確認できる。

D区のSB012の柱穴（S107）より出土した須恵器坏身（第12図8）は、口縁部が欠損し、底部に回転ヘラ削り調整を施す。

以上から、大型掘立柱建物跡群と堅穴住居跡（SH118）より出土した須恵器や土師器の年代幅は、ほぼ7世紀中頃～7世紀末に収まっており、8世紀代に見られる遺物は出土していない。



第12図 遺物実測図 (1/3)

第4章 まとめ

第1節 掘立柱建物跡の変遷

今回の調査は、大型掘立柱建物跡群の性格を解明することと、建物群の南側の状況把握を目的としておこなった結果、建物群が南側に展開し、さらに建物群が整然とコ字状に配置され、官衙的な施設の様相を呈していることが確認できた。

調査では、第5次調査区において3時期に継続する建物群が確認されていたが、今回も同様に継続する建物群が展開しており、出土遺物、建物方位、柱穴の切り合い関係により建物配置が明らかとなった。

5次調査を踏まえ7次調査の成果についてまとめると以下ようになる。(第13図)

建物群1期（7世紀第3四半期）

最初に建物の造営が開始された段階で、東西建物2棟と南北建物1棟がし字状に配置されている。すでにこの段階より、東西方向に並ぶSB005とSB008と直行してSB015が計画的に配置されたものと考えられ、施設的な様相が見られる。時間的には、遺物が出土していないものの聖穴住居跡（SH118）との関連性より7世紀第3四半期には建てられたものと考えられる。

遺構名	規 模	柱間寸法 (桁行×梁行)	建物方位	柱穴の形状
SB005	2間×5間、4.4×10.5m	1.9m×2.0~2.2m	N-12°-W	隅丸方形
SB008	3間×2間、5.2×4.2m	1.8~1.9m×1.9m	N-11°-W	隅丸方形
SB015	5間×2間+ α 、9.4×3.9+ α m	1.9~2.1m×1.9m	N-11°-W	隅丸方形
SA021	4間+ α 、6.1+ α m	1.8~2.0m	N-11°-W	隅丸方形

建物群2期（7世紀第3四半期）

建物群1期と比較して建物方向が少し北方向に向く。建物の規模が大型化し、規格性のある東西建物3棟と南北建物2棟、さらに柵列により建物群がコ字状に配置された状況である。

建物配置により東西間は現状で38mであるが、西側においてはさらに建物群が延びることが想定される。今回は、調査区外であるために確認することはできなかった。一方の南北に延びるSB002と、これに続く柵列がC区まで延びており南北間は約45mであることが確認された。

こうしたことから、建物群2期には建物配置がコ字状配置の様相から官衙的な性格を持つ遺構となっている。

遺構名	規 模	柱間寸法 (桁行×梁行)	建物方位	柱穴の形状
SB001	2間×2間、3.6×3.9m	1.8~1.9m×1.8~1.9m	N-6°-W	円形
SB002	2間×5間+ α 、3.9×8.2+ α m	1.5m×2.1m	N-7°-W	隅丸方形
SB004	3間×5間、4.8×10.1m	1.9~2.2m×1.6~1.7m	N-7°-W	隅丸方形
SB006	8間×2間、13.9×3.8m	1.6m×1.8~1.9m	N-6°-W	不整隅丸方形
SB016	4間+ α 間、7.6+ α ×1.6+ α m	1.8~1.9m	N-6°-W	不整隅丸方形
SB020	3間+ α ×3間+ α 、6.2+ α ×0.9+ α m	1.6~1.8m	N-6°-W	不整隅丸方形

建物群3期（7世紀第4四半期）

建物群2期の建物配置を基準に建替えがおこなわれている。2期と同じく建物群が東西建物4棟、南北建物1棟と柵列によりコ字状配置となっており、さらにその東側には柵列がコ字状に巡る。

建物配置により東西間は現状で35.5mであるが、西側においてはさらに建物群が延びることが想定される。南

北間はSB003とSB018において距離が37.7mを有する。その東にある柵列は、南北約44.2mの規模を有する。

遺構名	規 模	柱間寸法 (桁行×奥行)	建物方位	柱穴の形状
SB003	3間×7間、5.4×11.4m	1.5~1.7m×1.8m	N-4°-W	不整隅丸方形
SB007	2間×2間、3.4×3.4m	1.7~1.8m×1.6~1.7m	N-6°-W	円形
SB009	5間×2間、10.4×4.6m	1.5~1.8m×2.2m	N-5°-W	不整隅丸方形
SB011	5間×3間、12.4×5.1m	1.5~1.7m×1.8~1.9m	N-5°-W	不整隅丸方形
SB018	3間+ α ×2間+ α 、6.6+ α ×4.7m	1.5~1.7m×1.9m	N-5°-W	不整隅丸方形

建物群4期以降（7世紀第4四半期以降）

建物群4期は、建物群1期～3期のコ字状に囲まれた中心のD区のみで確認された。7間×3間に庇を付設した掘立柱建物跡や桁行が10mを越す大型掘立柱建物跡が確認されたことからコ字状に配置された建物群の中心施設と考えられた。しかし、建物方位が異なることや柱穴の切り合い関係から、建物群3期以降であることが判り、この大型掘立柱建物跡群がコ字状建物群の中心的建物になる可能性は低くなった。そうしたことから、建物群4期に該当する建物群は、単独で存在していたものと考えられ、これらが3度にわたって建てられたものと思われる。おそらくこの段階においては、第2～4次調査（中安遺跡）において建物群が展開している段階と重なっており、中心的施設の移動が見て取ることができよう。SB012は、庇を持つ建物跡であるが、全体に庇が巡っており、南側のみ巡っている。このことから、この建物の構造では、工房や役宅などの性格も考慮する必要がある。

遺構名	規 模	柱間寸法 (桁行×奥行)	建物方位	柱穴の形状
SB012	7間×3間、12.6×5.2m	1.7~1.9m×1.6~1.8m	N-2°-W	隅丸方形
SB013	6間×3間、11.0×5.4m	1.6~1.8m×1.7~1.9m	真北	隅丸方形
SB014	5間×2間、8.3×3.8m	1.8m×1.8m	真北	隅丸方形

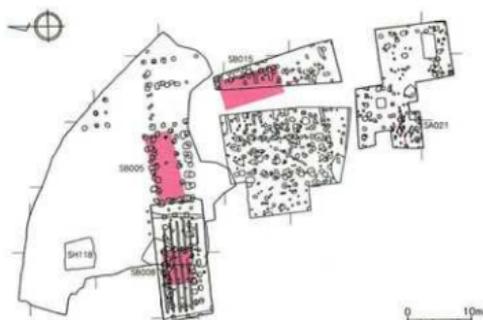
城原・里遺跡第5次・第7次で確認された大型掘立柱建物跡群は、以上のようなことから建物群4期にわたって変遷する状況が確認された。

建物群1期～4期まで通じて全体的に建物の柱間は、5～6尺（1.5～1.9m）であり、柱穴の掘り方も整った方形のものは確認されていない。これまで周辺の官衙関連遺跡においても類似した状況が見てとれる。さらに隣接する郡庁に推定されている第2～4次調査（中安遺跡）においても同様である。こうしたことから、建物の造営にあたっては、在地の技術によるところが大きいと考えられる。

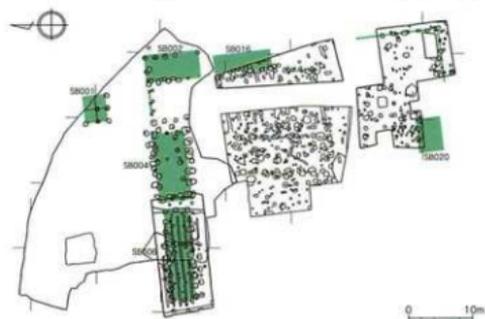
大型掘立柱建物跡群から出土した須臾器・土師器は、特に官衙関連遺跡でよく見られる畿内産土師器、都城系土師器が出土すること、規格性を持ち、コ字状に配置され整然と並ぶ建物配置によって、645年の大化の改新以降～飛鳥浄御原令施行期に間に設置された評段階の官衙施設と考えられる。この段階の官衙遺跡は全国的にも事例が少なく、そのなかで代表的な例として、近隣地である愛媛県松山市久米官衙遺跡などがある。九州では福岡県小郡市上岩田遺跡、同県築上郡新吉富村フルトノ遺跡について3例目となり注目される。

今回の調査では、城原・里遺跡第5次・第7次調査で発見された掘立柱建物跡群の施設が評段階の官衙遺跡とすれば、400m西側に所在する城原・里遺跡第2次～第4次調査（中安遺跡）の海部郡衙の政庁との関連が注目される。時期的に見ても、城原・里遺跡第5次・第7次の建物群1期～3期からさらに城原・里遺跡第2次～第4次調査（中安遺跡）の建物群に変遷が移り変わっていく。このことから、この台地上の場所が評段階より、海部郡の中核部であり、郡衙の成立過程を捉えることができる重要な遺跡であると言えよう。

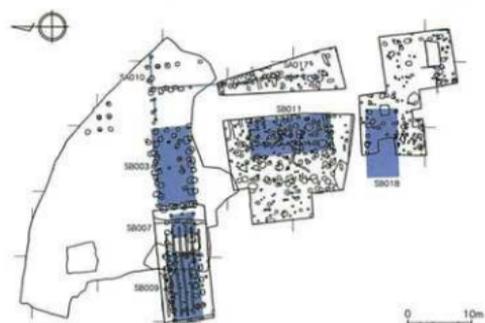
建物群 1 期



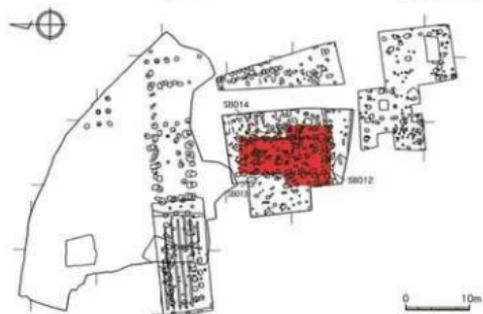
建物群 2 期



建物群 3 期



建物群 4 期



第13図 遺構変遷図 (1/800)

第2節 今後の課題

今回の調査では、大型掘立柱建物跡群がコ字状に配置されることが確認された。このことにより、官衙的施設である可能性を補強する成果となった。当初、D区で確認された3棟の大型掘立柱建物跡がコ字状建物群の中心施設の可能性があると考えられた。しかし、建物方位が他の建物群と違い、真北を向いていることや柱の切り合い関係から、建物の時期は3期よりも新しいことが判明した。このため現状では、官衙的施設の中心施設である正殿や施設の門の存在を確認するまでには至っていない。

今後の課題としては、調査区の西側と南側の調査による正殿や門等の施設の確認、および周辺の調査による正倉等の関連施設の発見に努めなければならないであろう。そして、中安遺跡の調査成果を踏まえ、飛鳥時代から奈良時代における律令体制の成立と政治的背景の解明を目指していきたい。

参考文献

- 大分市史編纂委員会 1987『大分市史 上』大分市
大分県考古学会 2000『古代律令国家と海部の光芒—中安遺跡の語るもの』
奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡』I遺構編
山中敏史・佐藤興治 1985『古代日本を発掘する5』岩波書店
小郡市教育委員会 2000『上岩田遺跡調査概報』



写真1 調査区全景空中写真（北西から）



写真2 遺跡全景 合成写真



写真3 A区 全景空中写真



写真4 A区 遺構検出状況（東から）

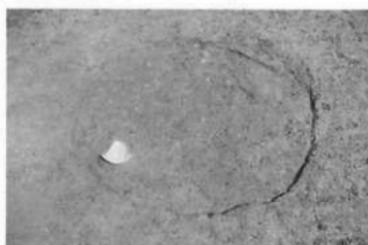


写真5 A区 (S023) 遺物出土状況遠景（西から）



写真6 A区 (S023) 遺物出土状況近景（西から）



写真7 B区 遺構検出状況空中写真



写真8 C区 遺構検出状況空中写真

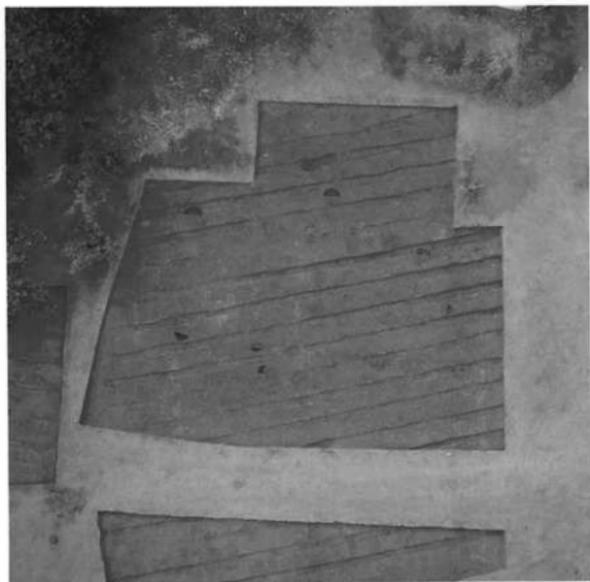


写真9 D区 遺構検出状況空中写真

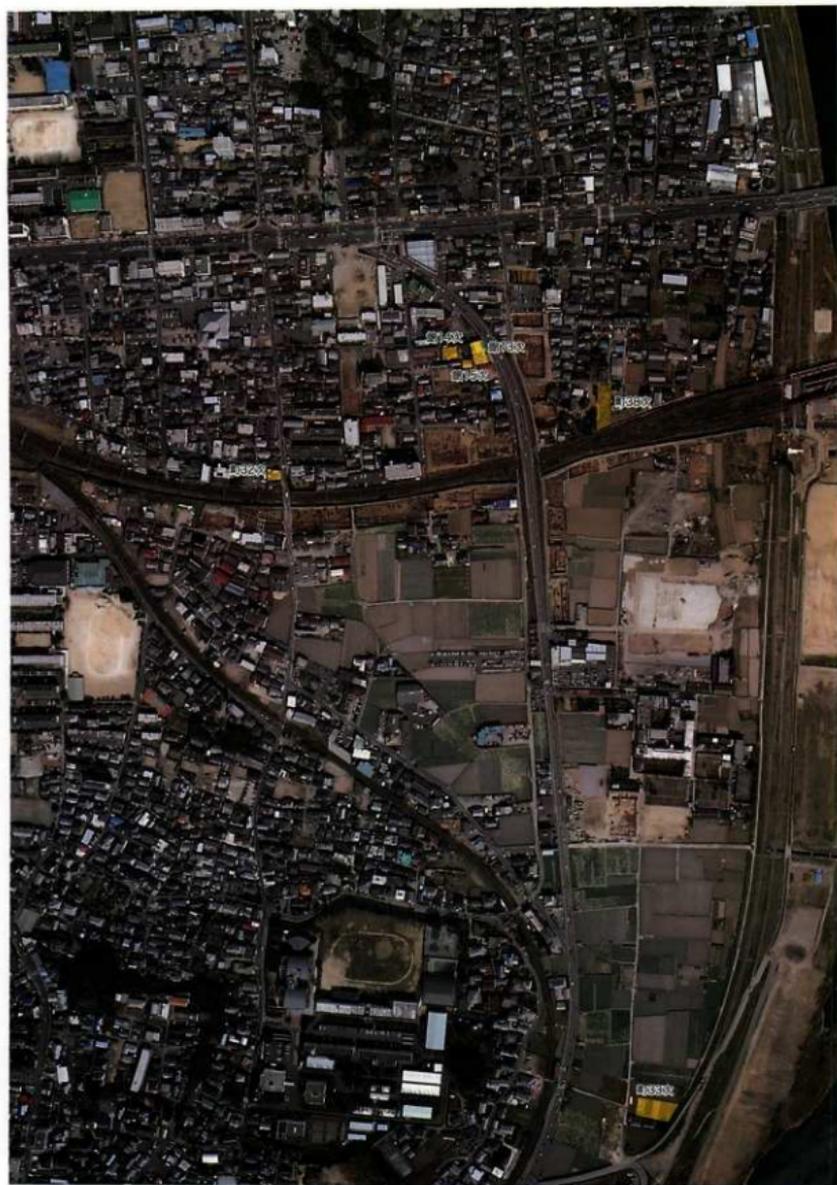
国指定史跡

大友氏館跡

—発掘調査概報V—

中世大友府内町跡

2004



(写真提供 大分県教育委員会) 一部改変

第1図 中世大友城下町跡調査区全景

例 言

- 1 本書は平成15年度に大分市教育委員会が実施した国指定史跡大友氏館跡、中世大友府内町跡における埋蔵文化財確認調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査の費用は、国と県から補助を受けて、大分市が負担した。
- 3 調査および本書の編集は中西武尚、佐藤道文、五十川雄也が担当した。各章の執筆は、第1章・第2章の1を佐藤、第2章の2を中西、第2章の3を五十川、第2章の4を佐藤が担当した。また、「中世大友城下町跡」に関しては、県教育委員会調査分との整合性をはかるために、市教委と合同の調査指導者会を開催し、調査方法についても可能な限り共通理解の中で進捗させるように努めている。
- 4 遺構の写真撮影は各調査担当者及び松尾 聡（大分市教育委員会嘱託技師）、森岡見司が行った他、大友氏館跡、中世大友府内町跡の空中写真撮影については㈱九州航空に委託した。
- 5 遺構、遺物の実測・整理・浄書は各調査担当者及び、松尾 聡・本田理恵子・稗田智美・渡辺淑子・小山田裕子・佐々木昌美・森岡見司が行った。
- 6 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N）である。また、基準点の座標値は平面直角座標系第Ⅱ系による。
- 7 本書に用いた出土陶磁器の分類及び年代観は以下の文献による。
森田 勉 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2 1982
上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」 『貿易陶磁研究』2 1982
小野正敏 「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」 『貿易陶磁研究』2 1982
乗岡 実 「備前焼播鉢の編年について」 『第3回中近世備前焼研究会資料』2000
間壁忠彦 『備前焼』 考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社 1991
太宰府市教育委員会 『太宰府条坊跡XV』 -陶磁器分類編- 2000
- 8 遺跡名に関しては、その構成要素である町屋部分を「中世大友府内町跡」とし、これに「大友氏館跡」を加えた総称を「中世大友城下町跡」と呼称する。
- 9 本書で使用した遺構表記は以下の通りである。
SD 溝状遺構 SE 井戸遺構 SK 土坑 SA 柵跡
SP 柱跡遺構 SX 性格不明遺構（整地層も含む）

目 次

- 第1章 はじめに
 - 1 調査に至る経過
 - 2 調査組織
- 第2章 調査の概要
 - 1 大友氏館跡第13次調査
 - 2 大友氏館跡第14・15次調査・中世大友府内町跡第38次調査
 - 3 中世大友府内町跡第32次調査
 - 4 中世大友府内町跡第33次調査

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

大友関連遺跡の調査の端緒となったのは、平成7年度から開始された大分駅周辺総合整備事業に伴う発掘調査である。この調査を契機に府内町跡の調査は39地点にもおよんでいる。これらの調査成果は、中世大友城下町跡が昭和62年に作成された「府内復原想定図」に極めて近い姿であったことを証明しつつある。

大友氏館跡は、平成10年度から確認調査が行われ、大型の巨石を配置する庭園跡や西側土塁遺構が発見されたことから、その存在が確実視された。平成13年8月13日には、第1回目の国史跡の指定を受け、現在までに2度の追加指定を受け、平成15年度も地権者の同意を得た10箇所について指定を受ける予定である。

今年度の大友氏館跡の調査は、推定館跡の北東部に位置する3地点（13～15次）について調査を実施している。町屋部分に関しては、府内町の西側、推定四之大路沿いの調査（32次）及び府内町南東隅部の調査（33次）、推定御所小路の北側の調査（38次）が実施されている。中世大友府内町跡第32次調査はダイウス堂推定地に近接することから、遺跡の状況把握を目的として調査を行った。中世大友府内町跡第33次調査は、「府内復原想定図」によると府内町の南東隅部にあたり、「府内古園」の範囲外になることから戦国期の遺跡の広がり状況把握を主とした調査を実施した。

2. 調査組織

調査指導者	河原 純之（川村学園女子大学教授）
	後藤 宗俊（別府大学教授）
	小野 正敏（国立歴史民俗博物館助教授）
	坂井 秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）
	渋谷 忠章（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

調査指導 大分県教育委員会

調査主体 大分市教育委員会

教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

文化財課 課長 帯刀 修一

参事 玉永 光洋

課長補佐兼

文化財係長 巖岐 和夫

管理係長 久多羅岐 明

主査 平野 勝敏

指導主事 後藤 典幸 姫野 公徳

専門員 塔鼻 光司

主任 桑原 治 安部 一成

主任技師 坪根 伸也 池邊千太郎 塩地 潤一

技師 高畠 豊 河野 史郎 中西 武尚

主事 永松 正大 三浦 亜紀 佐藤 道文

事務員 五十川 雄也

第2章 調査の概要

大友氏館跡第13次調査

1 調査目的

調査地は、大友氏館推定地の北東部に位置し、以前仏具店が所在したところである。史跡公有地化に伴い建物の解体作業が実施されることとなった。業者との協議を行ない、基礎部分の解体には調査員の立会を要するという取り決めがなされた。その後平成14年度に建物解体を行ったところ、当初、基礎建設により遺構は大規模に破壊されていると考えられていたが、完形の在地系土師器を含む大量の遺物が出土し、遺構が良好な状態で残っている可能性が想定されたことから、詳細な調査が必要と判断された。

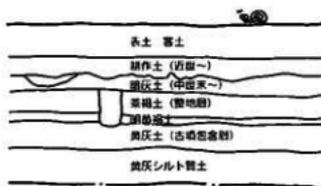
2 周辺の状況

第13次調査区の北側、第10次調査では大友氏館の北側外郭線と考えられる東西方向の溝状遺構が見つかり、また、16世紀前半から中葉に比定されるロクロ成形土師器の廃棄土坑や京都系土師器が一括廃棄された遺構なども確認されている。同時に現在調査している第14次調査区では、第10次調査同様に廃棄土坑群が検出されており、さらに竪立柱建物跡（時期不明）等も見ついている。

3 層位

調査地は、コンクリート基礎により分断され、遺構、土層を面的に迫るには困難な状況である。16世紀後半以降の遺構に関しては、第12次調査区と同様に建物の建築や後世の水田開発により、大部分が削平されている。

調査区内の土層は、大きく暗灰土→茶褐色土→明黄褐色土→黄灰土→灰茶粘質土→黄灰シルト質土に分けられる。暗



第2図 調査区土層模式図

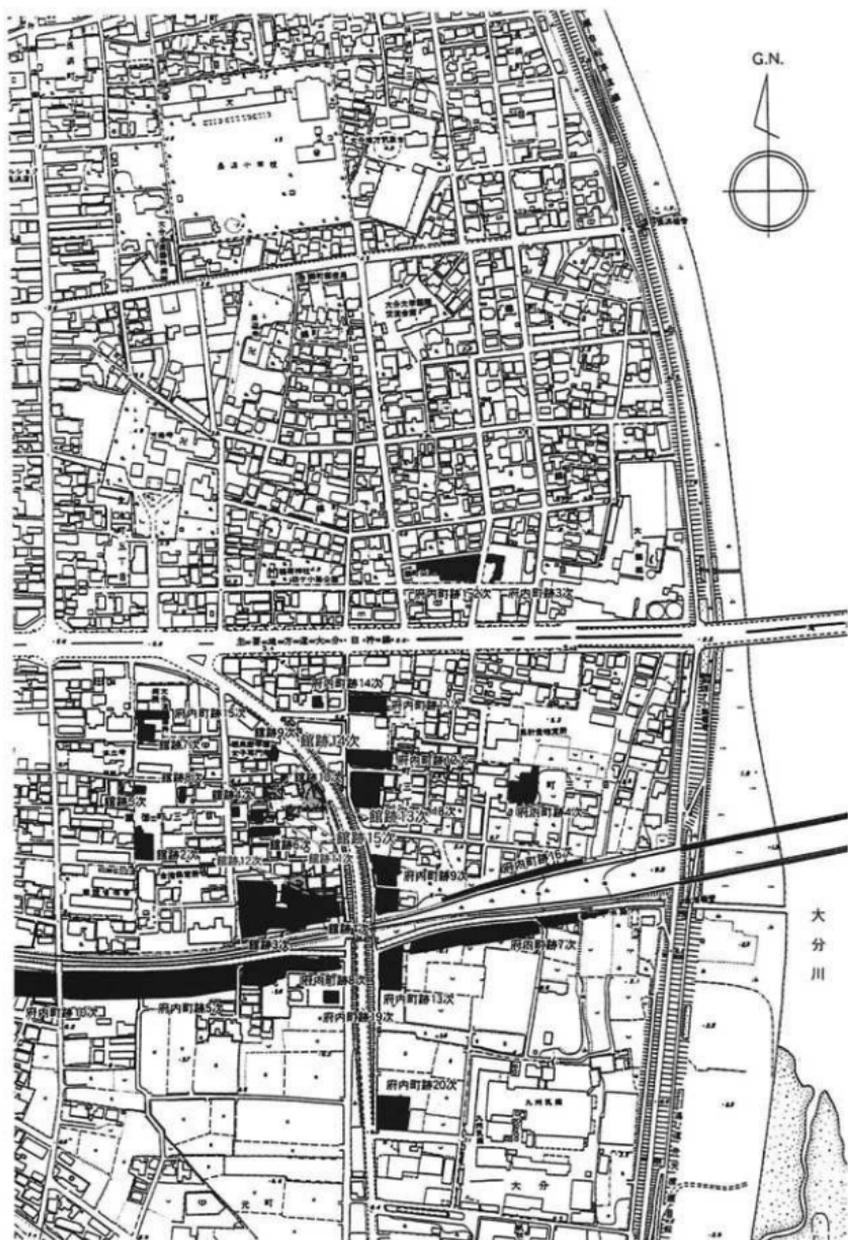
灰土は調査区の南側一部で確認され、上位にある水田層の影響のため還元色を呈している。土中には16世紀後半頃に比定される遺物を多く含んでいる。茶褐色土は調査区の中央から南側で確認される。整地層と考えられ、小穴群や廃棄土坑は、この層から掘り込まれている。出土遺物には、第1次調査で検出されているSX008の資料と類似するものが含まれていることから、15世紀後半以降に形成されたと推測される。明黄褐色土は、第12次調査区の所見から古代の整地層の可能性が指摘されている。この層から検出される遺構の埋土は往々にして茶色土を主体としている。黄灰土は現段階では無遺物層である。灰茶粘質土は周辺の調査地でも確認されており、古墳時代の土器を少量ではあるが内包していることから、当該期の包含層と考えられる。本調査地では、この層から掘り込まれたのではないと思われる遺構が検出されている。黄灰シルト質土は大分川左岸一帯に形成される自然堆積層であり、現状では最終遺構面と認識している。今回の調査で確認された遺構の検出標高は4.0m～4.3mである。

4 検出遺構

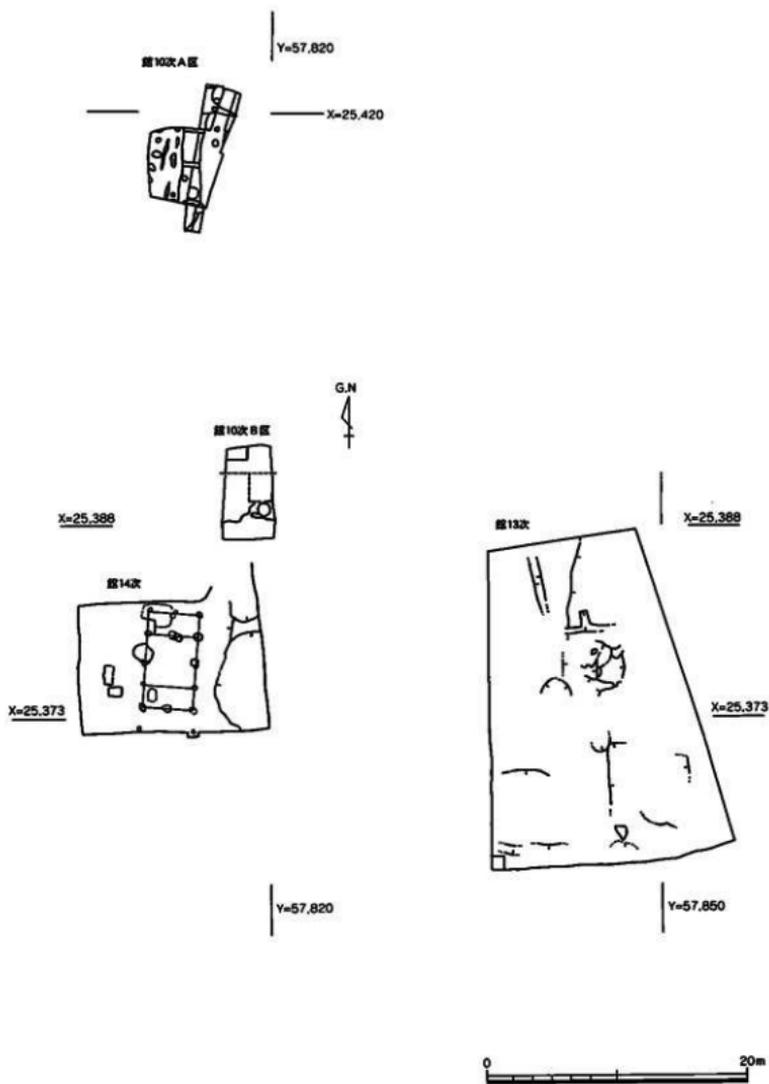
現在調査中のため、報告は現段階で確認されている主要な遺構のみに限定する。

廃棄土坑・・・13SK010・025・040（第5図・7図）

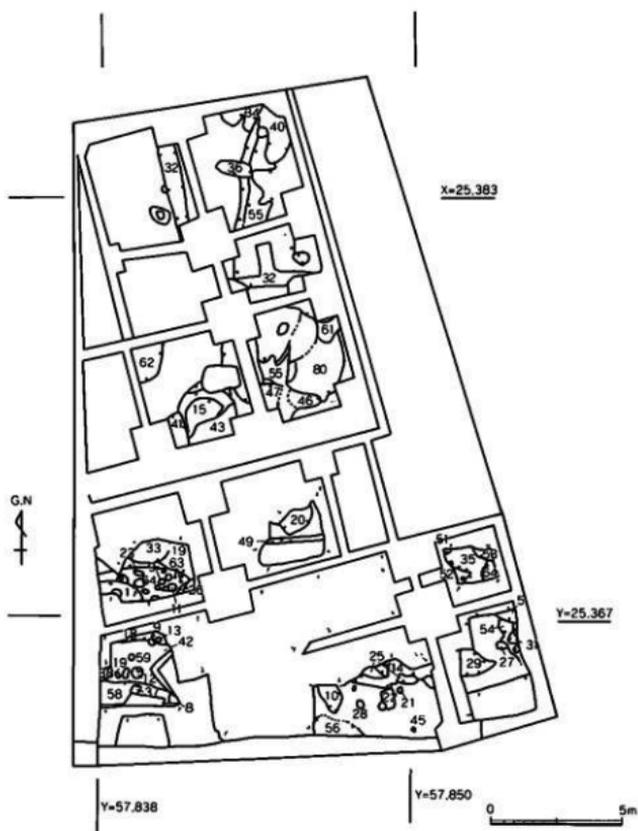
13SK010は長辺約1.1m、短辺約0.7mを測り、平面隅丸長方形を呈す。埋土には土器とともに炭化物の小破片



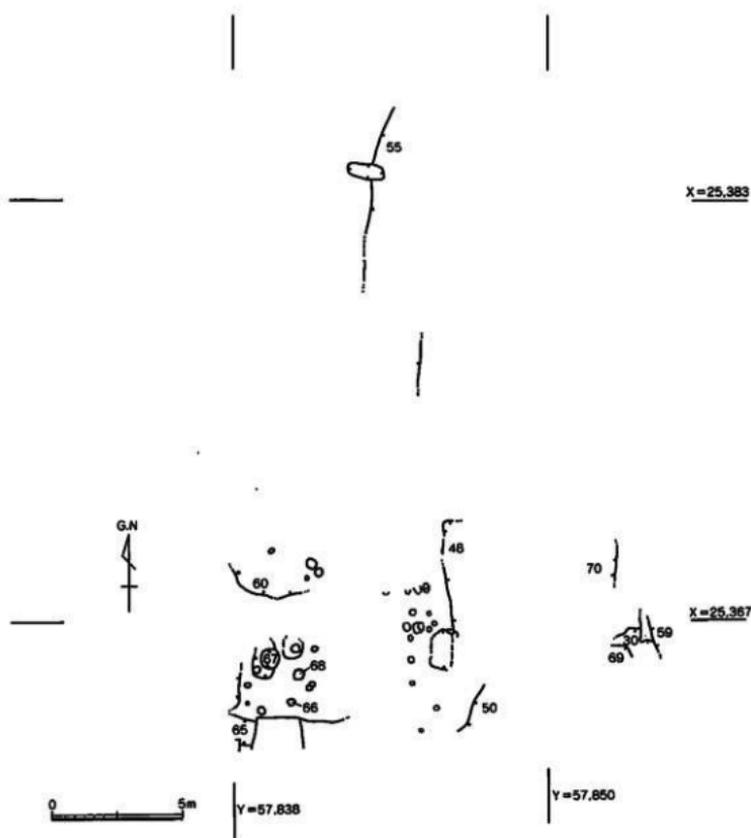
第3圖 調査区位置圖



第4图 大友氏館跡第10次・13次・14次調査区配置图 (S=1/400)



第5圖 大友氏館跡第13次調査区 第1面遺構略測図 (S=1/200)



第6圖 大友氏館跡第13次調査区 第2面遺構略測図 (S-1/200)

が多く含まれていた。SK010からは、在地系土師器（赤色）と精製土を使用した非常に薄手の土師器（白色）が出土している。土器は、その大部分が北下がり傾斜した状況を示しており、また、間に約15cmの空間を挟んで土器が集中する単位が二分されていることから、遺構の南方向から北方向に向かって、ある程度まとまりを持ちながら廃棄が行われたと考えられる。

在地系土師器については大小約3～4種類の法量を有す坏が20点以上（破片含む）、白色系土師器はほぼ完存した小皿や耳皿、3法量程に分けられる坏が現段階で認められている。時期については、在地系土師器坏の内面にロクロ成形時の痕跡が残っていることや本資料が池田遺構Ⅰ期の資料に類似すること、浅い皿型化した白色系土師器が出土していることなどから、15世紀末～16世紀前半に比定される。SK010から出土した資料については完形に復元できるものが多く、当遺構の性格や土器の法量のバリエーションなどについて今後詳細な検討を行う必要がある。

13SK025については、建物基礎により全容を把握することはできなかった。平面形は不整形な円形を呈し、土器が集中する部分が二分していることから、SK025の中で新旧関係が生じるものと思われる（廃棄単位の違いとも考えられる）。SK010と違い、SK025から出土する資料は在地系、白色系も含め小破片が多い。土器の出土状況から二つの遺構は廃棄行為の目的を異にするものだったのではないかと考えられる。ただ、埋土中に炭化物の小破片を多く含む点、廃棄行為は南から行われた点についてはSK010と類似する。出土する土器の法量の種類については4種類以上見受けられ、SK010よりやや増加している傾向が窺えるが、土器のプロポーションなどを見ると両者に大きな時間的隔たりを見つけ難く連続するもの、もしくはほぼ同時期のものと思われる。

13SK040は13SD055の上位に構築されるもので、調査区の北東部で確認された。平面プランは不整形な楕円形を呈し、長径約2m、短径約1mを測る。この土坑は検出当初から多量の土器が出土していた。表層には細かい土器破片が堆積しており、その細片を除去すると、ある程度の器形を保った土器が隙間無く現れてくるという状況であった。また、埋土中には炭化物が多く含まれていたが、一緒に見つかる土器に被熱痕が見られないことから廃棄の際、土器とともに捨てられたと推測される。現段階では詳細な整理は行っていないが、現場で感じたことを挙げると、比較的小坏または小皿を多く含む傾向が見受けられた。

土坑・・・13SK026・056（第7図）

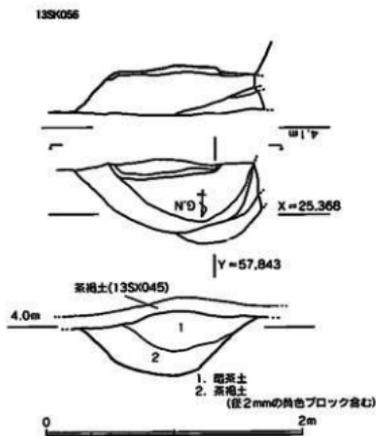
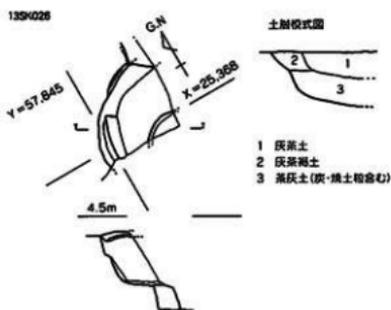
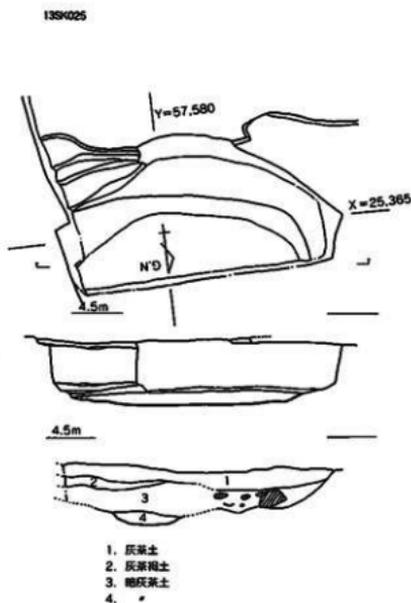
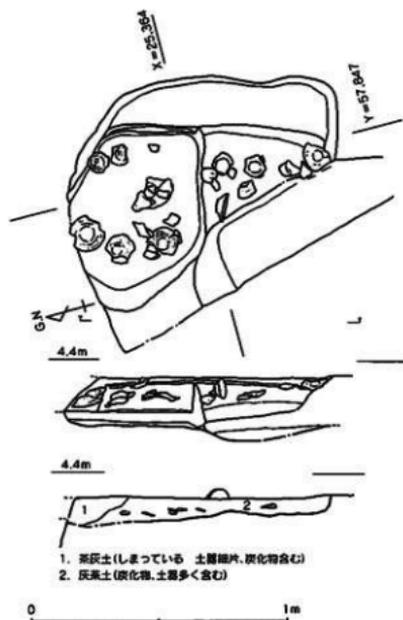
13SK026は調査区の南西部で確認され、コンクリート基礎により全形は不明である。京都系土師器、瀬戸産天目茶碗、土師製の香炉、増嶋、壺土などが出土しており、16世紀後半～末段階に比定される。

13SK056は調査区の南側中央付近、15世紀後半～末段階に形成された整地土の下位で検出した長径約1.4m、短径約0.6mの土坑である。遺物には、いわゆる「ハコ形」を呈する古手の在地系土師器が含まれており15世紀後半頃のものと考えられる。

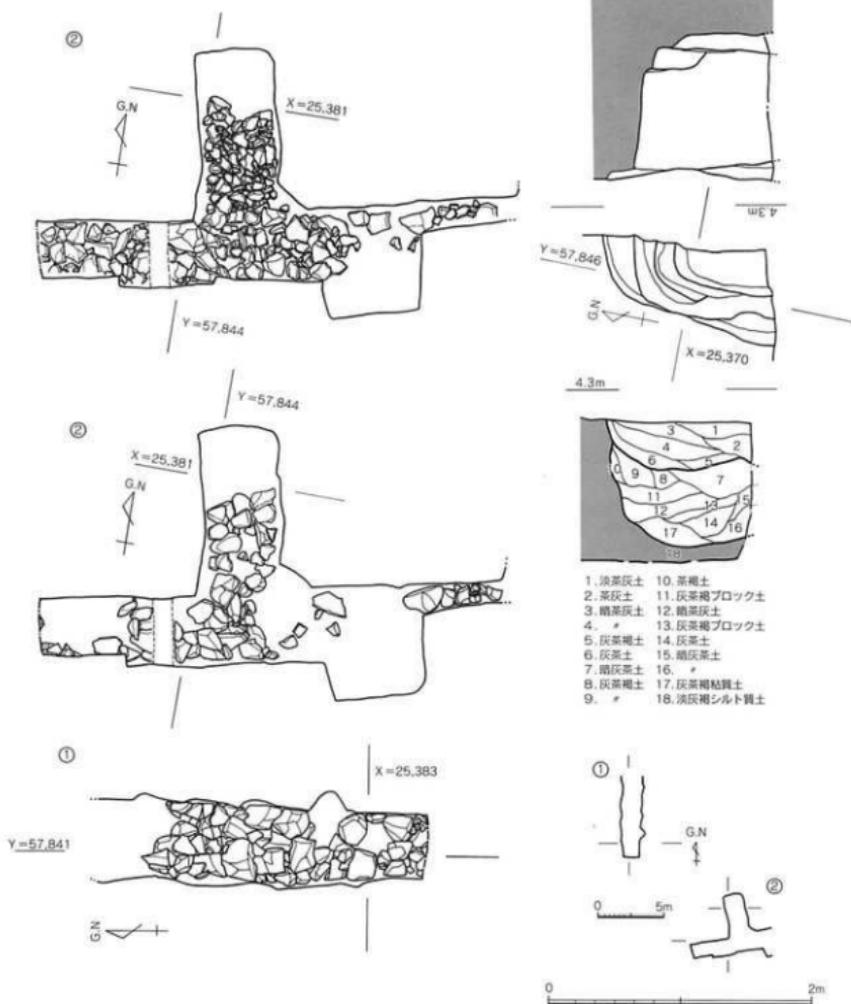
性格不明遺構・・・13SX032・048・050（第8図）

13SX032は調査区の北東部、北側中央部で検出され、遺構全体の平面形がL字形を呈している。幅約0.6mを測り、内部に凝灰岩を主とした多量の礫が充填されていた。礫の堆積は二分され、上位面にはやや破砕した礫が、下位には原形を留める大型のものが置かれていた。掘り方は直線的で、機械掘削で行われたかのようである。一見近代建造物の基礎や暗渠などが想定されるが、出土する遺物の多くが16世紀後半頃の京都系土師器であるため戦国期の可能性も考慮する必要がある。

13SX048・050は、調査区の中央部分から南東部にかけて確認される大型掘り込み地業である。平面形は部分的に確認することができ、恐らく不定形な長方形を呈すものと考えられ、規模は東西方向の長さが約7m、南北方向の長さが7m+αを測る。SX048はこの大型掘り込み地業の北西コーナー部に該当する。現段階では掘り下



第7図 13SK010・025・026・056平面図、断面図、土層図 (SK010のみS=1/20、他は1/40)



第 8 図 13SX032位置図 (S=1/400)、平面図・13SX048平面図、断面図、土層図 (S=1/40)

げ途中であり性格については分かっていない。当初は土塁や築地などの区画施設の一部かと考えていたが、その可能性は低いと思われる。現在判明している状況は以下の通りである。

- ・土層堆積は比較的安定した平行堆積である。
- ・土壌、土質に明確な違いを見出しにくい。
- ・堆積プランの方向（長軸）は北西から南東方向である。

時期、構造などについては、今後の調査の成果を待って報告書刊行の際に詳細な報告を行うこととする。

5 出土遺物

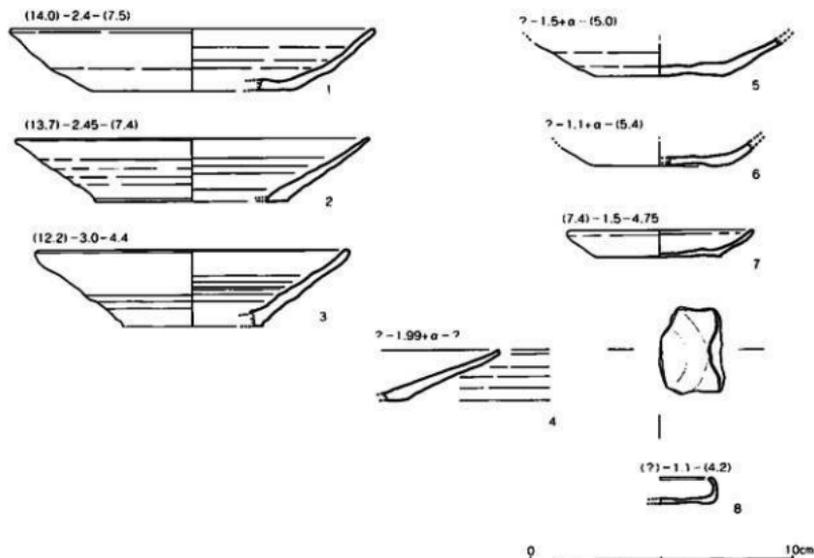
13SK010 (第9・10図)

薄手で白色系の精製土を有する白色のもの、厚手で橙色、砂粒を多く含み、内面にロクロ目を残すいわゆる在地系の2種に分けられる。第9図はすべて白色系土師器であり、坏、小皿、耳皿が出土している。坏は、直線的な器形を有すものと、丸みを有すものがみられる。3はやや深手のタイプで口縁端部も他と違い、内湾して丸く仕上げられる。1、2は口径と比較して器高が低く皿形化の傾向が見受けられる。第10図はすべて在地系土師器で、坏、小坏、耳皿がある。これらは、法址、器形などから以下に分類することができる。

- ・1類 大宰府分類の坏aの形態に該当し、口径と比較し底径が大きいもの(18、19、茶灰土1)
- ・2類 大宰府分類の坏bの形態に該当し、口径と比較し器高が高いもの(14、16、17、20)
- ・3類 大宰府分類の坏bの形態で、逆ハの字状を呈するもの(9~11、13)

これらは、調整や口縁端部の処理などで細分が可能ではあるが、今回は詳細な遺物整理ができていないため、上記内容に留めておく。なお、各法量については図中に示しているので参照して頂きたい。

13SK010 灰茶土



第9図 13SK010灰茶土出土遺物 (S=1/2)

(13.6) - 2.6 - 6.6



11.9 - 3.3 - 5.0



12.8 - 3.45 - 6.4



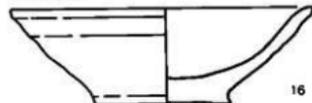
(11.8) - 3.0 - (5.6)



(12.7) - 3.0 - (5.7)



11.4 - 3.7 - 5.1



(12.0) - 2.3 + a - ?



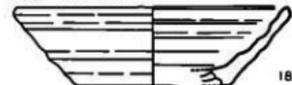
(11.2) - 3.5 - (6.0)



12.0 - 3.0 - 5.8

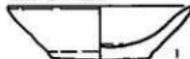


(10.6) - (3.0) - (6.0)

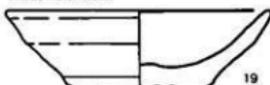


13SK010 茶灰土

(6.9) - 2.1 - (3.4)



(10.2) - 3.0 - (5.0)



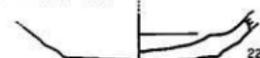
(10.0) - 3.1 + a - (4.4)



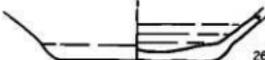
? - 1.95 + a - (4.9)



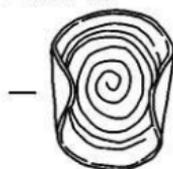
? - 1.8 + a - (6.0)



? - 2.0 - (6.0)



? - 1.95 + a - (4.9)



? - 1.8 + a - (5.8)



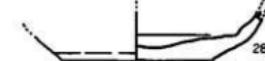
? - 2.0 + a - 6.2



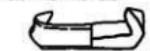
? - 1.6 + a - 5.8



? - 1.9 + a - (5.9)



6.0 - 4.3 - 1.5 - 3.5



? - 2.0 + a - 5.8

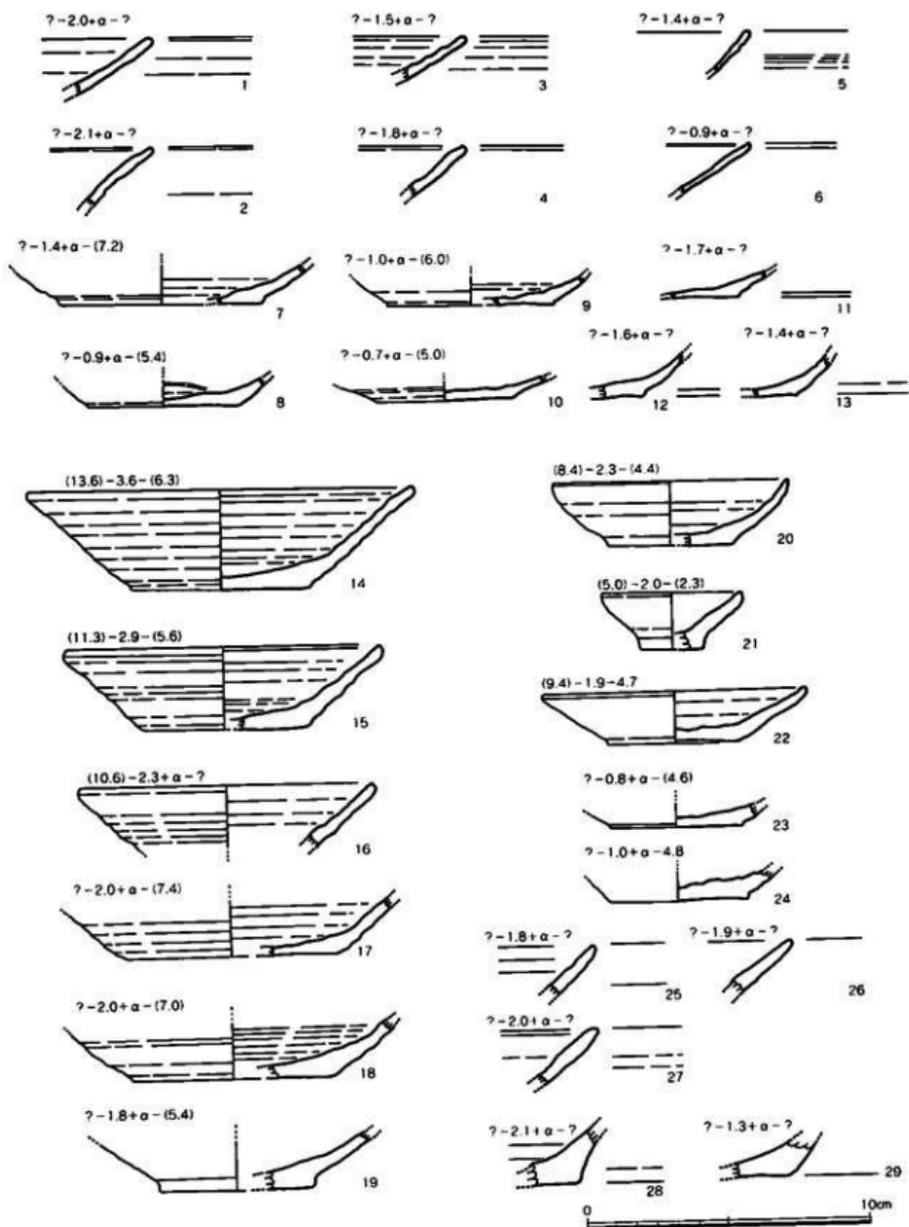


? - 1.7 + a - (5.4)

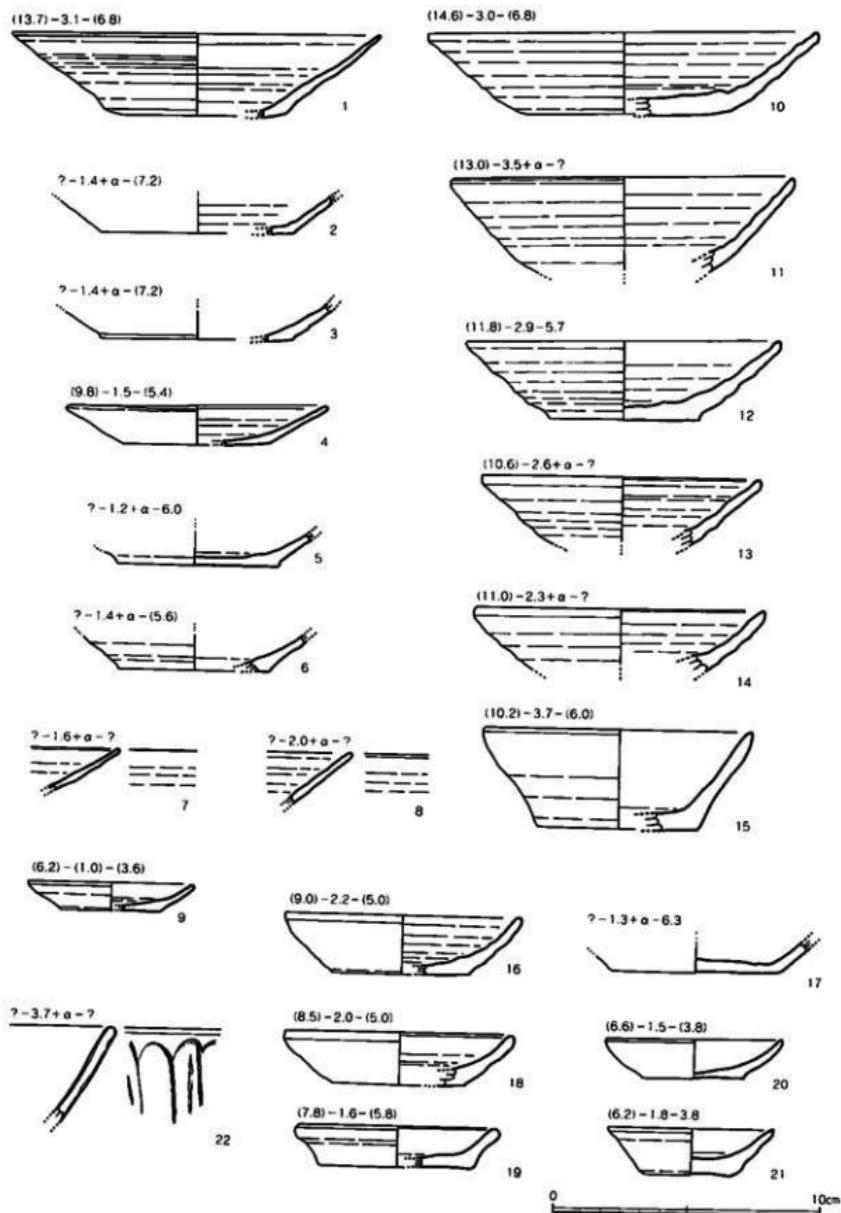


0 10cm

第10圖 13SK010灰茶土・茶灰土出土遺物 (S=1/2)



第11圖 13SK025灰茶土出土遺物 (S=1/2)



第12图 13SK025暗灰青土出土遗物 (S=1/2)

11.5-2.8-7.0



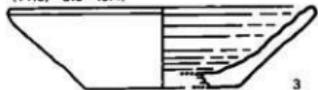
1

(11.5)-2.65-(4.7)



2

(11.0)-2.9-(5.4)



3

(12.0)-2.4-(7.0)



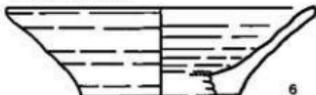
4

(12.0)-3.6-(5.8)



5

(11.0)-3.2-(5.7)



6

(10.8)-2.8-(5.0)



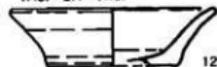
7

(10.0)-2.9-4.6



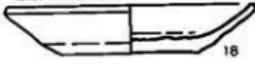
8

(7.3)-2.1-(4.5)



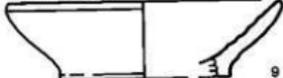
12

(9.0)-1.75-5.0



18

(9.7)-2.8-(6.0)



9

(6.7)-2.1-(4.0)



13

(8.8)-1.95-4.3

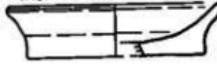


19

10.8-2.3-6.9

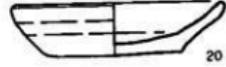


(7.8)-1.9-(6.4)



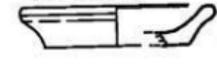
14

7.7-1.9-5.0



20

(7.0)-1.45-(5.2)

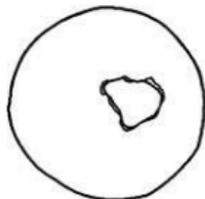


15

7.7-1.7-4.7

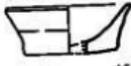


21



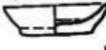
10

(4.6)-1.7-(3.4)



16

3.7-1.0-2.2



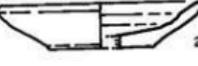
17

(6.8)-1.6-(4.0)



22

(7.4)-1.65-(3.7)



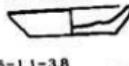
23

?-2.1+a-?



11

4.4-0.9-3.1



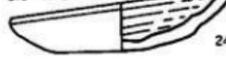
25

6.6-1.1-3.8



26

8.0-1.75-4.9

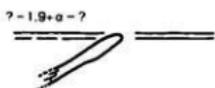


24



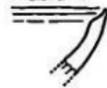
第13圖 13SK040 黒灰土出土遺物 (S=1/2)

13SK026 灰茶土



13SK026 灰茶土

7-2.6+a-?



(7.6)-5.5+a-?

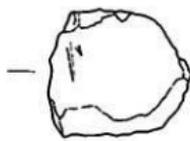


(7.2)-1.9+a-?



2

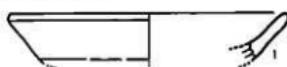
3



4

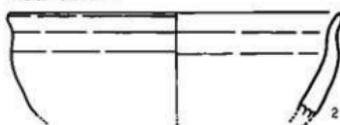


(10.6)-1.7+a-?



1

(12.5)-3.8+a-?



2

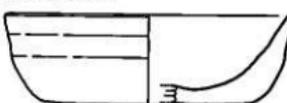
13SK056 暗茶土

7-1.6+a-?



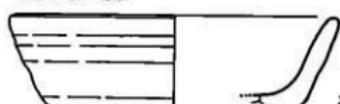
1

(10.8)-3.4-(8.0)



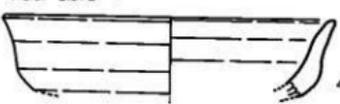
2

(12.4)-3.7-(9.0)



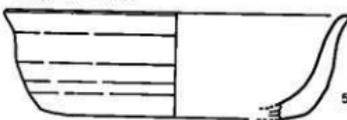
3

(12.3)-2.9+a-?



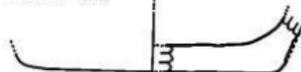
4

(11.0)-3.9 (10.2)



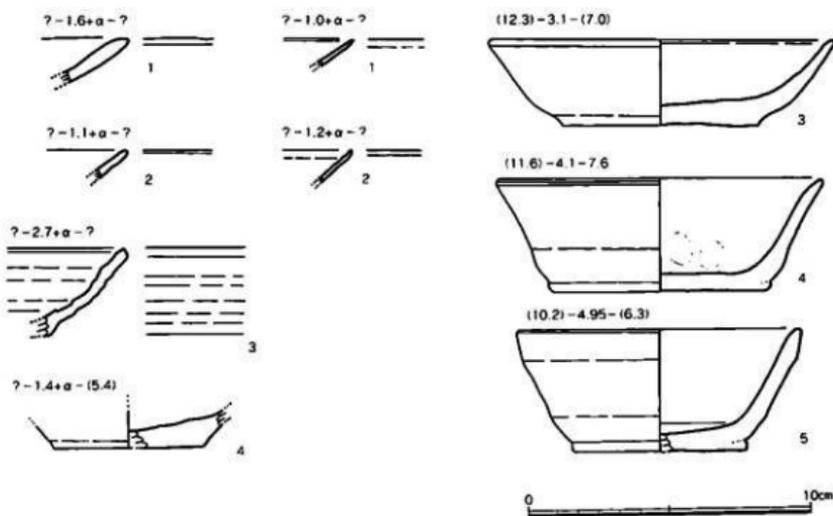
5

7-2.2+a-(9.6)



6

第14圖 13SK026灰茶土、灰茶揚土、茶灰土・13SK056暗茶土出土遺物 (S=1/2)



第15図 13SX027灰茶土 SX048出土遺物 (S=1/2)

13SK025 (第11・12図)

13SK010同様、白色系土師器、在地系土師器の2種が見られる。第11図1～13は白色系土師器である。坏、小坏、皿が出土している。1～6は口縁部資料であり、直線的な器形で、端部を丸く仕上げるものと上方に跳ね上げるもの、湾曲する器形で端部を丸く仕上げるものに分けられる。第11図1は非常に薄手な作りであり、直線的な器形を有す。白色系土師器は、全体的に底径が大きく皿形化の傾向を呈している。第11図14～29、第12図10～21は在地系土師器であり、坏及び小坏、皿がある。坏、小坏は先に挙げた2類及び3類に該当するものが看取される。第12図11、13、14は口径と比べて器高が高くなる。15はハコ形の形態を有し、他のものとはやや様相が異なる。第12図19は口縁端部を玉縁状に丸く仕上げる。第12図22は龍泉系青磁碗で、上田分類のB類に位置付けられるものである。13SK010と比較して小坏、皿の量が増加する傾向がみられ、法尺・形態にバリエーションが認められる。

13SK040 (第13図)

1～24は在地系土師器、25、26は白色系土師器である。在地系土師器には坏、小坏があり、1類(12、13、16、17)、2類(5、6、8、19)、3類(1～4、7、10、18、20～24)、坏bの形態に類似するが底径がやや大きいタイプ(9)、口径と比べ底径が大きく扁平な形態を有すタイプ(14、15)に分けられる。10は底部に外面から穿孔が行われている。25、26白色系土師器の小坏(25)及び皿(26)である。SK025同様、小坏に形態の分化が多く見受けられる。また、全体的な傾向として底部に板状圧痕を残すものが多い。

13SK026 (第14図)

京都系土師器皿、坏の口縁部、白磁碗E群、土師質の香炉、瀬戸産の天目茶碗、京都系土師器皿を転用したと思われる増埴、土壁破片などが出土している。そのうち、土師質の香炉は精製された胎土で、外面も丁寧なナデ調整が行われている。大友氏館跡では青磁の香炉は数点あるが、土師質のものは例をみない。出土遺物中に天目茶碗があることから、茶道具の一つとして使用された可能性が高い。また、土壁が出土していることは、調査区の近辺に土壁を使用した建築物の存在を裏付けられるものと考えられる。増埴は、当初須恵器と間違えるほど還元しており、京都系土師器は供膳具、灯明具以外に生産用具としても使用されていたことがうかがい知れる。

13SK056 (第14図)

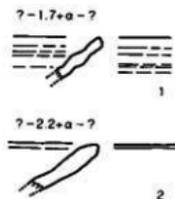
白色系土師器(1)と、在地系土師器の坏が出土している。白色系土師器の坏は外面から穿孔した痕跡が認められる。在地系土師器は全体的に器厚が厚く、口径に比べ底径が大きい。口縁部は直線的に立ち上がるもの(2、3)とやや外反するものとに分かれる。

13SX027 (第15図)

京都系土師器皿(1)、白色系土師器坏(2)、在地系土師器坏(3、4)が出土している。

13SX032 (第16図)

1は在地系土師器の坏、2が京都系土師器皿の口縁部である。



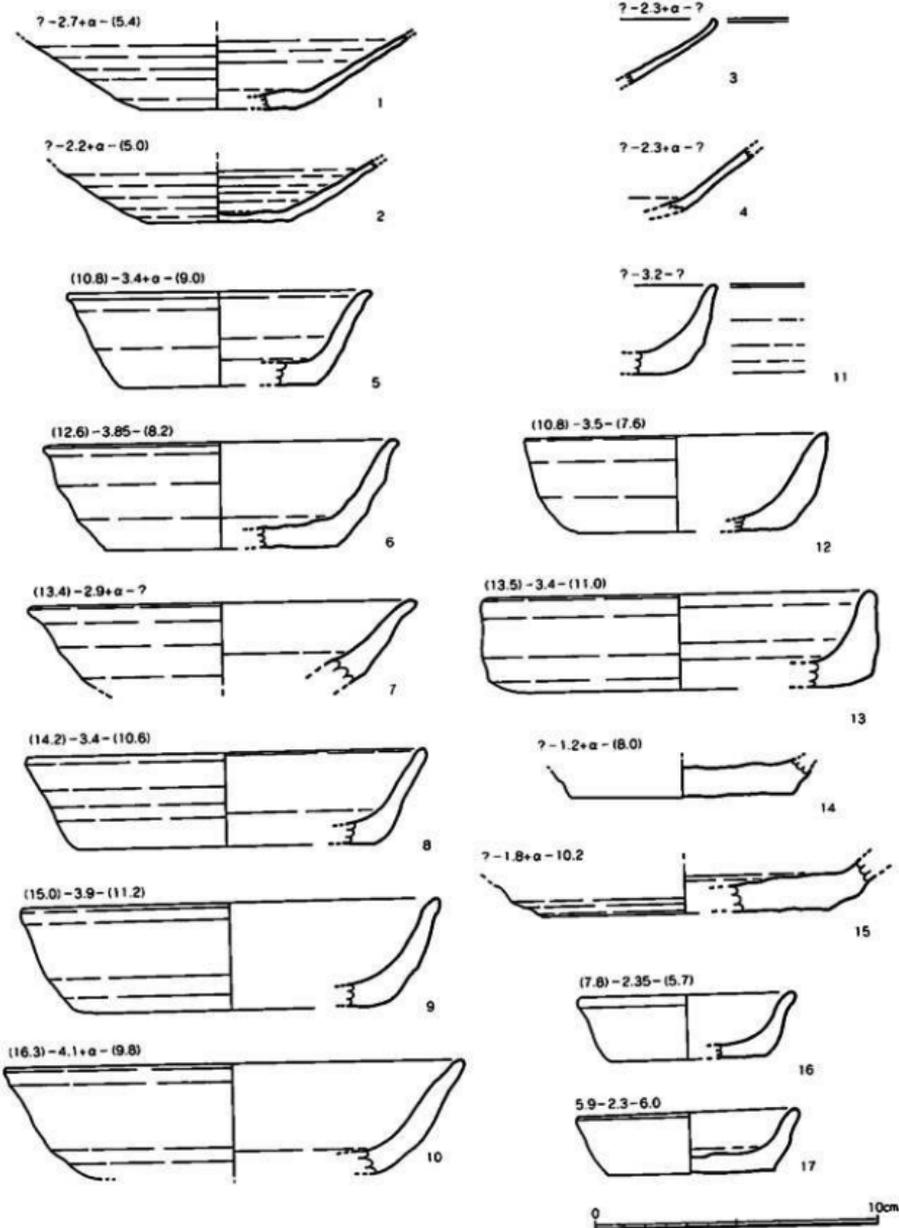
13SX048 (第15図)

白色系土師器(1、2)、在地系土師器の坏(3~5)が出土している。第16図 13SX032出土遺物(S=2/3) 白色系土師器は、器壁が非常に薄く、精製した胎土を使用している。在地系土師器は3種類に分けられる。3は他のものと比べ器高が低く、口縁部も直線的に立ち上がる。4はやや口縁部が外反しながら立ち上がる。5は器高が高く、口径が他より小さい。4、5の底部にみられる段は、糸切り離しに際しての底部の切り離しが良好に至らず成形されたために生じたものである。



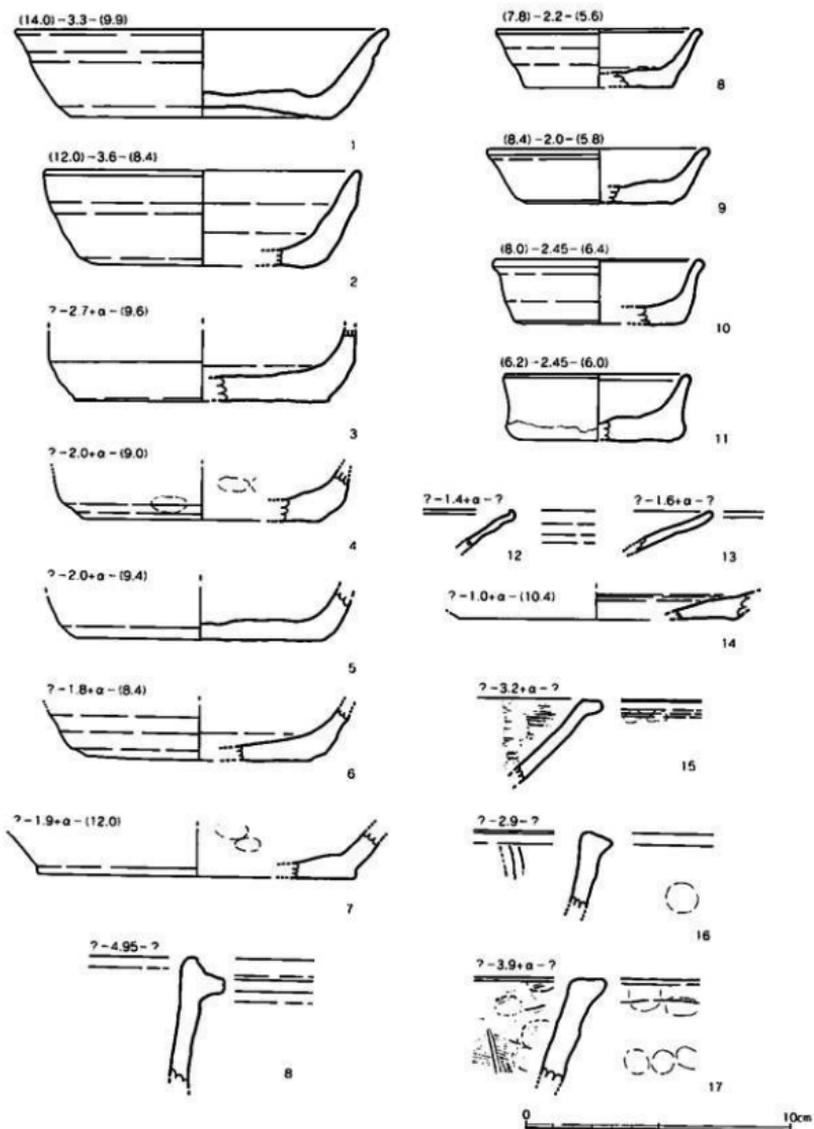
13SX050 (第17図)

白色系土師器(1~4)、在地系土師器坏(5~15)、小坏(16、17)がある。白色系土師器は、直線的に大きく開き、逆ハの字状の形態を呈すものと思われる。在地系土師器の坏は全体に肉厚である。これらの土器は、口縁部が直立して立ち上がるタイプ(11、12、13)、やや外傾しながら直線的に立ち上がるタイプ(5~10)、に分けられる。また、5~7、9は口縁部外面を強くなることにより端部をシャープに仕上げている。16、17は小坏である。大宰府分類の坏aの形態に類似する。坏の特徴として器壁が厚いことがあげられ、その中で、胴部中程で器壁が最も厚くなるものが数点みられる(9、10、12、13)。また、底部から胴部に立ち上がる部分にかけて工具による削りが施されている。これらの資料は大友氏館第12次調査の第I期遺構群に類似しているものがみられるが、白色系土師器が大きく開き、器高が浅くなると推測されることから大内II期の段階に比定されると考えられる。



第17圖 13SX050暗茶土出土遺物 (S=1/2)

13SX045 茶褐土



第18圖 13SX045茶褐土出土遺物 (S=1/2)

13SX045 (第18図)

在地系土師器(1~11)、白色系土師器(12~14)、土師質の鉢(15)、瓦質土器櫛鉢(16、17)、釜(18)などが見受けられる。在地系土師器の坏は口縁部が直立気味に立ち上がるものが多く認められる。小坏は、法量、器形から3タイプある。坏は、SX045の下位に構築されるSX050のものとは比べ、直立する傾向が窺える。また、底部から胴部へ立ち上がる部分に工具による削りが行われるため屈曲が生じている。これらの資料は、大友氏館跡第6次調査で確認された館6SX009の出土遺物に類似していることや(15世紀後半~16世紀前半代に比定される)、破片資料ではあるが、白色系土師器に皿化傾向がみられることから15世紀後半、また内面にクロロ目が残る、いわゆる「クロロ土師器」が看取されないことをふまえると、15世紀後半の古相段階に位置付けられると推測される。

6 小 結

第13次調査は現在も調査中であるが、ここでは現段階で判明している事項について触れ、簡単なまとめをしたい。

今回の調査では、大きく3時期の遺構が確認されている。第1の時期としては16世紀後半~末段階のものである。しかし、この段階の遺構は希薄であり、調査区全体が大きく削平されていることから大型である程度の深さを有したもののみが確認されている。第5図にあるS-015は不整形な円形を呈し、径が約 $2m+a$ を測る。出土遺物中には、厚手でナデの強い京都系土師器があり、白磁碗E群も認められる。また、数は少ないが金属製品の屑や増埴の破片もみついている。このことから金属製品の生産に関わる遺構である可能性が考えられる。16世紀末段階になると、府内は島津の侵攻を受け大打撃を被ることとなる。館も例外ではなく、庭園跡も破壊され、機能しなくなる。しかし、第12次調査では、庭園跡の北東部分で16世紀末に比定される井戸跡が3基構築されており、調査担当者は、その出土遺物に雑器類が多く認められることを指摘している。これは、館が島津侵襲後機能を果さなくなったことを示唆し、町屋として復興されたのではないかと想定される。そうした場合、館内に町屋の様相の強い遺構が確認されても不思議ではない。

第2の時期としては、15世紀末~16世紀前半が挙げられる。この時期に該当する遺構としては、SK010、025、040がある。これらの遺構はすべて廃棄土坑であり、この段階では調査区一帯は廃棄空間として利用されていたと考えられる。各遺構から出土している土器の特徴等については前記しているが、再度触れると、まず、SK010は、土器が完形もしくはそれに近い状況で出土した。逆に、SK025は破片資料が多く目立ち、その中には白色系の薄手の土器も含まれていた。SK040については、遺物量としては他の二つの遺構よりも優り、その組成にも若干変化が生じている。まずSK010、025と比較し、耳皿を始めとして小型製品が多い傾向が窺える。また、坏、小坏についても皿化する現象がみられる。SK010、025から出土する坏の器高は、3cm~3.5cm前後のものが多く、SK040のものは、3.6cmを測るものも出土しているが、大半は3cmに満たない。口径に関してもSK040のものは10cm~12cm前後のものが多く、SK010、025にみられる12cm~15cm弱の口径を有するものと比較すると、やや小型のものが多くことが分かる。

では、これらの土器は何に使用されたのかという疑問が生じるが、その代表的な使用方法を挙げるとすれば、儀式等で盃として用いられる例である。『伊勢六郎左衛門貞順記』には、「御流と申すはかはらけを余多をかせられ候て、一人前一つづつ出さるゝ也。それにて御酒を給り、其のかはらけ持て罷り立ち候也」とあり、このことから、かわらけ(土器)が盃として使用されていたことだけでなく、貴人の前に土器がたくさん積み置かれていたという情景も窺うことができる。また同書に、土器に関しては「三度入、あいの物、五度入、七度入、十度入」といった記載があり、その法量の違いについても具体的に触れている。

さて、これらの土器の年代であるが、現段階での各編年案では、これらの資料は15世紀後半~16世紀前半の大きな時間幅の間に位置付けられている。この時期、大友氏は義右、親治、義長の治世であり、親治、義長の2人は、武家儀礼を盛んに導入し、その会を催している。「大友義長の条々」には、故実家の一人である小笠原光清

や大内高弘が豊後に逗留していることについて触れており、各種の作法、教養の大切さについても述べている。これらのことに加え、出土遺物に京都系土師器が一点も認められないことを考えると、SK010、025、040の資料について、もう少し時間幅を限定できるのではないかとと思われる。

「式三献」が導入されたのは天文五年（1536）から天文六年（1537）の間とされている。それに伴って京都系土師器が使用されたとする説が現在のところ有力である。また、小野貴史氏によると、大友氏は「式三献」という儀礼の存在については、各種文献により、早ければ永正六年（1509）の段階で知り得ていたのではないかと推測がなされている。そうした場合、SK010、025、040から出土した土器は、式三献のような儀式に用いられた可能性は十分考えられる。この資料中に客体的にみられる白色を呈し、薄手で精製土を用いて作られた白色系土師器は、馬防一帯を支配した大内氏の領国内で同様のものが多く出土していることから、従来「大内系土師器」と仮称されてきたものである。SK010、025、040から出土するこの白色系土師器は大部分が皿形化しており、大内氏遺跡出土土師器編年図によると大内Ⅲ期（15世紀末～16世紀前半）に比定される。在地系土師器については、SK040を除くと皿形化は進行していないのでやや古相の様相を呈している。再度SK010、025、040土器の法量について考えると、大きく3種類程度にしか分化できていないように捉えられ、前述にあるような法量分化にまでは到っていない。よって、これらの式三献・京都系土師器・白色系土師器・法量分化というキーワードを総合的に考えると、SK010、025、040出土の土器は、16世紀初頭～16世紀前半前葉段階の間に絞られる可能性が高いのではないかと推測される。

第3の時期としては15世紀後半が挙げられる。この段階の遺構はすべて調査途中であり、今後の展開次第で変更の恐れがあるので紹介のみに留めておく。該当する遺構には調査区の南東部分で確認されたSX050や区画施設と思われるSD055などがある。特に、SD055は溝状を呈しているが、その埋土は意図的に搬入されたブロック土などで構成されており、特殊な様相を示している。

以上が、現状で判明している事項である。今回の調査では主体となる時期は15世紀後半～16世紀前半である。特に15世紀後半という時代は、大友氏では内部抗争や領国支配内での反乱、大内氏、菊池氏の圧力などがあり大友氏存亡の危険を孕んだ時であった。また、全国的にも争乱が激しく、時代の変換期であったといえる。現在、大友氏関連遺跡の調査は進行しており、15世紀代の遺構も確認され始めている。この争乱の時代を人びとほどのように対処していったか、大友氏館、上野原館をはじめとして府内町全体を通して検討して行く必要があると思われる。（佐藤道文）

参考文献

- 大分市教育委員会 2003 『大分市市内遺跡確認調査概報』-2002年度-
大分市教育委員会 2002 『大分市市内遺跡確認調査概報』-2001年度-
大分市教育委員会 2001 『大友館跡-発掘調査概報Ⅱ-』
大分市教育委員会 2002 『大友府内Ⅳ』
山口市教育委員会 1991 『大内氏館跡Ⅱ 大内氏関連街並遺跡Ⅰ』
大分市教育委員会・中世都市研究会 2001 『南彦郡市・豊後府内』 都市と交易
小野貴史 『大分・大友土器研究会論集』 2001 『大友氏における「式三献」について』
芥川龍雄 新人物往來社 『豊後大友氏』
二木謙一 日本歴史学会 『中世武家の作法』



写真1 調査区遠景

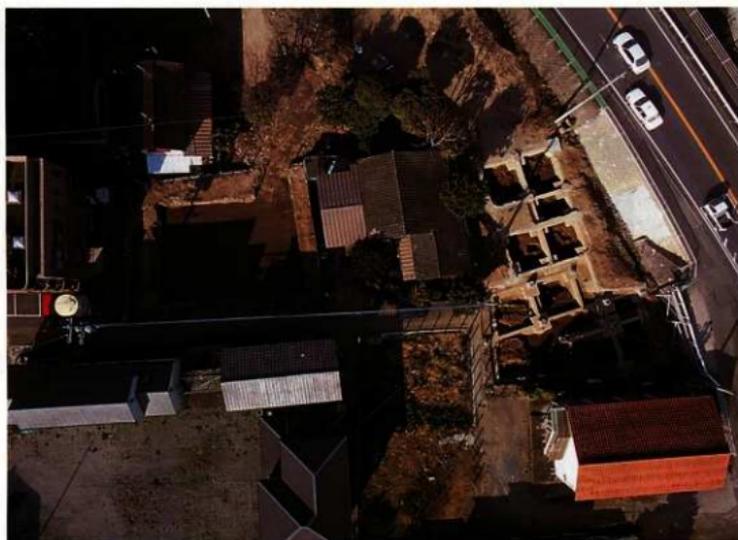


写真2 13次・14次調査区近景（上が北）

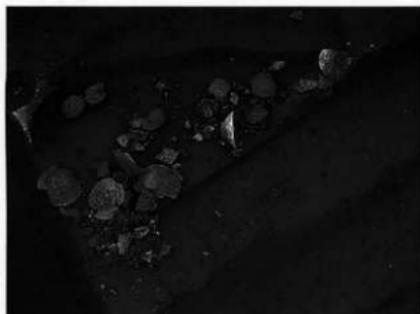


写真3 13SK010遺物出土状況（西より）

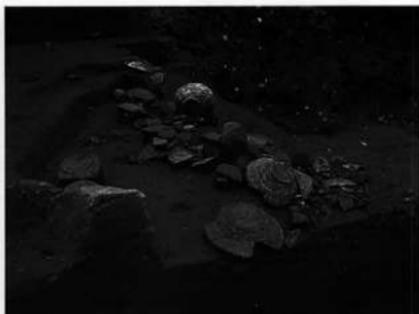


写真4 13SK010遺物出土状況詳細（北より）



写真5 13SK025土層観察時（北より）



写真6 13SK040遺物出土状況（東より）



写真7 調査区北側近景（空中写真 上が北）

大友氏館跡第14・15次調査

調査地点は、推定大友氏館跡の北東部に位置する。第13次調査の西側にあたり、第14次調査地は平成13年度に確認調査を実施した第10次調査の南側に位置する。第10次調査では、近世の水田耕作により削平を受けているが、標高約4.2m～3.6mの間で整地層が確認され、この整地層の途中や整地層より下位には京都系土師器を一括廃棄した遺構群が断続的に確認された。

今回の調査地は、現状の地表面が周辺よりも高くなっていることから（第10次一約4.7mに対し、第14次一約5.4m）、館の中心建物の一角を担う可能性が指摘されていた。しかしながら、試掘トレンチをあげたところ、一段高くなっているのは近代の宅地造成によるものということが判明し、さらにその下層には第10次調査同様に水田層が認められる。この水田層を除去した段階で各遺構群を検出している。遺構検出面は標高約4.4mであり、第6次調査の検出面（盛土上面）5.1m、第12次調査の検出面（15世紀代の遺構検出面）4.7mに比べて低くなっており、近世以降の水田耕作により削平されていると考えられる。第15次調査地点でもこの一連の水田層が確認されている。

第14次調査において検出した遺構には、第10次調査の続きと考えられる多量の土師器（京都系土師器・在地系土師器）を含む大形の廃棄遺構が調査区東側で、南北方向へ断続的に確認できる。第10次調査の廃棄遺構群の検出面が、4.0m前後と第14次調査よりも低くなっており、北側に若干落ちていく状況がみられる。さらに、第10次調査で確認された砂質の明瞭な整地層（標高4.2m）は、今回の調査地では確認できず、もともと一段高かった可能性が考えられる。

この他の遺構としては、方形の長土坑群や大形廃棄遺構群に平行する南北方向の掘立柱建物跡が確認できる。掘立柱建物跡は柱間おおよそ1.9mで、さらに南北に延びる可能性がある。内面にクロコ目を明瞭に残す在地の土師器が多量に廃棄されている土坑に切られており、それ以前の時期が考えられる。大形廃棄遺構群よりは、時期的には古く位置付けられるが、同じ方向に延びており、大形廃棄遺構群はこうした区画が踏襲されたものと考えられる。

大友氏館跡第14・15次調査の詳細については来年度報告予定である。

（中西武尚）

中世大友府内町跡第38次調査

調査地点は「府内復興想定図」により推定されている東側2本の南北道路（通称「一之大路」と「二之大路」）のほぼ中央、推定御所小路町の北側に位置する。

調査は共同住宅の建設に伴い事前の埋蔵文化財確認調査（試掘調査）が平成16年1月8日に実施された。その結果、現地表面から約0.7m下において土坑、ピット等の遺構群が確認された。出土遺物には16世紀代に比定される京都系土師器が出土するなど周囲に当該期の遺構が展開していることが考えられた。

この結果を受けて地権者との協議をおこなったところ、工法変更により地下の遺構に影響を与えることのない盛土保存をおこなう方針が決定された。しかしながら、調査地は中世大友城下町跡の全体像を解明する上でも重要な地点であることから、地権者の同意を得、協力のもと、遺跡の状況把握を第一義の目的として確認調査を実施している。

確認されている遺構には、16世紀代に比定される南北方向の溝状遺構とこれに平行する柱穴列、溝状遺構の両側に展開する井戸跡や土坑群などがある。溝状遺構の上面からは京都系土師器と在地系土師器が一括して出土しており、この中には、明らかに祭祀的行為と考えられる合わせ口にした土師器群も確認できる。

南側に設定した調査区においては、中世大友府内町跡第9次調査で確認されている東西道路状遺構（推定御所小路跡）の続きと考えられる硬化面を確認しており、推定どおり御所小路に比定される東西道路の追認ができたことは大きな成果といえる。

中世大友府内町跡第38次調査の詳細については来年度報告予定である。

（中西武尚）

中世大友府内町跡第32次調査

1. 調査に至る経過

大分市は平成7年度からの大分駅周辺総合整備事業にともない、駅の高架事業などと共に道路網の整備が急ピッチで進んでいる状況にある。その道路網の整備に関して、県道関係は古国府周辺の国道10号線拡幅改良工事、庄ノ原佐野線道路改良工事、市道は庄ノ原佐野線と国道10号線を南北の道路で結ぶ六坊新中島線の改良工事が顕徳町周辺で行われており、公有化に伴った民家の移転などが実施されている。

六坊新中島線周辺は、中世大友府内町跡の重要遺跡内にある。その中で、家屋の移転が契機となり、平成15年4月23日付で大分市教育委員会に57条の2の届出があった。立会い調査を経て、民家建設の工事基礎がその遺構面を破壊する工法であるため、大分市教育委員会では、協議を重ねた結果、工法変更は無理であることから国庫補助事業において平成15年6月9日より本調査を行い、平成15年7月31日に本調査を終了した。またさらに、その設定した調査区の東側に道路拡幅予定地が隣接しており、引き続き道路予定地の部分まで調査を実施した。

2. 調査体制

調査主体 大分市教育委員会 調査指導 大分県教育委員会/大友指導者会

調査担当 五十川 雄也

発掘調査従事者

安部康子・市野瀬勝正・小畑忠義・加藤美枝子・佐藤和美・佐藤恭子・進美枝子・高橋抄子

那賀貞子・中野聖子・原健治・森岡晃司

3. 調査の概要

中世大友府内町跡第32次調査区は、「府内古図」を引用すると、大友氏館跡の西側にあたり、その南北に延びる道路（通称「四之大路」）の周辺に位置する。またこの周辺部における発掘調査の成果は、中世大友府内町跡第10次調査区（県教委）でキリシタン墓と推定される土墳墓が17基検出されている。このため、設定した調査区付近はダイウス堂の推定地と関係が示唆された。また中世大友府内町跡第5次調査では、調査区東壁に道路伏道構を確認している。当調査区でも南北道路が検出できることが予想された。

4. 基本層序（第1図）

第32次調査区の基本層序は、現地表面から約0.9mで黄褐色砂質土の自然堆積土が遺構検出面（標高3.5～3.7m）となる。遺構検出面の上層は、直上に近世以後の造成土をはじめ、大きく4層に分層できた。遺構検出面は間層を挟まずに近世の造成により破壊されているため、大きく削平を受けている可能性が高い。

5. 調査の内容

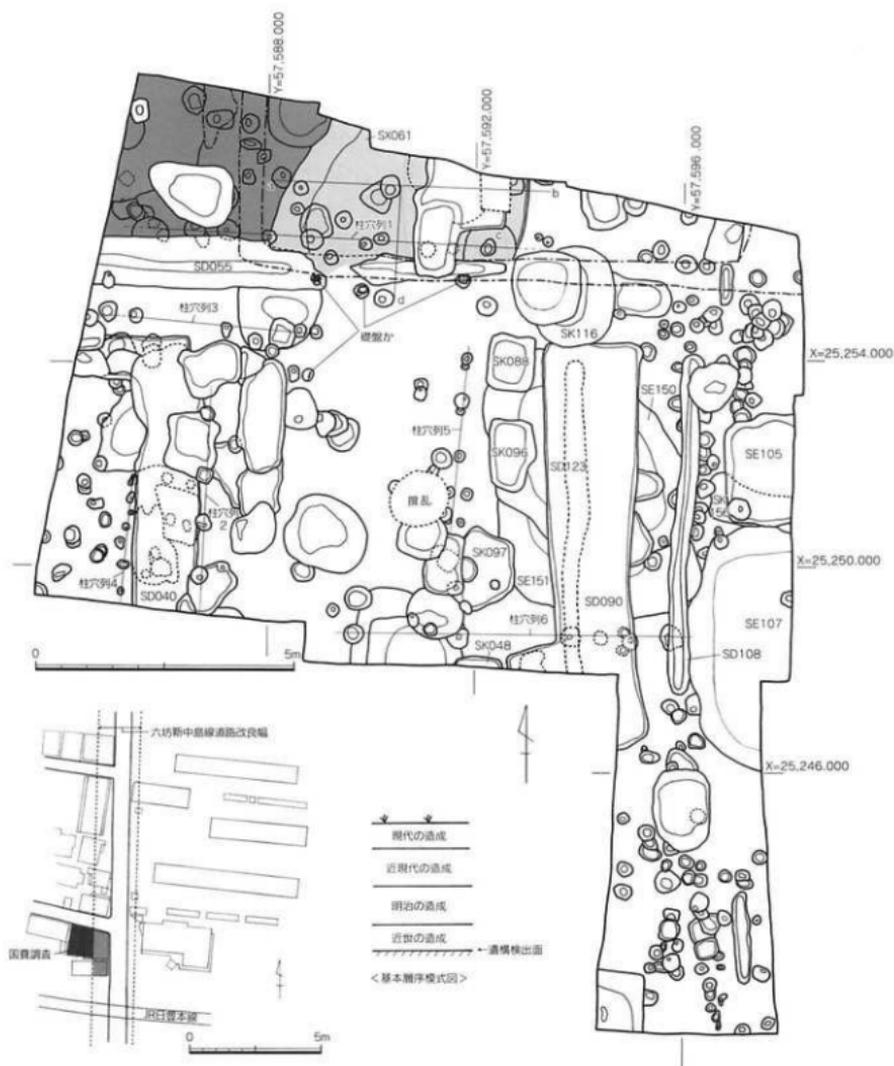
第32次調査区は、大友氏館跡の西側に位置する。府内古図を参照すると大友氏館跡の西側にあたる南北道路（通称「四之大路」）の中町周辺に該当し、また周辺で県教育委員会が行った第10次調査なども参考にすると顕徳寺・ダイウス堂の周辺にあたることも想定された。

調査面積は167㎡である。また今回の報告事項である調査区と隣接する道路改良工事に伴う調査区は少なからず関連があるため、隣接区（約70㎡）も説明に加えておく。

検出した遺構は溝、柱穴、土坑、井戸跡、部分的に見られる整地層などが主体である。調査区東側には、井戸跡や竪立柱建物跡を形成する柱穴群などが展開し、町屋及び屋敷地に伴うものと推定される。また調査区中央付近から西側にかけては、溝や柱穴列など空間を区画するような遺構が多く検出できた。調査区の遺構全体での出土遺物量は少なく、遺構の所属時期を決しがたいものが多い。以下それぞれの遺構ごと空間ごとに説明をしていく。

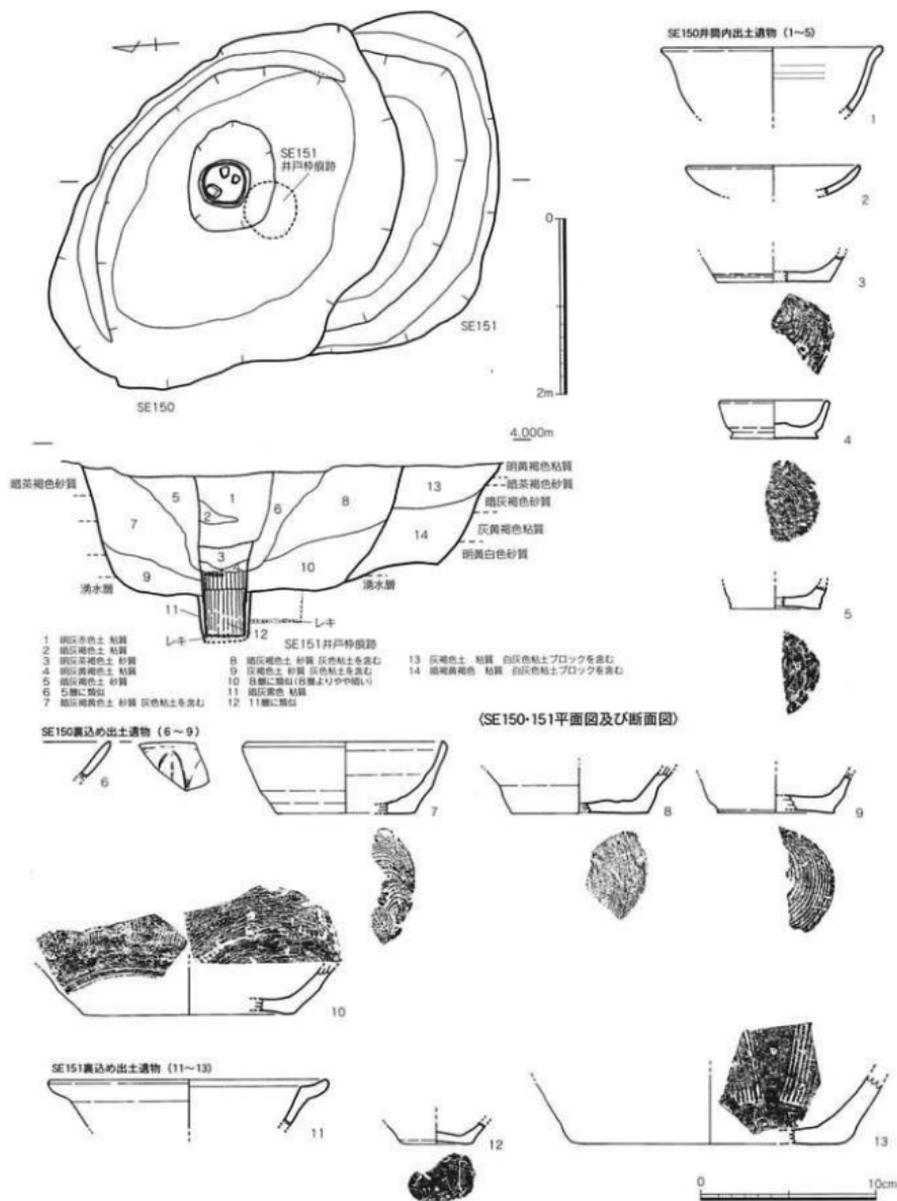
(1) 井戸跡 (SE)

SE150・151（第6図）は、調査区の中央からやや東側に位置する。SE150はSE151の北部分を切り、SE151はSE107を切る関係にある。またSE150・151ともにSD090・123やSK088・096・097・098などに切られる。



第19図 中世大友府内町跡第32次調査遺構配置図 (1/100)

SE150は井筒部と裏込め部が確認できた。検出面での井筒跡の径は約1.1mで楕円状を呈する。裏込め部を含めると全体の井戸跡の形状は北西方向に長軸をもつ楕円形で、長軸4.8m、短軸3.1mを計る。井筒部は土層観察より、意図的に埋め戻されている状況が確認できた。検出面より約1.8m下が井筒部の最下面である。井筒部の底面には拳大の礫が集中していたが、湧水の量と噴出する砂の量が多く、礫の実測することは不可能であった。



第20図 SE150・151実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/3)

また、検出面より1.2m～1.8mの間で井戸枠として桶を利用していることが確認でき、最低2段の桶を組み合わせていることがわかった。裏込め部は、大きく3つに分層できた。埋土は粘土質でしまりは強い。現在の湧水点は標高2.5mのところであった。出土遺物(第2図1～10)は、1～5は井筒内の出土、6～10は裏込め部からの出土である。1は中国龍泉窯系青磁碗である。口縁端部がやや外反する。2は中国白磁皿である。3～5は在地系土師質土器で、底部糸切りである。3は胴部が底部からやや外に開いて、まっすぐ延びる。4は底部から胴部にかけてやや内傾して外に開き、胴部が立ち上がる。5は底面がやや上げ底気味である。6は中国龍泉窯系青磁碗片である。外面はやや不明瞭な銘述弁文を施す。7～9は在地系土師質土器で、底部は糸切りである。7は胴部がやや外に開きながら立ち上がる。9は底面がやや上げ底気味である。10は互質すり鉢である。内面の胴部と底部の屈曲箇所に短い摺目が確認できる。

SE151は井筒部と裏込め部で構成される。その大半をSE150に切られるため、残存状況は良くない。井筒部はSE150の裏込め部の掘り方の最下面で検出ができた。井戸枠に利用されていたと思われる桶の一部が極めて残存状態の悪い状況で見つかった。井筒部の最下部は標高約1.2mのところSE150と同様に拳大の礫が集中している地点があり、最下部と考えた。ただ湧水と砂の量が多く、礫の実測は不可能であった。裏込め部は大きく2層に分層できた。埋土はしまりが強く、粘土質である。出土遺物(第2図11～13)は、11は中国龍泉窯系青磁の盤で、口縁部を屈曲させる。12は在地系土師質土器で、底部は糸切りである。底面はやや上げ底気味で、胴部は外に開きながら延びる。13は備前焼すり鉢である。内面に摺目を施す。

SE107(第1・3図)は、調査区東側で検出し、SE151に切られる状況である。道槽の半分以上は調査区外であったため、平面プランは不明である。井筒部と裏込め部から構成され、長軸は $4.6m + \alpha$ を計る。井筒部は平面プランで南北軸2.2m、東西軸 $1.4m + \alpha$ を計る。その埋土は分層できたが、それぞれ類似する層であり、ブロック土も多く混入することから、意図的に埋没(廃棄)したものと考えられる。また下部で、井戸枠として、4枚の石を方形に組んだ状態を検出した。石は凝灰岩で端部にほぞを掘るなどの加工痕が認められた。ただ湧水と砂の噴出量が極めて多く、凝灰岩の底面をきれいに検出することは困難であった。底面からは桶の一部と思われる小破片が少量散乱していた。さらに方形に組んだ凝灰岩の上部、検出した井筒の中層くらいに拳大～人头大よりやや小振りの礫を特に北西付近で意図的に配置するような状況があった。埋没土の中からも多くの礫が出土したことから、方形に組んだ凝灰岩の上部には井筒の壁面に石を配置していた可能性が考えられ、井戸廃棄時にその多くが壊されたと考えられる。裏込め部は3～4層を確認した。粘土質の土を主体としている。出土遺物(第3図1～10)は、1～7は井筒部内出土で、8～10は裏込め部出土である。1～4は在地系土師質土器である。底部は糸切りである。1・2の底部径は小さく、胴部は外反しながらまっすぐのびる。3の胴部はほぼ底部から直角気味に立ち上がる。5は中国景德鎮産の皿である。6は互質火鉢で、口縁外面に2条の突帯とその間にスタンプを施す。7は備前焼すり鉢である。8は中国龍泉窯系青磁碗片で、外面は薄く銘のある運弁文を施す。9・10は備前焼すり鉢の口縁部である。

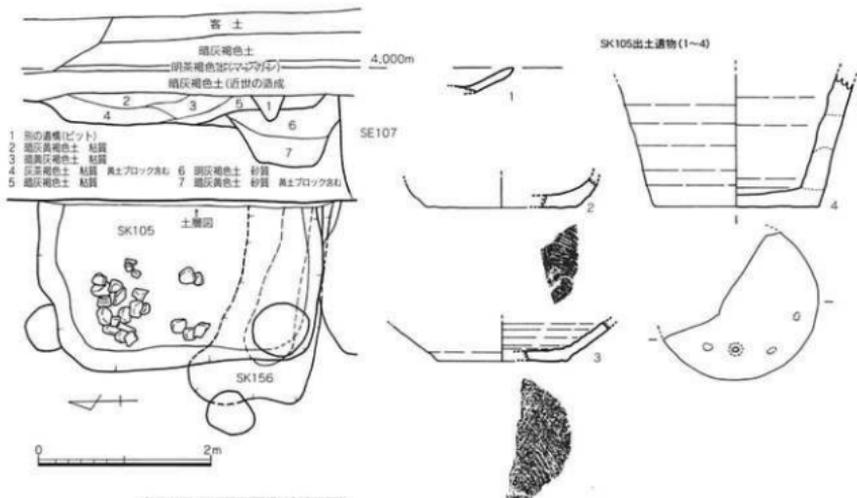
(2) 土坑(SK)

SK105・156(第4図)

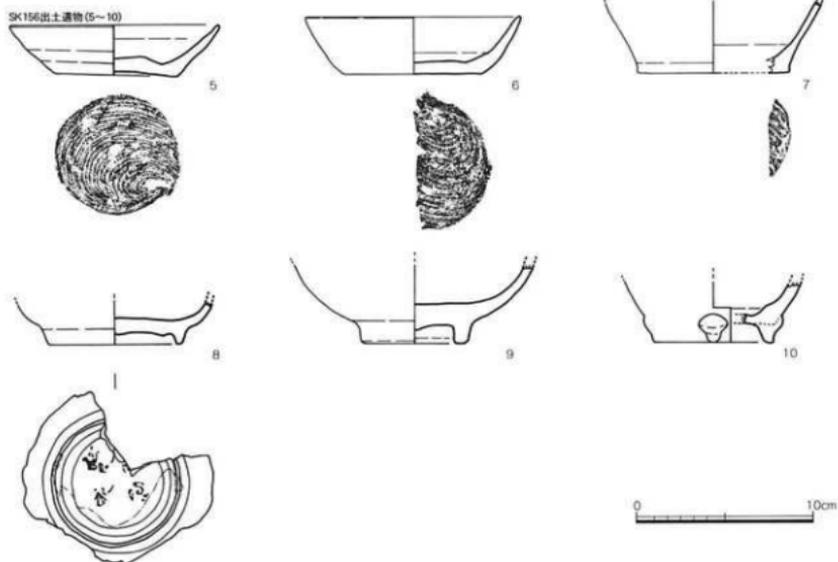
SK105・156は調査区東壁際で検出し、SK105はSK156及びSE107を切る。SK156はSE107に切られる。

SK105は南北軸2.2m、東西軸 $1.8m + \alpha$ 、最大深0.25mを計る。拳大の礫が少量出土した。

出土遺物(第4図1～4)は、1は京部系土師器である。2・3は在地系土師質土器である。2・3ともに底部糸切りである。3は胴部内面にロク口痕跡の凌を明確に残す。4は瀬戸産の瓶子である。外面に緑釉がかり、内面は無釉で、粘土積り上げ痕跡が残る。また外面底部には2～3mmほどの丸く無釉の箇所があり、焼成時の重ね焼きの痕跡であろう。1の遺物は他の出土遺物と時期差が大きくありそうで、混入している可能性がありうることに留意しておく。

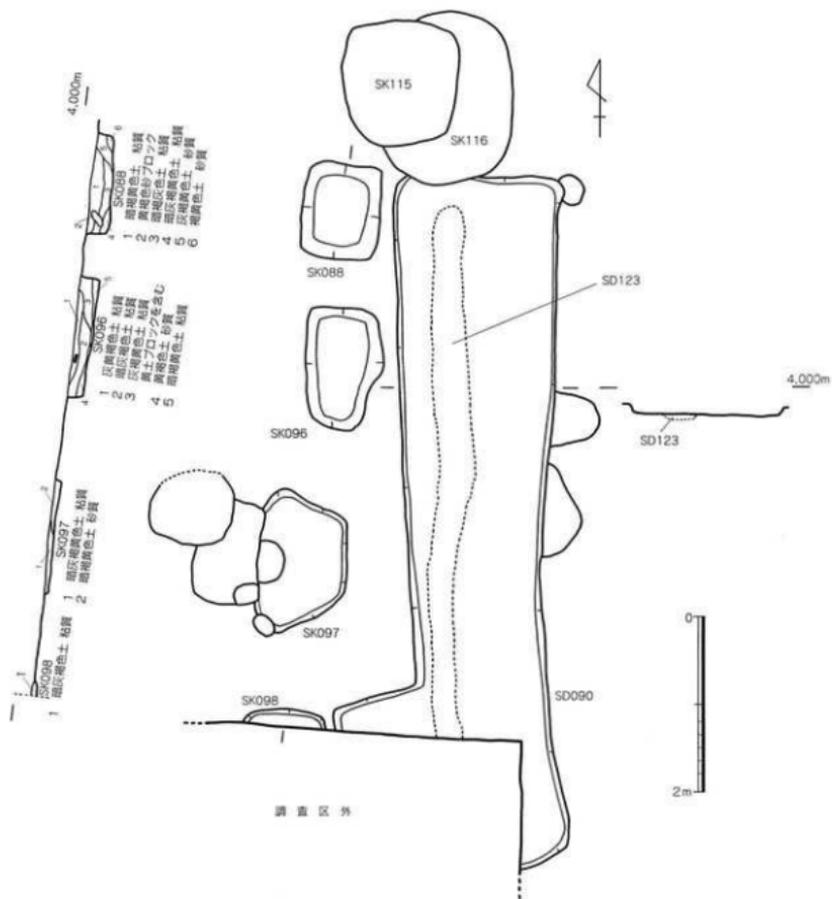


〈SK105・156平面図及び断面図〉



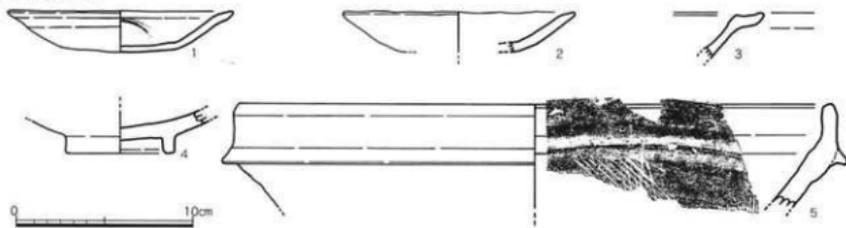
第22図 SK105・156実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/3)

泉窯系青磁である。3は青磁皿で、口縁部が外側に屈曲する。4は青磁碗である。5は備前焼すり鉢の口縁部で、内面に交叉摺目を残す。SD090完掘後、SD123を検出した。SD123は約2.0m東に位置するSD108と平行関係にな



《調査区中央付近平面図及び断面図》

SD090出土遺物(1~5)



第23図 調査区中央付近の実測図(1/60)及び出土遺物実測図(1/3)

りそうで、埋土は類似する。出土遺物は京都系土師器の破片が出土した。

SK088・095・097・098は、関連のありそうな土坑群で、軸は南北軸からやや東にふる。SE150、151を切る。SK088は平面プランはやや南北に長い長方形を呈し、規模は長軸1.4m、短軸0.9m、最大深0.2mである。埋土はしまり強く、ブロック土を含む。SK096は平面プランがやや不定形な南北に長い長方形を呈する。規模は長軸1.45m、短軸0.6m、最大深0.1mである。SK097は平面プランは不定形な南北を長軸とするプランで、長軸は1.45m、短軸は0.6mである。ただし、短軸は、この土坑の西側を柱穴及び土坑によって切られる。SK098はそのほとんどが調査区外なため詳細はわからない。

出土遺物(第6図1~4)は、1は中国龍泉窯系の青磁碗片で、外面は剣先蓮弁文を施す。2は京都系土師器で、底部が少し上げ底になる。3は瀬戸焼で、内底にスタンプ文を施す。釉色は緑色である。4は中国龍泉窯系の青磁碗で、口縁端部を外反させる。

(2) 調査区西側の状況(第1・3図)

調査区西側は柱穴列2・3・4、SD055,040及び南東部に柱穴群が展開する。SD055とSD040の間は約1.2mほどの空地となり、SD040の東から柱穴列5まで遺構が少ない状況(空地)となる。

柱穴列2・3は、柱穴列2は、南北方向に軸をもち、SD040を切る。また柱穴列3は東西方向に延びる。柱穴列2・3はその埋土色が類似する状況から関連があるものと思われる。出土遺物は図示できない土器片のみである。

柱穴列4は柱穴の規模は小さい。南北方向に延び、南から2.4mのところまで確認できる。SK041、SD040との切り合い関係は不明である。出土遺物はない。

SD040は南北方向のび、南から3.0m延びたところで、西にはほぼ直角に屈曲する。幅は0.9m~1.1mであり、最大深は0.2mである。部分的に土坑に切られる。出土遺物(第7図1~5)は京都系土師器の破片である。5は口縁端部外面に工具痕が残る。

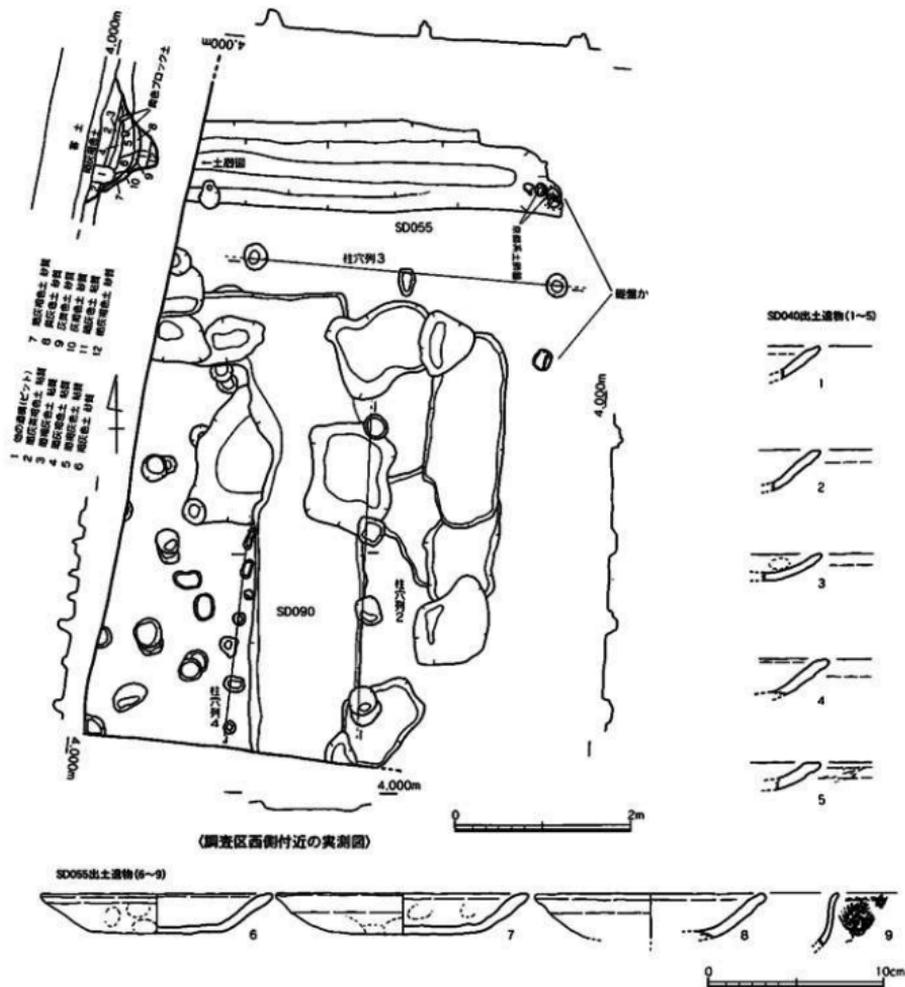
SD055は東西方向に延びる溝で、調査区内でその東端が確認できた。溝の規模は、最大幅1.0mで、最大深0.8mである。断面観察から最低1回の掘り返しが確認できた。出土遺物(第7図1~4)は、1~3は京都系土師器の皿で、4は中国製染付碗である。1・2は溝の最下面東端でほぼ正位置の状況で出土した。土層図の12層にあたる。1は完形である。口縁端部が外反する。外面にユビオサエが残る。1・2ともに底部の器壁は薄い。3・4は上層からの出土である。3は口縁端部外面に強いナデを残す。4は口縁端部が外反し、外面に唐草文を施す。中国景徳鎮窯産である。

(3) 調査区北側(部分的な整地土)の状況(第1・2図)

調査区の北側に部分的な整地土(SX061)を確認した(アミカケ部分)。SX061の切り合い関係は、SD055、SK103とSK094から切られる。またSX061の西側にも別の整地土が展開(第8図1層)し、SX061を切る状況である。SX061は土層観察から、5層に分割できた。埋土色はほぼ類似し、しまりもかなり強い状況である。

出土遺物(第8図1~10)は、1~6は京都系土師器である。1は口径12.8cm、内面にナデアゲ裏が確認できる。2は口縁端部外面に強いナデを残す。3は口縁端部外面に少し強いナデを残す。4は口縁端部を外反させる。6は口径10.4cm、高さ2.2+ α cmで、他のものと比べてやや法量小さい。7~10は備前焼の鉢、甕である。7・8・9は鉢の口縁から胴部にかけて残存し、内面に層目が確認できる。7は口径39.8cm、8は口径33.6cmである。9は7・8とは口縁部の器形が相違する。10は甕片である。胴部外面に線刻が確認でき、「参石入」と考えられる。

また整地土除去後、柱穴が検出された。良好な遺物は出土していないが、東西方向に延びる柱穴列1を確認した。柱穴列5・6は、柱穴列5は南北方向に軸をもつものである。出土遺物は図示できない土器片が出土しただけである。柱穴列6は東西方向にのびる柱穴列で、柱穴の規模は柱穴列5に比べると大きい。SD090とSD123に切られる。出土遺物は、図示できない土器片が出土した。

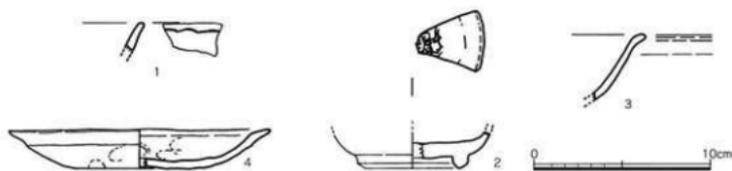


(調査区西側付近の実測図)

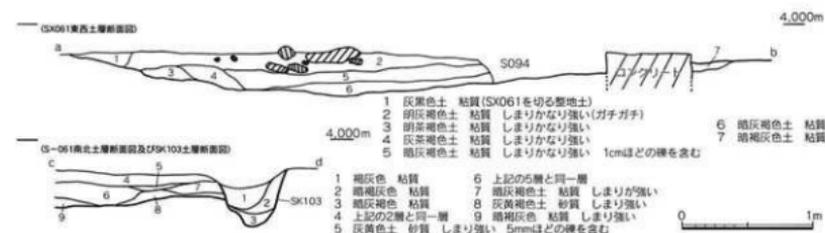
第24図 調査区西側付近の実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/3)

小 結

以上、第32次調査区の主な遺構、遺物を述べた。まず各遺構と出土した遺物を考えてみる。井戸跡はSE150、151、107を確認した。SE150からは白磁皿（森田分類D群）や龍泉系青磁碗（上田分類B・D類）、在地系土師器などが出土した。SE151はSE150に切れ、SE107はSE151に切られる関係である。切り合い関係から井戸跡の中で最も古いSE107からは染付碗（小野分類B群・XV）、備前焼鉢片（乗岡編年中世5期-b）などが出土した。それら出土遺物より3基の井戸跡は15世紀後葉～16世紀前葉の所産であることが考えられる。またSK156はSE107に切られるため、この調査区の中では一番古い遺構である。SK156からは龍泉系青磁碗や在地系土師

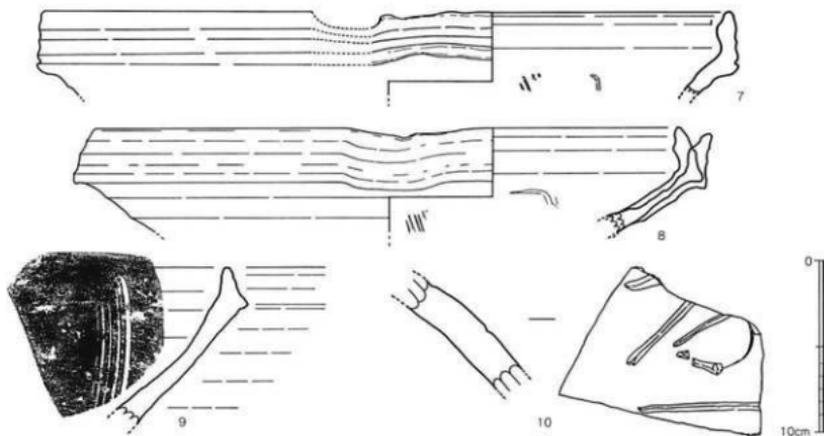


第25図 SK088・096・097出土遺物実測図 (1/3)



SK103出土遺物 (1~3)

SK061出土遺物 (4~10)



第26図 SX061土層断面図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)

器の出土とともに白色系土師器片などが共存する。特に青磁碗は、外底に墨書が認められたものがある。

調査区中央付近から西側にかけて展開する遺構は、全体的に京都系土師器の出土する割合が調査区東側に比べると顕著に高い。SX061の整地層やSD055・040・090・123などの溝を含めて多くの遺構から出土している。その他の遺物では、SX061より「参石入」の銘であろう備前焼製の銅部片が出土し、乗岡編年の近世Ⅰ期に該当しよう。また備前焼の鉢もSD090などを中心に交叉摺目のあるものが出土している。他には景德鎮窯産の染付や龍泉窯系青磁（上田分類B-4類）なども出土した。調査区中央付近から西側にかけては、このような遺物を出土し、埋土も類似するものが多いことから、16世紀中葉～後葉・末葉主体の遺構群の展開と推定する。

以上から、出土遺物より遺構の帰属年代を大別すると大きく2時期に分けられることが考えられよう。Ⅰ期は15世紀後葉～16世紀前葉、Ⅱ期は16世紀中葉～後葉・末葉である。時期別に府内町跡の様相を考えてみると、Ⅰ期は調査区の東側を中心に井戸跡や土坑、柱穴群が展開する。Ⅰ期の段階が設定した調査区の土地利用開始時期でもある。検出した遺構の性格から、町屋もしくは屋敷地などに該当するような生活跡であると考えられる。ただⅠ期の段階では、調査区の西側には遺構がほとんど展開しないことから、あまり人の手は及んでないものと推定される。Ⅱ期になると、調査区の西側に土地の開発が及ぶようになり、またその遺構の性格もⅠ期とは相違し、区画性要素の高いものが多くなる。Ⅰ期の町屋などに推定される空間はⅡ期の段階では継続していない、Ⅰ期の様相とは相違する土地利用が、Ⅱ期の段階で行われたものと思われる。

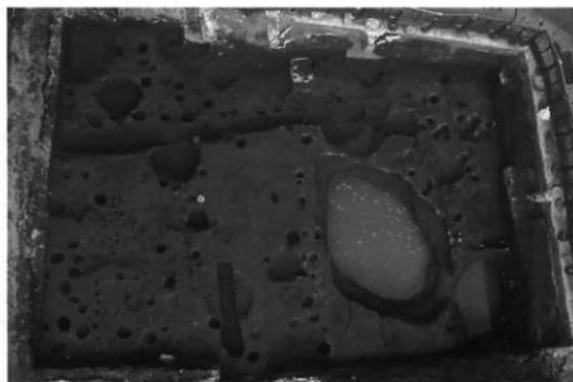
前述したようにⅠ期は、調査区東側で遺構密度が高く、調査区西側では希薄だったのに対して、Ⅱ期は調査区西側に遺構の展開は広がり、逆にⅡ期の調査区東側の遺構密度はⅠ期に比べると減少するようである。これはⅡ期の段階で調査区西側の土地を新たに開発して、何らかの施設を築くとき、調査区東側で展開していたⅠ期の町屋もしくは屋敷地と思われる空間は機能していない状況ということになる。となると、調査区周辺の都市空間、景観が変化するほどの何らかの規制が働いたものであったと思われる。

今後の課題を簡潔にまとめると、1点目にⅠ期の井戸跡を3基検出したが、その内部構造の差に何か意味があるのか、ないのか。2点目に、溝や柱穴列など区画性の高い遺構がある。中でもⅡ期のSK088～098の土坑は規則的に配置されているように見受けられ、これが土地の何らかの区画に伴うようなものなのか、または別の性格をもつものなのか、3点目にⅡ期の区画の性格が高い遺構群が空閑地も含めて、どのような土地利用が行われたのか。中世大友府内町跡第10次調査で確認されたキリシタン墓と推定される墓地との関係の有無、4点目に大友氏館跡の西側、特に四之大路周辺の都市空間の様相である。現段階では四之大路の規模や正確な位置は不明であるため、今回の第32次調査区の遺構が四之大路のすぐ道沿いに展開する遺構であるのか、もしくは少し離れた場所に展開するものであるのかを突き止めることは、都市空間の構造を考えていくうえで重要である。

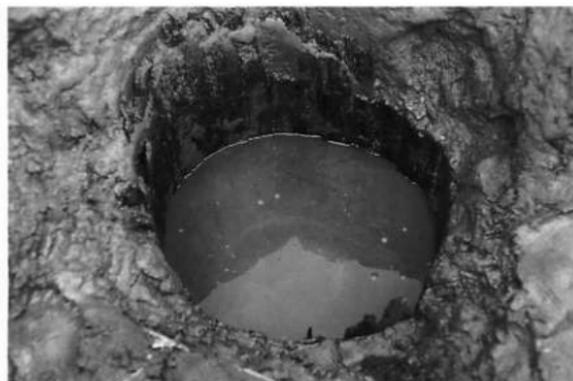
中世大友府内町跡のこれまでの調査の中で、今回のような16世紀代の区画性の高い遺構が多く検出できたのは稀であり、中世大友府内町跡全体を考えていく上でも、32次調査区の様相は特異な状況である。今後、南北道路である四之大路の規模・位置の詳細な情報の確認は必須であり、さらに四之大路周辺に展開したと推定されるダイウス堂や府内病院、コレジオなどの施設に伴う土地利用がどのように展開していたかということまで含めて、視野を広げて考えていくべきであろう。



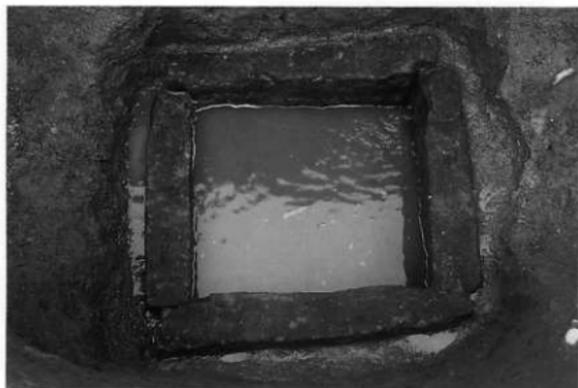
1. 調査区遠景（北より）



2. 調査区全景（真上）



3. SE105井戸桶出土状況（西より）



4. SE107井戸枠（凝灰岩）
出土状況（西より）



5. 調査区北側付近の状況（東より）



6. 調査区西側付近の状況（南より）



7. 調査区中央付近の状況（北より）



8. SD055土層断面（東より）



9. 調査作業風景

中世大友府内町跡第33次調査

1. 調査に至る経緯

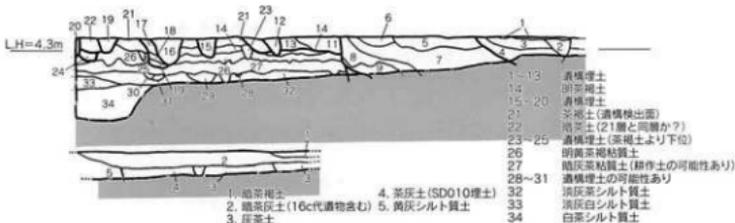
今回の調査は、大友氏関連遺跡確認調査の一環として実施したものである。

調査地は、「戦国時代府内復原想定図」中には該当する町名は無く、中世府内町の南端部分にあたると思われる。

2. 層位など

調査区は大分川の左岸の自然堤防上に位置する。遺跡が形成される以前については、地表面から約1.4m掘り下げた地点で、河川堆積物と思われる砂層が確認されたことから旧河道だったと考えられる。その砂層上面には淡灰茶シルト質土

層、明黄茶褐土層、暗茶褐土層（古→新の順）の3層の遺構面が堆積する。各層は整地層のように人為的に積まれたものではなく、自然堆積によって形成されたものと思われる。



第27図 調査区土層図(S=1/80)及び土層模式図

3. 検出遺構

杭列跡

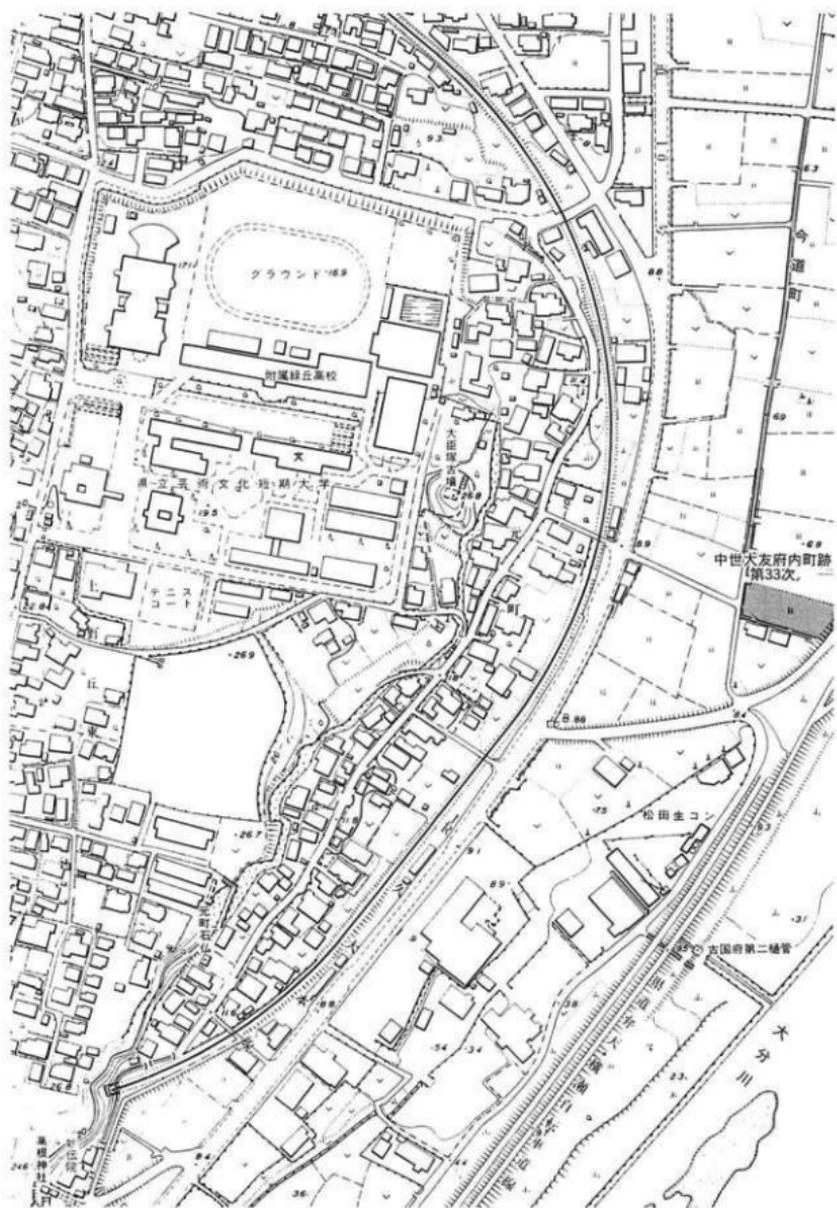
33SA015 (第30図)

調査区の中央やや西側で検出される。柱間は6間で、各柱間の距離は、約1.1mから約2.2mと一定していない。柱穴径は約0.3mを測り、土層観察より柱径は約0.1mと考えられる。柱穴上面には灰色砂層が堆積しており、調査区壁面で確認される耕作土層と類似する。耕地化するのが、出土遺物より近世の段階と考えられるため、SA015は、本調査区が耕地化する直前のものと推測される。

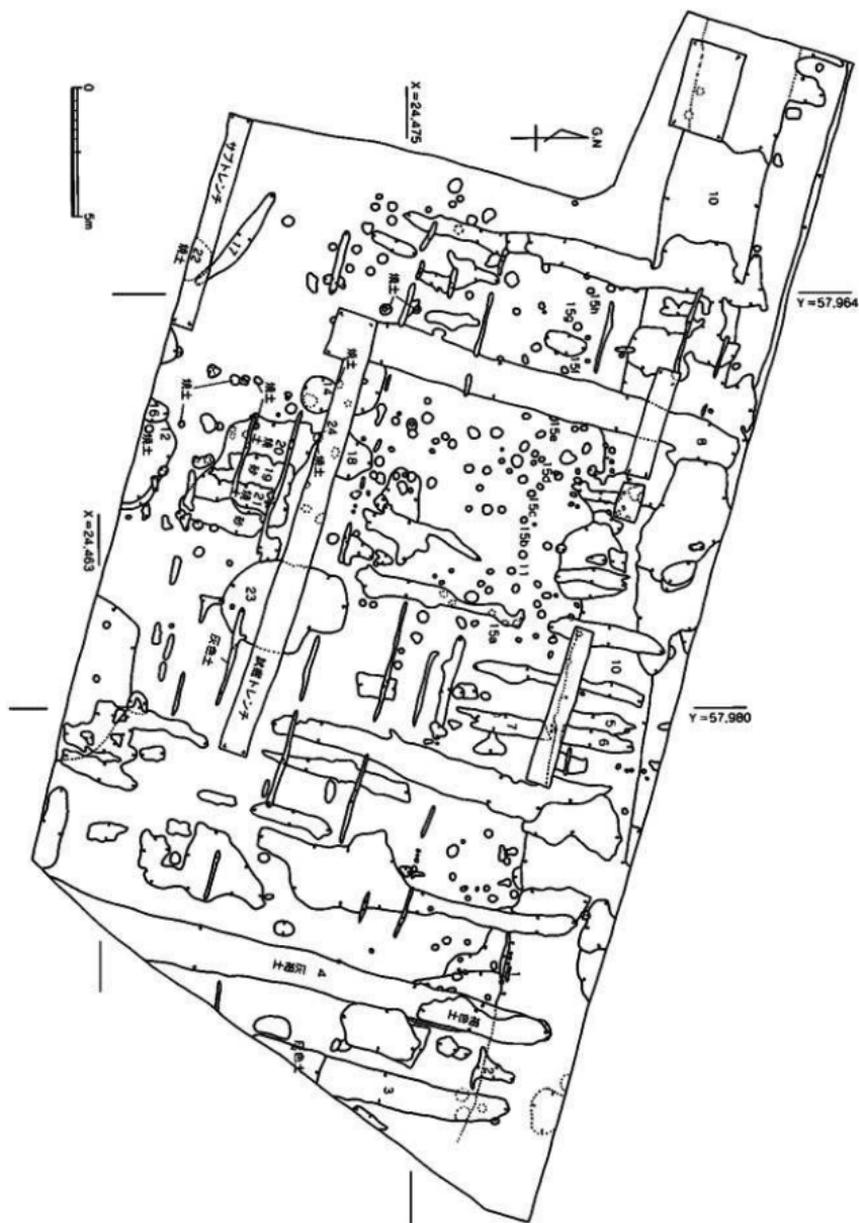
土坑

33SK020 (SX019)・021 (第30図)

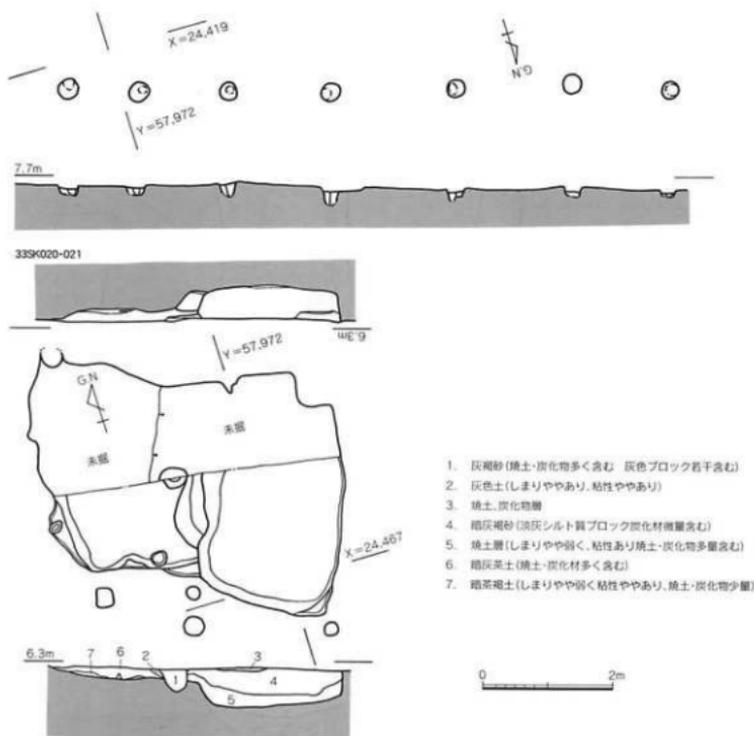
調査区の中央南側で検出される。南北約3～4m、東西約4.5m、深さは約0.2～0.6mを測り、平面不定形な隅丸長方形を呈す。遺構番号をそれぞれ分けているが、019、021は同一遺構、20は前者の土坑が掘り込まれる以前の遺構である。019は、021の上位に堆積する砂層である。SK021は、砂層(SX019)を間に挟んで、上層、下層に換土層が確認される。砂層がどのようにして堆積したかは定かではないが県教委の調査で、同じような砂層の堆積を示す遺構が見ついている。その調査所見から、砂層は上位にある水田耕作に伴うもの、もしくは小規模な水の氾濫によって形成されたものではないかと考えられている。本調査区も以前は水田として利用されていたことから、同様な例になる可能性も含まれる。構築時期に近い段階に堆積した茶灰土層より、建築材に使用された炭化材や壁土などが出土していることから火災処理土坑ではないかと考えられる。ただ、砂を利用した目的については不明な点が多く今後の類例の増加を期待したい。



第28図 調査区位置図



第29図 中世大友府内町跡第33次調査区 遺構略測図 (S=1/200)



第30図 33SA015平面図・土層図、33SK020・021平面図・断面図・土層図 (S=1/80)

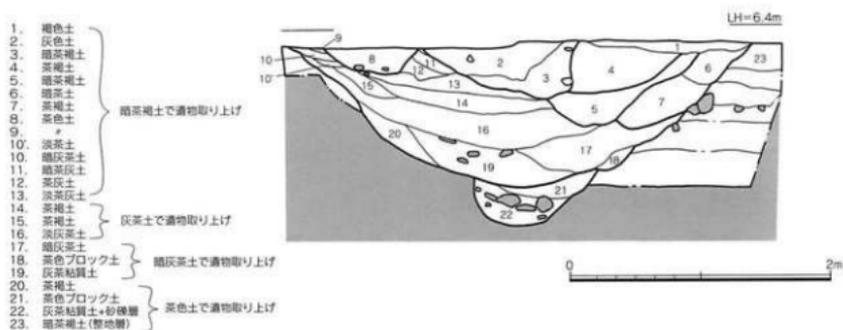
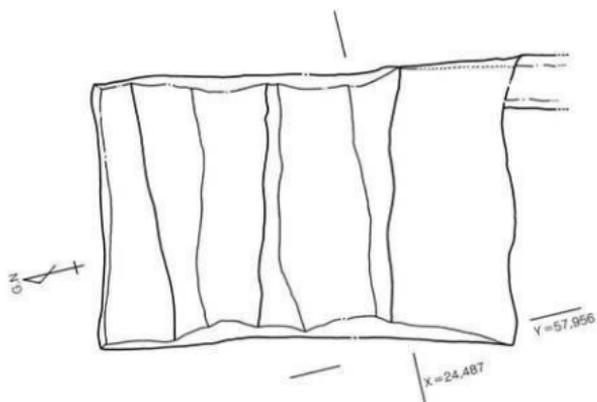
先述したが、出土遺物中には、壁土が多くみられ、中には竹を組んだ痕跡を残すものもあり、戦国期の建築様相を考える好資料となり得よう。SK020・021の時期については、出土遺物より16世紀末段階に比定される。

溝状遺構

33SD010 (第31図)

調査区北側で検出した。区内を東西方向に縦断する溝状遺構で、幅は約4m、深さ約1.4mを測る。断面形状は掘鉢状を呈し、南側壁面はやや急な傾斜で立ち上り、北側壁面についてはゆるやかな形状を示す。土層観察を行ったところ、自然堆積を繰り返しながら、大きく4～5回の掘り返しが行われていることが分かる。溝底面は砂利層が堆積し、水が僅かに湧いてくる状況であった。土層からは水流痕跡は窺えず、水分を含む湿った土壌が確認されたことから、低湿状態だったのではないかと考えられる。このことを踏まえると、SD010は流水を目的としたものではなく、土地区割り等を目的としたものと思われる。主軸方位はN-102°-Eである。

遺物は主に土層断面にみられるところの、溝上位にある掘り返し土層から出土している。当初、古代に属する遺物が多く出土していたが、溝中位に堆積する灰茶土層中より15世紀代に比定される在在地系土師器の坏口縁部が出土していることから、15世紀の段階には埋没が開始していたと考えられる。



第31図 33SD010平面図・土層図 (S=1/40)

性格不明遺構

33SX018 (第29図)

調査区の西側で確認された土坑であるが、一部掘り下げたのみであることから性格は不明である。埋土は上位から灰色土、灰茶ブロック土に分けられる。出土遺物には香炉、掛け花入れなど茶道具に該当するものがみられる。

33SX023 (第29図)

調査区南側、中央付近で検出した。長径約2.5m、短径約1.7mを測り、平面不整形な円形を呈していることから複数の遺構が重なっていると思われる。規模の大きさから井戸の可能性が考えられるが、遺構の掘り下げを行っていないため具体的性格については言及できない。一部試掘トレンチによって分析されており、その壁面から燧台が出土している。

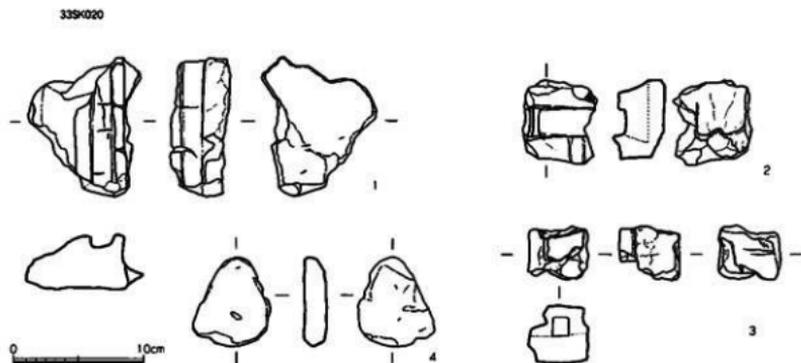
4. 出土遺物

33SK020・SX019・021出土遺物 (第32・34・35図)

SX019 (第34図) はSK021の埋土の一部である。遺物には、京都系土師器皿 (1)、在地系土師器杯 (2)、青花碗 (漳州窯系? 3)、中国産白磁碗 E-2 類 (4)、中国産焼締陶器鉢 (5)、備前焼甕 (6、7)、燵破片 (8) がある。

SK020からは、京都系土師器皿 (第34図1、第35図1)、青花碗 B 群、E 群 (第34図2、第35図2)、中国産青磁香炉 (第34図3)、備前焼甕・壺 (第34図4~7、第35図3) がある。青磁香炉は胎土が白灰色を呈し、その中に黒色微粒子を多く含む。釉調は淡い緑青色を帯びている。底部の中央付近は釉剥ぎが行われている。備前焼に関してはやや古い様相、間壁編年のIV期後半~V期に位置付けられる壺口縁部がある。壺の破片には (第34図6) 外面に波状文が施される。第32図1~4は壁土である。すべての壁土は被熱により土器状を呈している。1、2には割竹材による木舞組の痕跡が認められる。材である竹の太さは径約2cmを測る。胎土中には植物繊維が含まれており、ひび割れ防止のために混和材として使用されたと考えられる。3には、建造物 (家屋?) の内外面部分と思われる平坦面がある。厚さは約4.5cmを測り、この壁が使用されていた建物壁面の厚さが推測される。壁表面は比較的丁寧なナデ調整が施されている。中心部には基礎部材と思われる1辺約1.8cmの方形を成す炭化プランが確認できる。また、1~4には上塗り等は行われておらず、すべて荒塗り (荒壁) である。

SK021 (第35図) には、京都系土師器皿 (1~13)、青花碗 E 群 (14)、備前焼擂鉢 (15) がある。京都系土師器は、器厚が厚く、外面のナデが強いものがみられる。備前焼擂鉢は内面の掘り目の状況から乗岡編年の中世V期に該当すると考えられる。



第32図 33SK020・021出土土製品 (S=1/4)

33SD010出土遺物 (第36図)

古代に帰属する遺物が多く認められたが、これらが出土する層の下部より中世後期の遺物が出土したため当該期に比定される。なお、古代の資料に関しては、掘り返し層から見つかったことから考えると調査区の周辺、もしくは中世の達成以前に古代の遺構が広がっていた可能性を示唆するものである。

出土遺物には、平瓦(1)、丸瓦(2)、在地系土師器の坏口縁部(灰茶土1)、瓦器皿口縁部(暗灰茶土1)、底部(暗灰茶土2、3)などがある。丸瓦には凸面に一部丹塗りの痕跡があり、また凹面には布目痕跡が認められる。在地系土師器の坏は、器表面が磨耗しているものの内面にロクロ痕跡が確認されることから15世紀後半代に比定されると考えられる。

33SX018出土遺物 (第37図)

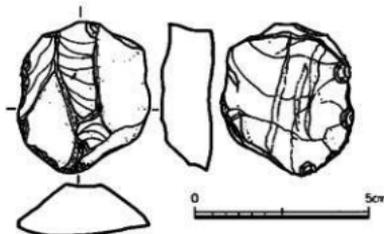
出土遺物には、京都系土師器皿、朝鮮産青磁香炉(灰茶ブロック土3)、備前焼掛け花入れ(灰色土3、灰茶ブロック土6)、黒軸陶器壺(灰茶ブロック土4、5)、産地不明の焼締陶器破片(灰茶ブロック土7)がある。朝鮮産青磁香炉は被熱により本来の軸調を失っている。胎土は灰白色を呈し細い黒色微粒子を含んでいる。一部欠損しているが四脚になるものと思われる。また、高台部に砂目が四ヶ所付着しており、16世紀末～17世紀初頭頃に比定されると考えられる。黒軸陶器は一部被熱により軸が剥がれている。胎土は淡灰色をしており、小石や黒色粒子、白色微粒子を含んでいる。焼締陶器破片は褐色味を帯びた色調をしており、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を多く含む。また、一部軸剥ぎが行われている。灰色土3のものは、直線的な器形を有し、端部は外側に突出する。また、焼成以前に外方から穿孔が施される。灰茶ブロック土6は緩やかに外反しながら直線的に伸びる。口縁部付近には穿孔の痕跡がみられるが、内面まで達していない。

33SX023、024出土遺物 (第37図)

SX023は燭台である。上面は欠損している。SX024は京都系土師器皿である。器厚は厚く、口縁部は外反する。内面には「の」の字ナデが施される。

茶褐土出土遺物 (第33図、第38図)

在地系土師器小坏、坏(1、2)、京都系土師器皿(3～5)、中国産白磁(6、7)、産地不明白磁(8)、中国産青磁(9～13)、産地不明の青磁碗(14)、備前焼短頸壺(15)、産地不明焼締陶器壺(16)、などがある。6は大宰府分類の碗Ⅳ類、7は口縁端部の軸が掻き取られていることから大宰府分類の碗Ⅳ類に比定される。8は黄白色の陶器質の胎土を有し、全体的な軸調も黄色味がかかった乳白色を呈している。国産(瀬戸産?)の可能性も考えられる。9は大型品になると思われ、鉢または大碗になると考えられる。内外面に目跡がみられ、胎土は粗く、やや橙白色を呈す。底部付近は軸が掻き取られている。底部は平高台になる。越州窯系青磁Ⅱ類の可能性はあるが、胎土がやや異なるため明確ではない。10は小坏または鉢で、端部が外反する。胎土は白灰色を呈し、軸調は淡黄緑色をしているが、器表面が熱を受けていることから本来の色調は失っている。口縁部内面に一部文様が施されている。11は青磁の輪花皿である。軸調は白緑色を呈す。12は龍泉窯系青磁の盤の高台部である。12は青磁碗である。13は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の底部である。14は口縁端部を短く外反するが、全体的には直線的な器形をしており、器壁も薄い。胎土は暗灰



第33図 茶褐土出土土製品(S=2/3)

色で、白色微粒子を少量含んでいる。軸調は緑灰色を呈し、器表面に貫入が多くみられる。産地は不明である。15は備前焼の短頸壺である。外面に上線が確認できる。16は産地不明の焼締陶器の壺口縁部である。端部上面は跳ね上げ気味に立ち上がる。胎土は淡灰黄色を呈しており、還元化が不十分な状態である。第33図は火打ち石である。長さ4.45cm、幅4.8cm、厚さ1.5cm、重量は31.8gを測る。風化が激しく、弥生時代以前に剥離され、上半が折れた剥片を2次利用していると考えられる。縁辺の細かい剥離面と表面の線上及び周縁が潰れている箇所については、内面の新鮮な黒色部分が露出しており、火打ちの使用痕と推察される。

褐色土・灰褐色土・表土出土遺物（第39図）

褐色土からは備前焼の壺（2）、唐津系の皿底部（1）、灰褐色土からは肥前系陶磁器の猪口、表土からは薄手の京都系土師器皿（1）、中国産白磁碗類の底部（2）、中国産焼締陶器の播鉢（3）が出土している。この播鉢は、口縁端部が玉縁状を呈し、胎土は明灰色をしている。非常に薄手である。

5. 小 結

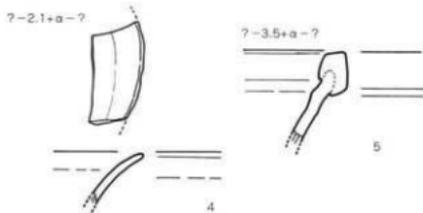
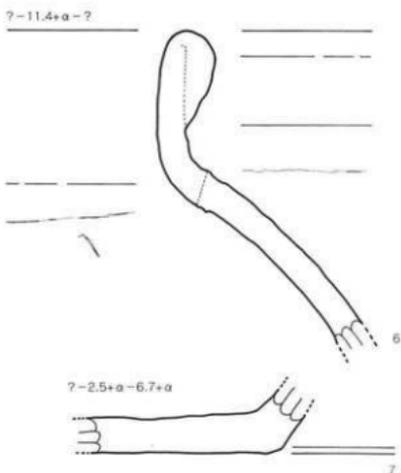
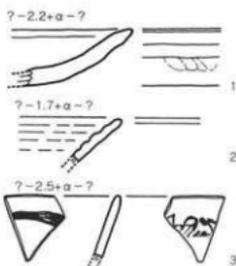
今回の調査は、遺構の配置状況の確認を主たる目的としたため、遺構の掘り下げについては殆ど行っていない。しかし、府内町の南限部分で、調査区を縦断する程の大規模な溝状遺構（SD010）が見つかったこと、戦国期の遺構が当該地まで広がっていたことが確認できたのは大きな成果といえよう。

33次調査区は、「府内復原想定図」によると、該当する町名は見当たらず、南東端部に位置する。遺構全体の様子を見ると、県教委の町屋部分調査で確認されるような遺構の状況は看取できない。柱穴などの遺構についても、それほど重なり合いはなく、遺構密度は低いようである。よって、当時の様子は比較的閑散としていたと考えられる。

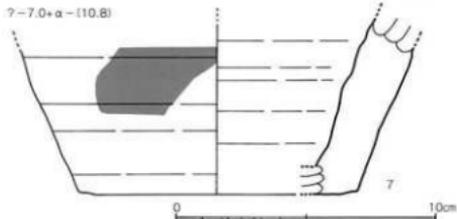
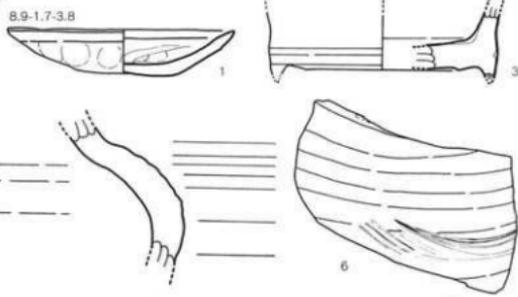
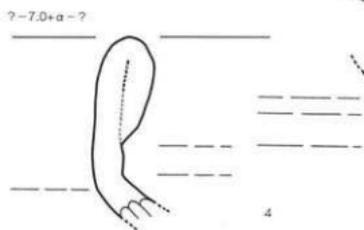
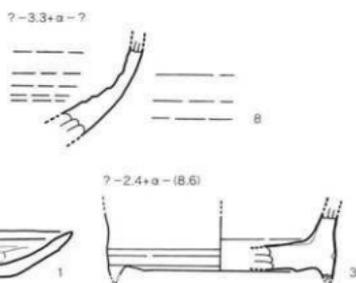
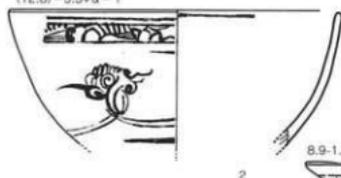
このような中で、SX018からは備前焼掛け花入れ、朝鮮産青磁香炉など茶道具に関係する品々が出土してより、共にみつかった京都系土師器の年代観から16世紀末頃に比定される。SX018の南側には火災処理土坑SK020・021がある。この遺構からは、SX018のものと同時期と思われる京都系土師器が出土している。その遺物中には注目すべきものとして、被熱した壁土が10点前後含まれていた。この壁土は残りが良く、土壁構築時の基礎とされる木舞組の跡が認められる。使用されていた材は、その痕跡から竹（割竹）であると考えられる。また、一部壁面の内外になる面を有す資料があり、それから推測するには、建物壁は約4.6cmであることが分かる。周辺には、SK020・021の埋土と同様な焼土を含む柱穴が検出されている。柱痕跡も明瞭に残しており、柱径は約10cm前後と推定され、やや小規模な建物を構成していたと思われる。壁土は比較的耐久力があり、防火にも優れている。中世前半期には壁土を防火対策として採用した例もあることから、16世紀末段階にはある程度広まっていたことは容易に想像できる。さて、先に茶道具が出土している遺構について触れたが、時期や遺構間の位置関係、周囲の柱穴群の配置などを踏まえると、SK020・021からみつかった壁土は、これら茶道具を収納する建物（倉？）に使われていた可能性は十分考えられる。壁土や焼土塊などは、遺物の中では軽視されがちである。しかし、当時の建築様式や部材などを伝える好資料であり、建物を復元する際に重要な役割を果たすものである。様々な要因が整えば遺跡の性格を検討できるものになるといえる。

33SD010は、掘り下げた地点が極一部であるため、時期については、15世紀後半には埋没はじめていたという段階に留めて置きたい。過去の大友府内町跡の調査結果によると、7・8次調査で15世紀代の大型の溝が検出されている。15世紀、特に後半頃になると全国的に戦乱の世となり、そのことは大友氏に関しても例外ではなく、そのため、これら大規模な溝状遺構は惣構的な機能を有していたのではないだろうか。「府内古図」は、戦国末期の状況を色濃く伝えるが、それ以前については不明な部分が多い。今後、15世紀代の遺跡の検討を行ない、16世紀後半の城下町に到る過程について考えていく必要がある。

33SX019 暗灰褐砂



339K020 暗灰素土
(12.8)-5.3+a-?

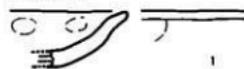


0 10cm

第34圖 33SX019、SK020出土遺物 (S=1/2)

339K020

?-2.2+a-?



1

?-1.9+a-?



2

?-3.9+a-?



3

339K021

(12.4)-1.3+a-?



1

?-1.8+a-?



?-1.1+a-?



5

(11.8)-2.8+a-?



2

?-1.7+a-?



?-2.1+a-?



7

(13.8)-1.9+a-?



3

?-2.0+a-?



?-1.0+a-?



11

?-1.1+a-?



?-1.0+a-?



12

?-3.0+a-?



14

?-1.5+a-?

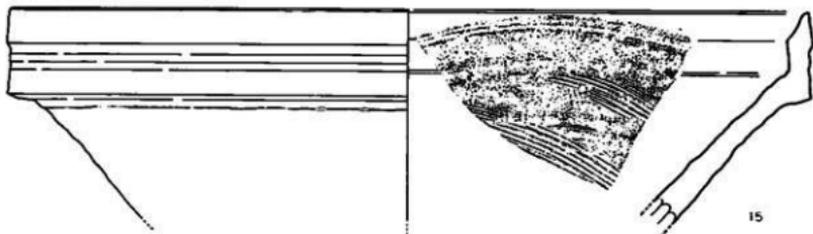


?-1.1+a-?



13

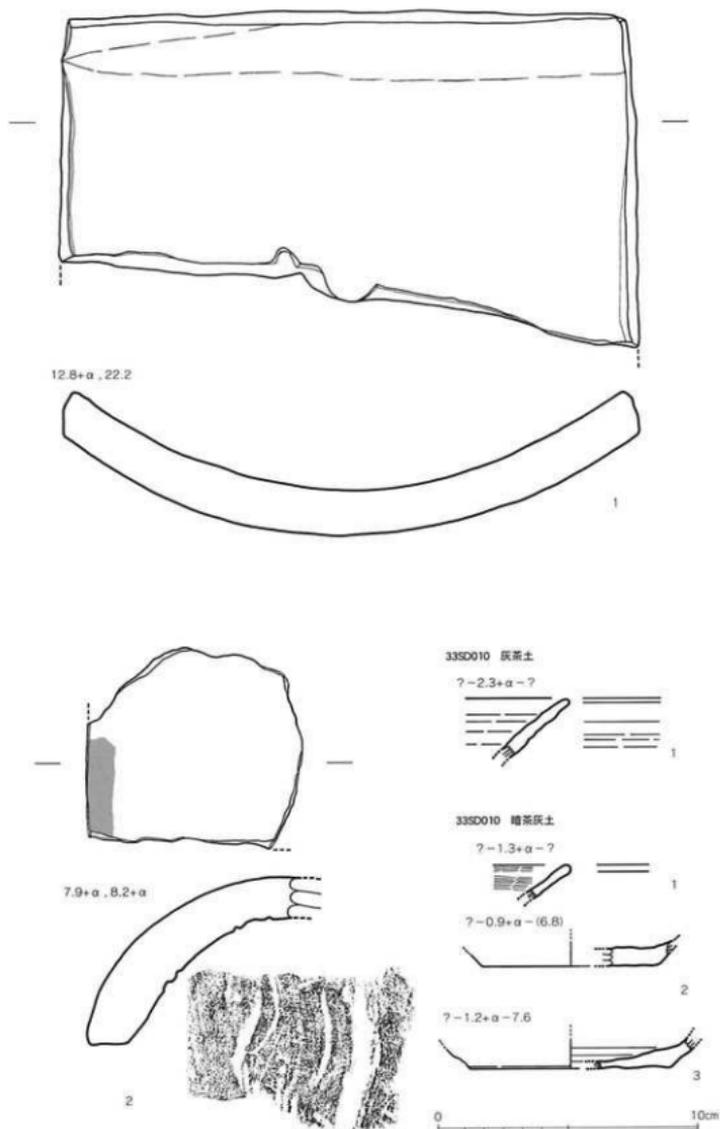
(30.8)-8.3+a-?



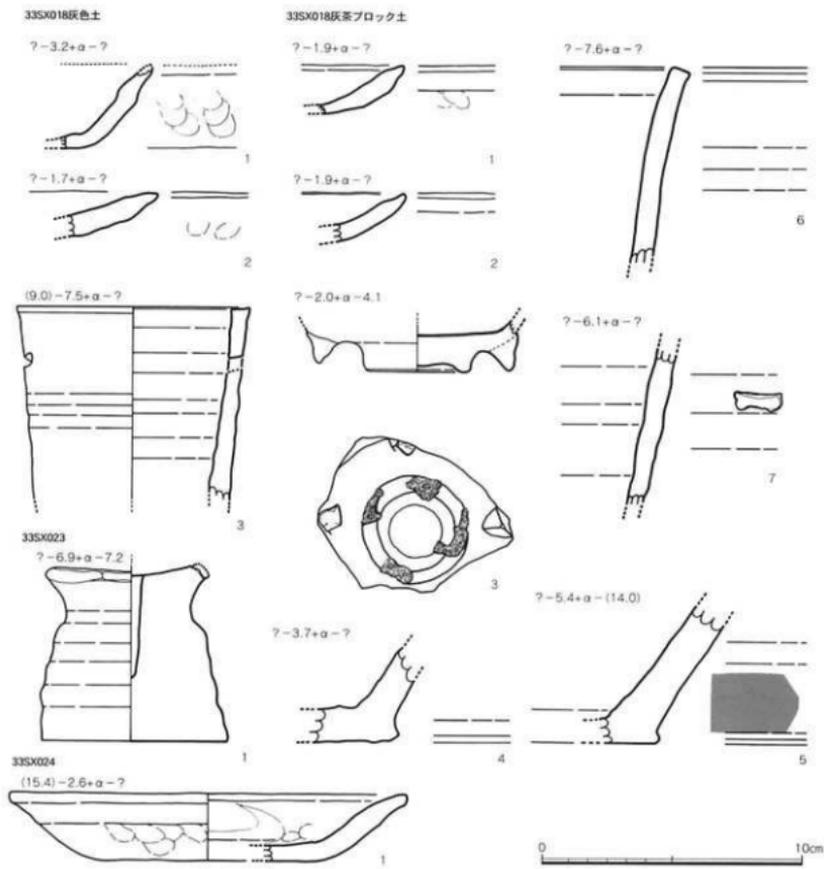
15

0 10cm

第35圖 33SK020・021出土遺物 (S=1/2)



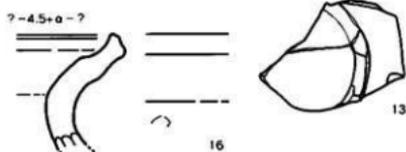
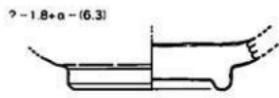
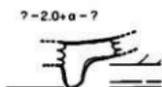
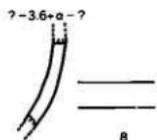
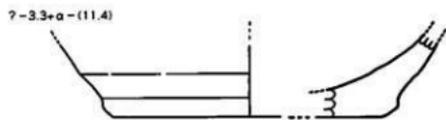
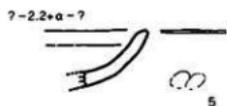
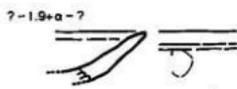
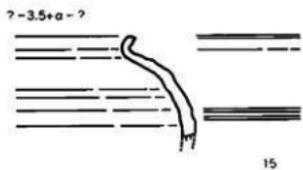
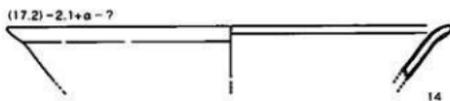
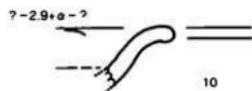
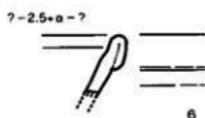
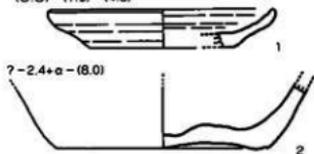
第36圖 33SD010出土遺物 (S-1/2)



第37圖 33SX018・023・024出土遺物 (S=1/2)

茶褐土

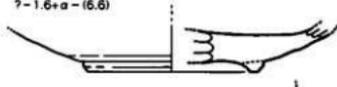
(8.8)-(1.5)-(4.8)



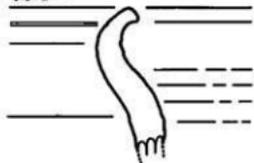
第38圖 茶褐土出土遺物 (S=1/2)

褐色土

7-1.6+a-(6.6)



7-5.3+a-?



灰褐色土

7-1.7+a-2.6



表土

115.0-2.3+a-?



7-2.3+a-?



7-2.1+a-?



0

10cm

第39図 褐色土、灰褐色土、表土出土遺物 (S=1/2)

表1 中世大友府内町跡第33次調査遺構番号台帳

S番号	遺構番号	種類	層位	切り合い	時期	地区番号
1	33SD001	溝状竈溝	灰色土	10-1		E10
2		溝まり状	茶褐色土	10-2		E11
3	33SD003	溝状竈溝	暗茶褐色土→灰褐色土	10-3		E11
4	33SD004	溝状竈溝	灰褐色土→褐色土	10-4		E11
5		小穴	灰色土			C8
6	33SD006	溝状竈溝?	灰色土			C8
7	33SD007	溝状竈溝?	茶褐色土			C8
8	33SD008	溝状竈溝	茶褐色土			C8
9		小穴	暗茶褐色土			C9
10	33SD010	溝状竈溝	灰茶粘質土+砂礫層→茶色ブロック土 →茶褐色土→灰茶粘質土→茶色ブロック土 →暗茶褐色土→淡茶褐色土→茶褐色土→淡茶褐色土 →茶褐色土→暗茶褐色土→暗茶褐色土→淡茶褐色土 →茶褐色土→茶褐色土→暗茶褐色土→茶褐色土→ 暗茶褐色土→暗茶褐色土→茶褐色土→暗茶褐色土 →灰色土→褐色土	図中穴落 10-1, 2, 3, 4, 5 6, 8	15世紀~	C3
11		小穴				E6
12	33SX012	土坑	茶褐色土	16-12		H5
13		土坑	灰褐色土			G5
14		土坑?	灰色土			F4
15	33SA015	竈列状遺構	a 茶褐色土 b 茶褐色土→灰茶褐色土 c 暗茶褐色土→茶褐色土 d 暗茶褐色土→茶褐色土 e 茶褐色土→灰色土 f 茶褐色土→灰色土 g 灰茶褐色土 h 茶褐色土→灰茶褐色土	15-8		E7
16		土坑?	灰色土	16-12		H5
17	33SD017	溝状竈溝	灰色土	22-17		G3
18	33SX018	土坑?	灰茶ブロック土→灰色土			F5
19	33SX019	砂層埋内	灰色砂	S-21と44		G6
20	33SX020	狭土坑	黄土・炭化物層→灰色土	20-21		G6
21	33SX021	土坑	暗茶褐色土→灰色砂→黄土・炭化物層	20-21		G6
22	33SX022	土坑	灰褐色土→灰茶褐色土→茶褐色土	22-17		G3
23	33SX023	井戸?	灰茶ブロック土→暗茶褐色土→暗茶褐色土 暗茶褐色土→灰褐色土→暗茶褐色土→明茶褐色土 →茶褐色土→茶褐色土→灰色土			F6
24	33SX024	小穴	黄土			F5
25	穴蓋					
26		小穴				F5

表2 中世大友府内町跡第33次調査出土遺物一覧表1

S-2茶褐色	
在地系土師器	環(イト) 破片

S-3灰褐色	
京都系土師器	皿(薄手)
在地系土師器	小皿a(イト) 環(白色系、薄手) 環(口口強)
甕前焼	指鉢(甕前焼?)
須恵系	甕破片
土師器	破片
石製品	チャートC
その他	玉砂利(白)

S-4褐色土	
在地系土師器	灰底部、小皿口縁部、環×皿(イト)
甕前焼	施釉陶器破片(産地不明)
土師器	環c、環e、山崎系二重口縁部、裂口
その他	玉砂利(黒、白)

S-4灰褐色	
在地系土師器	環(イト)、鉢×皿、 破片(白色系含む)

S-5灰色土	
須恵系	甕破片

S-6茶褐色	
在地系土師器	環
中国産陶器	破片①(磁甕高系)
瓦器	埴(前遺II-1)
須恵系	甕破片、鉢?
土師器	蓋c
その他	焼土塊、玉砂利(白)

S-7褐色土(=茶褐色)	
京都系土師器	皿(厚手、ナテ強)
在地系土師器	環、火鉢?
白磁(中国産)	環①、碗①(京徳類産)、皿破片①
甕前焼	蓋? 風、破片
瓦質土器	指鉢
須恵系土器	甕×蓋
須恵系	甕×蓋
土師器	蓋c、環c
瓦	平瓦破片
土製品	土罐
金属製品	鉄釘?
その他	玉砂利(白)

S-10	
在地系土師器	小皿?
瓦	平瓦破片②、丸瓦破片③

S-10暗茶褐色土(=茶褐色)	
在地系土師器	小皿、環×鉢
瓦質土器	破片
須恵系	甕c、環?、甕×蓋
土師器	環c、金飯頭鉢、鉢
黒色土器A類	陶器台座
石製品	円形石製品(結晶片岩)

S-10灰色土	
在地系土師器	環口縁部、環底部、小皿口縁部
瓦質土器	皿×環
須恵系	鉢?
須恵系	甕×蓋
土師器	環底部(ヘラ切り)、小皿口縁部破片
土製品	土罐
金属製品	鉄釘

S-10暗灰褐色土(=暗灰褐色)	
在地系土師器	環口縁部(褐色)、環(薄手 白色) 小皿(イト)、皿(精製土)

在地系土師器	環×皿
中国産白磁	破片①
瓦器	環口縁部、破片
瓦質土器	火鉢?
須恵系土器	甕×蓋
須恵系	環c、甕×蓋
土師器	環c、環e
黒色土器A類	埴
瓦	平瓦?
土製品	土罐
金属製品	棒状鉄製品、銅銭

S-10茶色土	
在地系土師器	小皿口縁部、環×皿
土師器	環d?、鉢底部?
石製品	黒曜石C(岐阜産)

S-11暗灰土	
瓦	丸瓦破片①

S-12	
土製品	土罐

S-13灰褐色	
在地系土師器	環×皿、破片

S-14灰色土	
在地系土師器	破片
土師器	環×皿(都築系)
その他	玉砂利(黒色)

S-16	
土師器	破片

S-18灰色土	
京都系土師器	環?、皿(厚手)
在地系土師器	破片、火鉢?
青花	碗D群?①
甕前焼	花皿、破片
その他	焼土、玉砂利(黒色)

S-18灰茶ブロック土	
京都系土師器	皿(厚手)
中国産陶器	黒釉陶器×蓋②、捺繪陶器③④
朝鮮陶磁器	青花香炉(李朝?)①
甕前焼	餅付花入れ

S-19暗灰褐色土(=灰色砂、灰褐色)	
京都系土師器	皿(やや厚手)
在地系土師器	環破片
青花	碗(前州系)①、碗E群破片① 破片①
白磁(中国産)	甕×皿(前田E群?)①
中国産陶器	鉢口縁部①
朝鮮陶磁器	甕?②
甕前焼	小皿、甕×蓋
金属製品	鉄釘?
その他	焼土

S-20暗茶褐色土(=焼土・焼土・黒灰土)	
京都系土師器	皿(厚手、ナテ弱)
青花	碗E×D群②
青磁(中国産)	香炉①
朝鮮陶磁器	甕?①
甕前焼	環口縁部?、蓋
瓦	平瓦?
金属製品	鉄釘、棒状鉄製品
石製品	磁石(砂岩)
その他	楕円形石製品(泥岩?) 焼土

表3 中世大友府内町跡第33次調査出土遺物一覧表2

S-21焼土層 (=暗灰茶土・焼土ブロック・茶灰土)	
京都系土師器	皿(厚手、ナデ強・弱)、小皿
在地系土師器	皿(薄手、ナデ弱)
在地系土師器	灰碗片、杯×皿
青花	陶C群②、高台部破片①
青磁(中国産)	龍泉窯系青磁碗Ⅱ類破片①
備前焼	甕×蓋破片、
	甕?、楕円口縁部
その他	甕土、玉砂利(黒)
S-22灰茶土 (=暗灰茶土)	
在地系土師器	杯×皿
須恵器	破片
金属製品	板状銅製品
S-23	
在地系土師器	破片、燗台
S-24	
京都系土師器	皿(厚手、ナデ強)
暗灰焼土	
京都系土師器	皿(薄手)
土師器	破片
茶焼土	
京都系土師器	皿(厚手、薄手)
在地系土師器	杯(厚手、薄手)、小皿、土鍋、火鉢
青花	陶E群①
中国陶器	破片(磁道窯系)、不明陶器破片
	黒釉陶器遺×甕①
青磁(中国産)	陶高台部①、龍泉窯系碗Ⅰ類②、
	龍泉窯系小IV類①、輪花皿①、
	大皿①(龍泉窯系?)
	越州窯系青磁碗Ⅱ類①?、破片④
白磁(中国産)	陶IV類①、陶V類①、陶Ⅷ類①、
	陶破片③、小杯(端反り)①
朝鮮陶磁器	破片②、青磁碗①?
国産陶器	肥前系陶器破片、肥前系染付破片
	陶胎染付破片、菊皿、
	京焼黒陶器破片
備前焼	甕×蓋破片、小甕破片、甕口縁
	甕?
瓦器	皿?
瓦質土器	瑠鉢、鉢口縁部、罎
緑釉陶器	破片
須恵器土師器	鉢?
須恵器	甕破片、志破片、蓋皿×IV
土師器	杯(龍崎系?)、杯d、杯e、碗c?、
	傘紋型甕、甕(タタキ型?)
養生土器	甕破片
表土	
京都系土師器	皿(厚手、薄手)
在地系土師器	杯、小皿
青花	陶C群①、破片①
中国陶器	鉢①、黒釉陶器①
青磁(中国産)	龍泉窯系青磁碗B類?①
	龍泉窯系青磁碗Ⅱ類①
白磁(中国産)	陶Ⅷ類①、器種不明①
国産陶器	甕(産地不明)、唐津系鉢?
	肥前系染付碗・皿、印判手破片、
	京焼黒陶器破片、肥前系白磁碗、
	焼締陶器(産地不明)
備前焼	甕×蓋、瑠鉢、鉢
須恵器	杯c、甕破片
土師器	鉢a、?c、甕破片
瓦	平瓦②
土製品	土鍋
石製品	チャートC・CORE
その他	甕土
金属製品	銅銭(開元通宝)

石製品	磁石?(赤岩、砂岩)、安山岩F、
その他	甕土、玉砂利(黒色)
	火打石

灰焼土	
在地系土師器	杯、杯(白色系)、
	小皿
国産陶器	肥前系小杯
備前焼	甕、小甕
緑釉陶器	破片
瓦質土器	破片
須恵器土師器	瑠鉢、こね鉢、甕破片
金属製品	不明銅製品

褐色土	
京都系土師器	皿(厚手)
在地系土師器	杯、小皿
白磁(中国産)	陶V類②
国産陶器	唐津系皿、青磁染付破片、筒型甕、
	肥前系染付碗、端反り碗
備前焼	志破片
須恵器	破片
土師器	杯
養生土器	甕底
瓦	瓦瓦①
石製品	黒曜石F(岐阜産)
その他	甕土、加工陶磁器破片

灰色土	
京都系土師器	皿(薄手)
在地系土師器	破片
青花	陶C群①
青磁陶磁器	産地不明白磁破片①
国産陶器	破片(結果?)
瓦質土器	瑠鉢

※ 石製品でCはCHIP FはFLAKの略

表4 中世大友府内町跡第33次調査出土遺物観察表1

遺物番号	R番号	図版番号	種類	器種	口径	器高	底径	底部処理
S-7 陶灰土	001		土製品	土埴	長さ2.2+ α	幅0.9	-	-
S-10	001		瓦	平瓦				-
S-10	002		瓦	丸瓦	長さ7.9+ α	幅8.2+ α		-
S-10 暗茶灰土	001		土師器(在地系)	坏	?	0.9+ α	(6.8)	ヘラ切り後ナデ
S-10 暗茶灰土	002		土師器(在地系)	坏	?	1.2+ α	7.6	糸切り後ナデ
S-10 暗茶灰土	003		瓦器×瓦質土器	皿	?	1.3+ α	?	-
S-10 灰茶土	001		土製品	土埴	長さ3.9+ α	幅1.0	-	-
S-10 灰茶土	002		土師器(在地系)	坏	?	2.3+ α	?	-
S-12	001		土製品	土埴	長さ3.8+ α	幅1.3	-	-
S-18 灰色土	001		京都系土師器	坏 口縁部片	?	3.2+ α	?	-
S-18 灰色土	002		京都系土師器	皿×坏 口縁部片	?	1.7+ α	?	-
S-18 灰色土	003		焼締					
F5 茶褐色土			備前	掛花入れ	(9.0)	7.5+ α	?	-
S-18 灰茶ブロック土	001		焼締 備前	掛花入れ	?	7.6+ α	?	-
S-18 灰茶ブロック土	002		黒釉陶器	壺×甕×鉢	?	5.4+ α	2.0+ α	ナデ?
S-18 灰茶ブロック土	003		焼締 備前	鉢×壺	?	6.1+ α	?	-
S-18 灰茶ブロック土	004		京都系土師器	皿	?	1.9+ α	?	-
S-18 灰茶ブロック土	005		青磁(朝鮮?)	4足脚付高台	?	2.0+ α	4.1	-
S-18 灰茶ブロック土	006		黒釉陶器	壺×甕	?	3.7+ α	?	ケズリ?
S-18 灰茶ブロック土	007		京都系土師器	皿	?	1.9+ α	?	ナデ
S-19 暗茶褐色土 S-20 焼土塊	001		焼締 備前	甕 底部片	?	3.9+ α	?	糸切り
S-19 暗茶褐色土	002		土師器(在地系)	坏	?	1.7+ α	?	-
S-19 暗茶褐色土	003		京都系土師器	皿	?	2.2+ α	?	-
S-19 暗茶褐色土	004		焼締陶器 (中河原)	鉢	?	3.5+ α	?	
S-19 暗茶褐色土	005		赤付 (沼州系)	碗 口縁部	?	2.5+ α	?	-
S-19 暗茶褐色土	006		焼締 備前	甕 底部片	?	2.5+ α	6.7+ α	
S-19 暗茶褐色土 S-21 茶灰土	007		焼締 備前	甕 口縁部	?	11.4+ α	?	-
S-19 暗茶褐色土	008		白磁(B-2)	碗×皿	?	2.1+ α	?	
S-19 茶褐色土	001		焼締陶器	備前焼 壺	?	3.3+ α	?	-
S-20 黒灰土	001		赤付 (景徳院窯)	碗 B群	(12.8)	5.3+ α	?	
S-20 黒灰土	002		土製品	埴土	長さ10.9+ α	幅4.2+ α		?
S-20 焼土	001		焼締 備前	甕 底部	?	4.1+ α	?	糸切り
S-20 焼土	002		焼締 備前	甕 口縁部	?	7.0+ α	?	-
S-20 焼土	003		京都系土師器	小皿	8.9	1.7	3.8	ナデ

表5 中世大友府内町跡第33次調査出土遺物観察表2

遺物番号	R番号	図版番号	種類	器種	口径	器高	底径	底部処理
S-20 焼土	004	第34図	青磁(龍泉系)	脚付香炉	?	2.4 + α	(8.6)	-
S-20 焼土	005	第35図	焼締 備前	壺	?	3.9 + α	?	-
S-20 焼土	006	第34図	焼締 備前	壺	?	7.0 + α	(10.8)	ナデ
S-20 焼土	007	第32図	土製品	壺土	長さ7.1 + α	厚さ1.75		
S-20 焼土	008	第32図	土製品	壺土	長さ4.2 + α	厚さ4.55		
S-20 焼土塊	001	第35図	京都系土師器	坏	?	2.2 + α	?	-
S-20 焼土塊	002	第35図	青花 (京徳系)	碗 E群	?	1.9 + α	?	-
S-20 茶灰土	001	第32図	土製品	壺土	長さ6.2 + α	厚さ3.5		
S-21 茶灰土	001	第35図	京都系土師器	皿	(11.8)	2.8 + α	?	-
S-21 茶灰土	002	第35図	京都系土師器	皿	?	2.1 + α	?	-
S-21 茶灰土	003	第35図	土師器(在地系)	皿 口縁部片	?	1.1 + α	?	-
S-21 茶灰土	004	第35図	京都系土師器	皿 口縁部片	?	1.7 + α	?	-
S-21 茶灰土	005	第35図	土師器 (京都系?)	坏片	?	1.0 + α	?	-
S-21 茶灰土	006	第35図	焼締 備前	钵鉢	(30.8)	8.3 + α	?	-
S-21 茶灰土	007	第35図	京都系土師器	皿 口縁部片	?	1.8 + α	?	-
S-21 茶灰土	008	第35図	京都系土師器	皿 口縁部片	(12.4)	1.3 + α	?	-
S-21 茶灰土	009	第35図	京都系土師器	皿 口縁部片	?	2.0 + α	?	-
S-21 茶灰土	010	第35図	土師器(在地系)	坏 口縁部片	?	1.5 + α	?	-
S-21 茶灰土	011	第35図	京都系土師器	皿	(13.8)	1.9 + α	?	-
S-21 茶灰土	012	第35図	京都系?土師器	皿 底部片	?	1.0 + α	?	-
S-21 茶灰土	013	第35図	土師器(在地系)	坏 部片	?	1.1 + α	?	-
S-21 茶灰土	014	第35図	京都系土師器	皿?	?	1.1 + α	?	-
S-21 茶灰土	015	第35図	青花	碗E群口縁部	?	3.0 + α	?	-
S-23	001	第37図	土師器	燗台	?	6.9 + α	7.2	糸切り
S-24 焼土	001	第37図	京都系土師器	皿	(15.4)	2.6	?	ナデ
D10 茶褐土	001	第38図	土師器(在地系)	坏	?	2.4 + α	(8.0)	回転糸切り
D10 茶褐土	002	第38図	焼締陶器	甕 口縁部	?	4.5 + α	?	-
D E 11 茶褐土	003	第38図	白磁	碗?胴部	?	3.6 + α	?	-
D E 11 茶褐土	004	第38図	国産?青磁	碗	?	1.8 + α	(6.3)	回転ヘラケズリ
D E 11 茶褐土	005	第38図	青磁	碗	(17.2)	2.1 + α	?	-
D E 11 茶褐土	006	第38図	青磁	碗?	?	3.3 + α	(11.4)	回転ヘラケズリ
G 2 トレ 茶褐土	007	第38図	青磁	皿	?	2.5 + α	?	-
G 2 トレ 茶褐土	008	第38図	京都系土師器	皿 口縁部	?	2.2 + α	?	-
G 2 トレ 茶褐土	009	第38図	土師器(在地系)	小皿	(8.8)	(1.5)	(4.8)	
G 5 茶褐土	010	第38図	京都系土師器	皿	?	1.9 + α	?	-

表6 中世大友府内町跡第33次調査出土遺物観察表3

遺物番号	R番号	図版番号	種類	器種	口径	器高	底径	底面処理
I 9 茶褐土	011	第38図	白磁 IV類	碗	?	2.5+ α	?	-
D 9 茶褐土	012	第38図	青磁	碗	?	2.0+ α	?	-
E 12 茶褐土	013	第38図	白磁	坏×皿	?	1.9+ α	?	-
E 12 茶褐土	014	第38図	青磁(龍泉窯系)	坏×皿	?	2.9+ α	?	-
G 5 茶褐土	015	第38図	京都系土師器	皿	?	1.5+ α	?	-
G 5 茶褐土	016	第38図	焼締 備前	甕 口縁部	?	3.5+ α	?	-
茶褐土	017	第33図	石製品	火打石	長さ4.45	幅4.8	重量31.8g	-
G 4 褐色土	001	第39図	焼締 備前	蓋	?	5.3+ α	?	-
G 4 褐色土	002	第39図	陶磁器(唐津)	皿	?	1.6+ α	(6.6)	ナデ
E 12 灰褐土	001	第39図	染付 肥前陶磁	小坏	?	1.7+ α	2.6	-
表土	001	第39図	焼締陶器	鉢	?	2.1+ α	?	-
表土	002	第39図	白磁	碗 高台部	?	2.3+ α	?	ケズリ
表土	003	第39図	京都系土師器	皿 口縁部	(15.0)	2.3+ α	?	-



写真1 33SD010土層観察時（西より）



写真3 33SK020・021土層観察時（南より）



写真2 33SD010全景（西より）

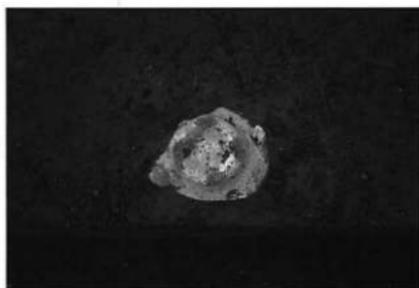


写真4 33SX018香炉出土状況

報告書抄録

ふりがな	おおいたし しなにいせきかくにんちょうさがいほう							
書名	大分市 市内遺跡確認調査概報 -2003年度-							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	池田千太郎・塩地潤一・中西武尚・佐藤道文・五十川雄也・羽田野達郎・松竹智之・羽田野裕之							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よこいへき 横尾遺跡第86次	大分県大分市横尾	44201		33° 34' 16"	131° 14' 30"	20020911~20030331	206	確認調査
よこいへき 横尾遺跡第87次	大分県大分市横尾	44201		33° 34' 15"	131° 14' 29"	20020911~20030331	228	確認調査
よこいへき 横尾遺跡第88次	大分県大分市横尾	44201		33° 34' 9"	131° 14' 33"	20030212~20030331	2,856	確認調査
よこいへき 横尾遺跡第82-3次	大分県大分市横尾	44201		33° 34' 15"	131° 14' 31"	20030516~20040331	125	確認調査
じょうほろまといへき 城原・里遺跡第7次	大分県大分市里	44201		33° 37' 12"	131° 16' 34"	20030729~20031031	654.1	確認調査
おおいへき 大友氏館跡第13次	大分県大分市顕徳町	44201	33051	35° 31' 17"	131° 16' 23"	20031117~20040331	486	確認調査
おおいへき 大友氏館跡第14次	大分県大分市顕徳町	44201	33051	33° 41' 15"	131° 16' 23"	20041215~	150	確認調査
おおいへき 大友氏館跡第15次	大分県大分市顕徳町	44201	33051	33° 31' 16"	131° 16' 23"	20040217~	70	確認調査
ちゅうがいしほらまといへき 中世大友府内町跡第32次	大分県大分市顕徳町	44201	322052	33° 31' 8"	131° 16' 18"	20030609~20030731	167	確認調査
ちゅうがいしほらまといへき 中世大友府内町跡第33次	大分県大分市大友大分	44201	322052	33° 31' 21"	131° 15' 48"	20030609~20030726	820	確認調査
ちゅうがいしほらまといへき 中世大友府内町跡第38次	大分県大分市顕徳町	44201	322052	33° 31' 21"	131° 16' 21"	20040212~20040329	210	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
横尾遺跡第86次	集落	縄文時代・近世	溝状遺構・柱穴跡・埋土層					
横尾遺跡第87次	集落	縄文時代・中世	貝塚・配石遺構・地床跡		縄文土器・姫島産黒曜石製石核・嵐子硯・陶磁器			
横尾遺跡第88次	集落	古墳・古代・中世	古墳・方形周溝遺構					
横尾遺跡第82-3次	集落	縄文時代	水場の遺構・土坑		縄文土器・姫島産黒曜石製大形石核			
城原・里遺跡第7次	官衙	飛鳥時代	大型竪立柱建物跡		須置器坏蓋・都城市土師器坏			
大友氏館跡第13次	居館跡	中世・近世	溝状遺構・覆土坑・隆起地盤		京郡系土師器・在地系土師器・白色系土師器			
大友氏館跡第14次	居館跡	中世・近世	大形覆土遺構・竪立柱建物跡		土師器坏・皿			
大友氏館跡第15次	居館跡	中世・近世	溝状遺構・柱穴跡		土師器坏・皿			
中世大友府内町跡第32次	集落	中世	溝状遺構・柱穴跡・土坑		奈良陶磁器・国内産陶磁器・京郡系土師器・不明青銅品			
中世大友府内町跡第33次	集落	中世・近世	溝状遺構・柱穴跡・火災処理土坑		青花・京郡系土師器・朝鮮産青磁香炉・火打石			
中世大友府内町跡第38次	集落	中世	溝状遺構・柱穴列		土師器坏・皿			

大分市 市内遺跡確認調査概報

—2003年度—

平成16年3月31日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2番31号

印刷 (有) 中央印刷
大分市願徳町2丁目2-38